Nihon University CST Department of Oceanic Architecture and Engineering

The architectural design works 2011

日本大学理工学部 海洋建築工学科

建築設計製図優秀作品集 2011

「結ぶ言葉 ―高レベル放射性廃棄物最終処分場と保存の提案―」渡部 亘

「愁いの果てに 空疎化した都市に心のアジールを」井上彩花

「ウミリアン」志萱侑太

「父さんの助手」藤本幸汰

「ポストの中から見た世界」山影悠時

「海のリゾートホテル」涌井 匠・伊藤春樹

「フミー（FU・MI・I）ブルーオイスター」亀田宏樹

「光の空間と安らぎ」白坂 真

「月島プリコラージュ ―東京都中央区月島地域における複合集合住宅の提案―」石原幹太

「対話の建築 ―日韓関係に呼応する多重メソッドによる変位空間―」榎本翔太

「掘割に立地する住宅」山川大喜・徳永尚亮

「鋼鉄の河」亀田宏樹

「殻ごもり」永沢僚平

「海の駅」海藤 航・青木秀史

「マキマキエビ」白坂 真

「エジプトのこれから」稲村綾人

「広島県大竹市小方地区における小中一貫校の提案 ―地域交流と体験活動を取り入れた新たな学校施設の設計―」永田陽子

「ライターの中の世界」荒木田祥平

「花と海の劇場 ～育てるまち久里浜～」榎 同子・榎本翔太・小山勇気

「時を刻む場所」平沼一滋

「乾かす空間」滝村菜香

「手術（オペ）という日の出」白坂 真

「動きがある空間」山中大河

「波」樋浦直紀

「はちのす」山崎未来

「点・線・面から空間へ」小口篤大・亀田宏樹・志萱侑太・滝村菜香・樋浦直紀・横山 巧

「未来に生きる誰かのために ―福島第一原発における封印機能をもった博物館の提案―」菅原雅之

「虫の気持ち」久保田颯

「仙台堀川のアートギャラリー十ショップ十カフェ」徳永尚亮・山川大喜

「太陽の柱」亀田宏樹

平成23年度　設計製図担当教員一覧

1年生（空間創造演習、設計製図Ⅰ）

桜井慎一（空間創造演習）／海洋建築工学科
近藤建雄（設計製図Ⅰ）／海洋建築工学科
山本和清（空間創造演習、設計製図Ⅰ）／海洋建築工学科
神野郁也（空間創造演習、設計製図Ⅰ）／神野郁也アーキテクツ
木内厚子（空間創造演習、設計製図Ⅰ）／STUDIO 8
鶴田伸介（空間創造演習、設計製図Ⅰ）／熊工房
長尾亜子（空間創造演習、設計製図Ⅰ）／長尾亜子建築設計事務所
前鶴謙二（空間創造演習、設計製図Ⅰ）／前鶴謙二設計研究所
松井正澄（空間創造演習、設計製図Ⅰ）／アトリエトド

2年生（設計製図Ⅱ、設計製図Ⅲ）

畔柳昭雄（設計演習Ⅱ）／海洋建築工学科
佐藤信治（設計製図Ⅲ）／海洋建築工学科
内海智行（設計製図Ⅱ、設計製図Ⅲ）／ミリグラムスタジオ
永曽琢夫（設計製図Ⅱ、設計製図Ⅲ）／谷口建築設計研究所
佐藤浩平（設計製図Ⅱ、設計製図Ⅲ）／佐藤浩平建築設計事務所
長井義紀（設計製図Ⅱ、設計製図Ⅲ）／長井義紀アーキ・スタジオ
松本成樹（設計製図Ⅱ、設計製図Ⅲ）／㈱日本設計
水本　光（設計製図Ⅱ、設計製図Ⅲ）／アーキデザインスタジオ
矢野一志（設計製図Ⅲ）／㈲ウィークサムズスタジオ

3年生（設計演習Ⅰ、設計演習Ⅱ）

佐藤信治（設計演習Ⅰ）／海洋建築工学科
畔柳昭雄（設計演習Ⅱ）／海洋建築工学科
井上武司（設計演習Ⅱ）／Tak 建築計画工房
玉上貴人（設計演習Ⅰ、設計演習Ⅱ）／タカトタマガミデザイン
鶴田伸介（設計演習Ⅰ）／熊工房
廣部剛司（設計演習Ⅰ、設計演習Ⅱ）／廣部剛司建築設計室
藤岡　尋（設計演習Ⅰ、設計演習Ⅱ）／㈱竹中工務店
光井　純（設計演習Ⅰ、設計演習Ⅱ）／光井純アンドアソシエーツ建築設計事務所㈱
矢野一志（設計演習Ⅰ）／㈲ウィークサムズスタジオ

4年生（総合演習Ⅰ、総合演習Ⅱ）

畔柳昭雄（総合演習Ⅰ）／海洋建築工学科
坪井塑太郎（総合演習Ⅰ）／海洋建築工学科
桜井慎一（総合演習Ⅱ）／海洋建築工学科
高島秀訓（総合演習Ⅱ）／高島秀訓計画設計室
近藤健雄（総合演習Ⅱ）／海洋建築工学科
佐藤信治（総合演習Ⅱ）／海洋建築工学科
山本和清（総合演習Ⅱ）／海洋建築工学科
井上武司（総合演習Ⅱ）／Tak 建築計画工房
筧　隆夫（総合演習Ⅱ）／㈳日本港湾協会

禁無断転載

「名古屋市における基幹的広域防災拠点の提案　―啓発機能を有した複合施設の設計―」細谷祥太

「稲毛海浜公園水族館」斉藤亮介・涌井　匠

「稲毛海浜公園総合プロジェクト　―マスタープランづくり―」涌井　匠

「うみの芸術祭　～変わりゆく町　くりはま～」
伊藤綾香・菅原雅之・寺崎康雄

「ノコギリウニ」五十嵐啓祐

「ミヤコヒナリキャンコ」久保田礼菜

「都市防災のための水域を活用した防災支援施設の提案」
大盛嘉一・小川雅人・絹見伸一

「光の奇妙な物語」佐藤和彦

「食魚ヒトデモドキ」久保田颯

「綿魚（Dandelion carp）」松本千穂

「仙台堀川の集合住宅　～アーティストたちが暮らす水辺の集住体～」
川崎　将・田原　拓・村松拓人

「形・素材ウォッチング」
滝村菜香・平沼一滋・多津田紗季・ソ　ニト・白坂　真・池上信太郎・藤本幸汰

「海の街に花が咲く」井上彩花・増田佳菜子・大竹和也

「ウォーターフロントに建つマイスペース」小松浩樹・木安玲王奈・白坂　真

日本大学理工学部
海洋建築工学科
〒 274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1
TEL：047-469-5420
URL: http://www.ocean.cst.nihon-u.ac.jp/

日本大学理工学部　海洋建築工学科

建築設計製図優秀作品集 2011

CONTENTS

1年生（空間創造演習、設計製図Ⅰ）…… 2

2年生（設計製図Ⅱ、設計製図Ⅲ）…… 12

3年生（設計演習Ⅰ、設計演習Ⅱ）…… 20

4年生（総合演習Ⅰ、総合演習Ⅱ）…… 29

卒業設計 …… 35

修士設計 …… 44

コンペ受賞歴一覧 …… 48

１年生（前期：空間創造演習、後期：設計製図Ⅰ）

【担当】 桜井　慎一
近藤　建雄
山本　和清
神野　郁也
木内　厚子
鶴田　伸介
長尾　亜子
前鶴　謙二
松井　正澄

空間創造演習（前期）

第１課題
「新種発見！　海の生物」
（出題：桜井慎一）

【課題主旨】
海には、実に多様な生物がたくさん存在しています。生息する海域の環境条件によって、海の生物は、大きさ、形、色、機能、動き方など、千差万別です。たとえば、深海に棲む生物の中には、とても神秘的で美しいもの、グロテスクだけど食料や医薬品の原料として将来利用が期待される有益な生物もいます。

そこで、あなたが発見した「新しい海の生物」を原寸の模型で制作してください。海に生息する生物なら、動植物なんでも結構です。模型で使用する材料は自由です。形、色、手触り、歯触り、におい、質感などが理解できる模型をつくってください。自由な発想、素材の工夫、華麗な表現を期待します。

【提出物】
(1)「新しい海の生物」の模型
(2) 制作した「新しい海の生物」に関する以下の事項を A4サイズ用紙にまとめたもの
①新しい生物の名称
②名称の由来
③発見した場所と主な生息海域・水深
④どのような場所に、どのように生息しているのか
⑤生息数と繁殖力、捕獲方法
⑥どのような特色がある生物か
⑦使った材料と工夫した点

【発表】
上記の提出物を使って、一人一人みんなの前で発表してもらいます。

【採点基準】
(1) 模型の出来具合
(2) シナリオの面白さ
(3) 発表のパフォーマンス

第２課題
「ミクロの決死隊」
（出題：神野郁也）

【課題主旨】
今回の課題は、普段見慣れたものへの視点を変えることから始まります。仮に、みなさんの体が１cm、１mm、あるいはミクロの単位にまで小さくなったとします。すると、いつも見慣れていた文具や家電など手に取ることのできる小さなものが、まるで未来都市や巨大な構築物のように見えるかもしれません。ミクロの大きさになったみなさんは、普段は外側からしか見ることのなかったものの中に入り、内部空間をじっくりと眺めることができます。見たことのない空間に入って周りの質感や表情を見つめます。細部まで想像してください。さまざまな驚きや発見があるでしょう。そして発見した内部空間のうち、もっとも魅せられた光景を表現してください。空間は意外なところにも存在します。あなたが選んだ内部空間を丁寧に描いてください。表現した空間にはタイトルをつけ、その空間の特徴を言葉で説明してください。

【提出物】
(1) B4ケント紙に鉛筆描き（裏面に担当講師氏名、学生番号＋氏名、描いた対象物とタイトルを記入）
(2) 作品タイトルと空間の説明文を記した A4サイズレポート用紙１枚。レポート用紙の最初に、同じく、上記（　）内を記入

【採点基準】
(1) 描く対象物への着眼点（誰でも知っている身近なものでありながら、一見とてもそのようには見えないというユニークな視点を選ぶこと）
(2) 空間の表現力（構図、陰影、素材感など）どう表現すれば空間というものが伝わるか
(3) 説明の的確さ（分かりやすい文章、的確な表現、タイトル）

第３課題
「光の空間」
（出題：前鶴謙二）

【課題主旨】
物体から反射された光は、眼球を通過し視神経を刺激して脳に至り、情報として認識されます。その際、光はその存在そのものより、視覚的な情報の媒体として多くの情報を与えてくれます。その情報は、自分と周辺環境との距離、ものの大きさ、色彩、テクスチャー等多岐にわたります。

一方建築の世界においては、光を単なる情報の媒体としてではなく、光の制御や誘導を行い、空間の演出手法として取り入れた、あるいは寺院や教会建築等にみられるように、宗教的なメッセージを空間表現とする等、優れた建築が多く見られます。

近年の建築は、明るさと均質性への追求、そして照明器具の発達等により、均一に明るい空間への嗜好が強く、外光を空間演出として捉えたものが少なくなりつつあります。

光を空間要素として捉え、光と影によって織りなす手法は、奥深さ、時間の推移、温度感、硬質感、動き等、表情が多様で饒舌な魅力的な空間を創ることを可能にします。

今回の課題は、この魅力的な手法を体験することです。５ｍ×５ｍ×５ｍの立方体の空間に、光の取り込みと制御を行い、思い思いの独創的な空間を作成してください。

その体験は、アイデアやイメージをスタディーして、スタディー模型へと展開して確認します。その結果が面白くなければ再度アイデアに戻り、模型にて確認する。この試行錯誤を多く重ねることによって可能となります。

【評価基準】
(1) 光と呼応する影の現象や表情が面白く表現された空間であるか。
(2) 採光に工夫や独自性があるか。
(3) 使用する材料を光の空間を表現するものとしているか。
(4) 表現したい空間のイメージやコンセプトが具現化できているか。

【提出物】
(1) 外形５ｍ×５ｍ×５ｍの内部空間をもつ立方体の模型　縮尺１/20
６面体の１面を取り外して模型内部を見ることができるようにする（底面裏側に学生番号、氏名を記入）
(2) タイトル、コンセプト、デザインの意図を A4にまとめたもの

第４課題
「点・線・面から空間へ」
（出題：長尾亜子）

【課題主旨】
この課題ではスケールを持込んで「空間」を思考し、たんなる部材の組合せが豊かな「空間」へと変化する手法について考察し、創造していきます。「空間」という概念がどのように論議され、〈スケール〉が建築においてどのような意味を持つかを学習し、魅力的な空間を生み出してください。空間テーマは各自で設定し、形態操作は秩序やルール、システムを意識すること。

【提出物】
(1) 空間構成の模型　スケール：１/50
・容 積4,500㎥（25m ×18m × 高 さ10m）に「空間」を構成したもの
※ 模型実寸外形 500mm×360mm ×200mm（運搬用ケースをスチレンボード７mm で作成）
(2) デザイン主旨
・A4レポート用紙（縦使い・横書き）
・作品タイトル
・コンセプトを300～400字程度。簡潔にまとめること。イメージスケッチ、イラスト、写真等の付加表現も可
・学生番号、氏名、指導担当講師名

【課題条件】
(1) 人間が介在する場所として空間をデザインすること。模型に自分と等身大の人物を１人以上配置する。
(2) 敷地に水面を設定することも可。ただし過度に凝った演出は不可、水面表現にアクリル板の使用は可。
(3) スチレンボードをカットしただけの部材とし、装飾的な形状を基本部材にすることは不可。部材の断面形状は基本的に四角形とする。
(4) 部材を曲げたり、曲面としての使用は不可（集合させた曲面表現は可）。点材、線材、面材が直方体である部材で組合せ、空間を構成。

【評価基準】
・表現したいコンセプトやイメージが造形的に実現されているか。
・スケール感を把握しているか。
・光の魅力を空間に生かしているか？
・模型やコンセプトシートをきちんと作っているか。

第５課題
「形・素材ウォッチング」
（出題：木内厚子）

【課題趣旨】
身近な建築の中から、建築を成り立たせている部分と素材に着目してみましょう。幾つもの素材が使われ、それぞれに表情をもっています。よく探し、観察してみましょう。その中から自分が何かを感じる、複数の素材で構成される部分を抽出し、描いてください。

手を使って描くことにより、入念にその対象を観察し、素材や部位がもつメッセージを考察してください。鉛筆の特性を素直に大胆に用い、素材の表現に果敢にチャレンジしてください。

これまで意識しなかった趣向（形態、質感、たたずまいなど）に気づき、建築の機能や性能（雨じまい、耐候性、施工性など）を理解できるかもしれません。観察や考察する習慣を身につけてください。それにより得られる“気づき”は、みなさんの中にボキャブラリーとして蓄積され必ずや自らが何かを生み出すときの手掛かりとなります。

【注意事項】
(1) 対象は日大理工学部船橋キャンパス内の建築物の一部（屋外に限る）。
(2) 複数素材で構成される建築の一部。
(3) キャンパス内をよく散策し、対象物を探しておくこと。
(4) 雨天決行のため、作業可能な場所を考慮し、幾つか選んでおくこと。

【提出物】
アソートブックに対象物をフリーハンドで克明に描写してください。用紙は「画用紙」、描画用具は「鉛筆」とします。以前、演習したように、鉛筆の使い方も工夫しましょう。裏面に以下の項目を記載してください。
(1) 学生番号・氏名・担当講師名
(2) 描画場所、描写した対象物
(3) 対象部分に関する考察（何を感じ思ったか、気づいたか簡潔に記述）

【採点基準】
(1) 描写対象の着眼点
(2) 形態を正確に捉え、素材感・立体感・陰影などの描画表現が丁寧にされているか。
(3) 描写対象に関し、深い考察がなされているか否か。言語表現力も問う。

設計製図Ⅰ（後期）

※第１課題はコピー課題のため、優秀作品としての掲載は割愛する。

第２課題
「ウォーターフロントに建つ
マイスペース」
（出題：松井正澄）

【課題主旨】
今年度最後の課題は、いよいよ初めての建築設計です。設計に際しては、まず計画地や周辺環境などの現地調査を行います。また、地域の気候、風土、歴史などの文献調査を通じてその場所を理解し、場所の持つ魅力や課題を発見します。各自の持つ観察力・構想力・表現力を駆使してできうる魅力的な提案を期待します。

計画地は横浜港発祥の地「象の鼻地区」にあります。象の鼻地区は東西の波止場に囲まれた水域に面している一帯（約4.2ha）を指し、横浜港発祥の地としての歴史性や、みなとみらい21地区から山下公園を結ぶ水際線と、日本大通りから大さん橋を結ぶ都市軸との結節点としての立地性を有しています。また、今なお船溜まりとしての港湾機能を有し、趣のある歴史的な建築物に囲まれています。このエリアの港側にはフェンスに囲まれた旧荷揚げ場の跡が残され、さらにプロムナードが設けられています。これらはピロティーのように海底から杭によって支持された構造物です。それによって、民間の施設はかつてのように港に直接アクセスすることができなくなりました。計画地の現況も同様です。そこで、計画地と民間施設のゾーンも含めて計画地設定図のように、旧荷揚げ場跡とプロムナードをないものとして直接港にアクセスできる陸地と設定します。かつてあった陸地と海の直接的な関係をもう一度考えてみようという試みです。

もし、自分がこのような海と陸が接する場所に住むとしたら、どのような活動や建築空間が魅力的か、アイデアを求めます。

【設計条件】
(1) 計画条件
①「マイスペース」の定義は自身が住まう住宅でもよいが、趣味や遊びとしてのスペース、たとえばアトリエや私的なギャラリー、リスニングルームなど、自分がかかわる場所としてイメージしてよい。各自魅力的なストーリーを考えること。
②水辺を積極的に利用すること。建物と港との動線を確保し、ボートの利用など水辺の活用をマイスペースの重要なストーリーの要素として考慮すること。
③計画地全体を計画する
④延べ面積：50～100㎡程度（内部空間）※計画地内の内部空間以外のスペースも半外部、外部空間として計画する。
⑤構造：形式自由
⑥階数：自由
(2) 敷地条件
①計画地：横浜市中区海岸通1丁目付近
②敷地面積：199.80㎡＋水域86.04㎡
③その他の敷地条件
・地盤は水域の海底および地表から支持地盤となり得る良好なものとし、計画地水域範囲に建築することも可。
・電気・ガス・上下水道は供給済み。
・建築基準法、都市計画法などの関連法規は、今回考慮しなくてよい。

【提出物】
①概念図：設計主旨や計画説明を文章、スケッチ、パース、ダイヤグラム、写真等で構成し表現力豊かなものとする
②配置図：１/100（周辺環境と計画内容との関係を示すため、道路・隣地・港の状況を表現する）
③平面図：１/50（各階平面図。１階平面図には外構計画を表現する）
④断面図：１/50（２面以上。１面は港を横断し、水域と建物の関係を表現する）
⑤立面図：１/50（２面以上。１面は水面を含めた立面を表現する）
⑥模型：１/50（プレゼンテーション用。現物提出。採点後返却。模型写真を①の概念図の中に添付。模型の中に自分の身体モデルを入れる）
・用紙はA2版ケント紙横使い４枚程度。①は1枚、②～⑤に３枚を割り当てる。①は色付きのものでも可。
・図面は鉛筆描きを原則とするが、インキングも可。
・概念図や図面はレイアウトをよく考えて作成すること。

空間創造演習　第１課題

新種発見！　海の生物

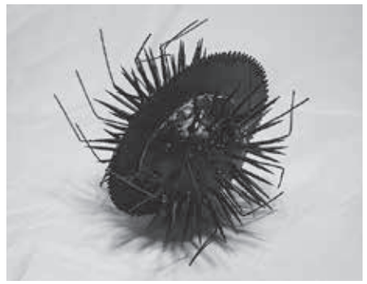
■作品説明　①名称の由来、②生息状況、③特徴

●**五十嵐啓祐**「ノコギリウニ」①ノコギリのような外形、②日本近海の磯で岩間に潜んでいる、③足が進化した鋭いトゲとノコギリ状の外皮のため漁網にかかっても網を破って逃げてしまう。●**亀田宏樹**「フミー（FU・MI・I）ブルーオイスター」①東日本大震災で津波被害を受けた福島（FU）、宮城（MI）、岩手（I）３県の頭文字、②震災後地殻変動によって東北地方太平洋沿岸に突如出現、③海水を濾過浄化する機能を持ち海洋環境向上に期待されている。●**久保田颯**「食魚ヒトデモドキ」①下部の形がヒトデに似ている、②伊豆半島西岸の水深30m以浅の岩場、③開いた口から出た舌をエサと間違えて近づく魚を捕食。●**久保田礼菜**「ミヤコヒナリキャンコ」①岩手県宮古の方言で「おしゃれな貝」の意味、②岩手沖水深100～200mの海底に生息、③体内から内蔵の一部を外に出しエサに見せかけ捕食。●**志萱侑太**「ウミリアン」①足や胴体の形状がエイリアンに見える、②鹿児島県以南の温暖水域で珊瑚・岩礁のある浅瀬、③捕食されそうになると上部表面から猛毒の液体を放出する。●**白坂　真**「マキマキエビ」①常時、体を丸めた状態で生息、②日本海、石川県沖の深海底に生息、③体側にあるヒレで泳ぐように移動。繁殖力が弱く生息数も少ない。●**永沢僚平**「殻ごもり」①全身が殻を砕いたような荒々しい表皮で覆われている、②熱帯海域の浅瀬や岩場、③生まれたときはすべての個体が雄、雌は最期を悟ると自分の体に卵を産み付け、最初に孵った子が雌になる。●**松本千穂**「綿魚（Dandelion carp）」①受精卵が外敵に捕食されないよう周囲に藻を付着させて海に流す習性がある、②姿を隠せるような濁った河川で生息、③雌の鱗は地味な色だが、雄は鮮やかな緑色で、汚物や放射能も体内に取り込む。

■講評

亀田君、永沢君、松本さんに共通するのは、紙粘土による造形の表面にリアルな彩色を施し、さらに米、消臭剤粒子、鶏卵紙パック容器といった日常品を丁寧に加工して上手に装飾している。五十嵐君はCD、白坂君は使い捨ての荷物取っ手を使用し、それら素材の形状や特徴を生かした造形が見事である。久保田颯さん、久保田礼菜さん、志萱君の３つの作品は、さまざまなカラフルな素材を組み合わせて制作されており、オブジェとして室内に飾っておきたくなるような出来映えである。

また、東日本大震災や福島原発事故と関連させた社会性のある作品が複数あり、亀田君、久保田礼菜さん、松本さんの３作がこれにあたる。（桜井慎一）

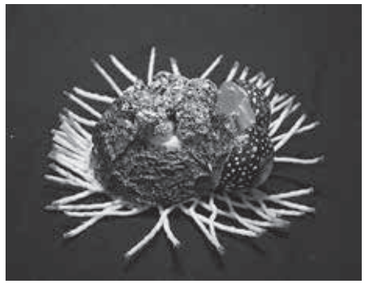


五十嵐啓祐

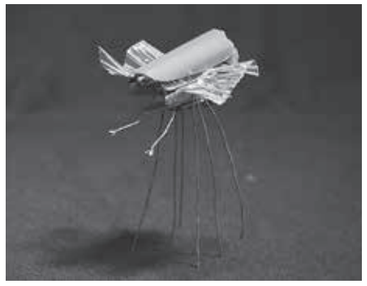
亀田宏樹

久保田颯

久保田礼菜



志萱侑太



白坂　真

永沢僚平

松本千穂

空間創造演習　第２課題

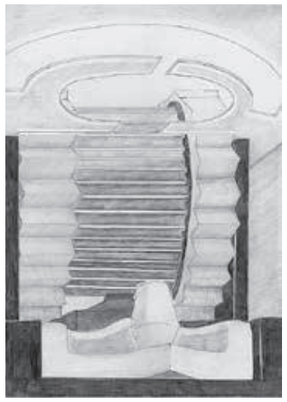
ミクロの決死隊

■講評

私たちの生活は、身体化されたスケールを基準に営まれています。しかしながら、建築のデザインは、さまざまなスケールで空間を把握することが必要になります。皆さんには、縮小された自分という、新たな身体スケールを基準に空間を測ることを、この課題で試みてもらいました。その過程の中で、空間に対する２つの発見を段階的に期待しました。まずは、内視鏡で観察するように、選択した物体の内部を正確に記述することによる、未知の空間の発見です。しかしながら、どんなに精密に記述したとしても、その空間は説明以上のレベルに至らない、ということも分ります。そこで重要になってくるのは、作者が空間への「眼差し」を意識できたか、ということだと思います。ここでいう「眼差し」とは、作者という主体が空間を解釈し、意味を与えることです。その意味において、ここに紹介する作品には、作者の空間への「眼差し」が存在しているといえるのではないでしょうか。

●**荒木田祥平**：ライターの内側に入り込み、着火部分を正面から見た作品です。機械の持つ強靭さを良くとらえており、まるでタービン室内の風景のようです。●**亀田宏樹**：シュレッダーを内側から見上げた作品です。タイトルからも分かるように、その危険な存在の裏側に、「癒しの世界」としての河の流れを見出した、ポエテックな作品といえます。●**久保田颯**：昆虫の目線を強く意識させる、不思議なリアリティを表現した作品です。全体を描くのではなく、部分を強調することによって虫の気持ちを表現することで、見る者の情感に訴えかけてきます。●**白坂　真**：脳内に入り込み、これからオペが始まろうとする瞬間を描いた作品です。もちろん、想像上の風景ですが、その空間が脳内を超え、建築的空間にまで仕立てられています。●**滝村菜香**：科学者が冷静に分析するように、ドライヤーの内側を描いた作品です。その建築的な構図は卓越しており、建築的な空間を見る者に想起させ、そこには作者の高いセンスを読み取ることができます。●**平沼一滋**：時計の内部を想像しながら描いた作品です。想像することは、新たなイメージを生みます。その意味でこの作品は「１つの住宅の内側」として描かれてもいます。●**藤本幸汰**：ワイン・オープナーを見上げている作品です。非常に存在感のある構図が、迫力につながっています。●**山影悠時**：雨の日の新聞配達であったのでしょうか。ポストロから差し込む光が新聞紙を包むビニールに当たり、幻想的な作品に仕上がっています。

（神野郁也）

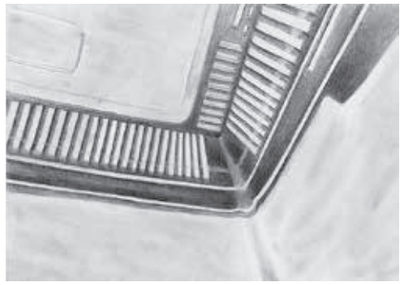


「ライターの中の世界」荒木田祥平

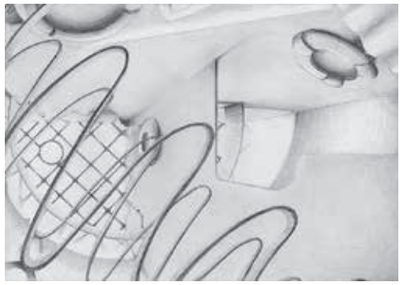
「鋼鉄の河」亀田宏樹

「手術（オペ）という日の出」白坂　真

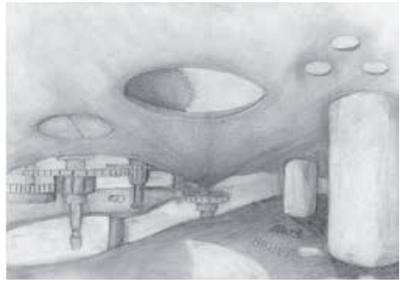
「父さんの助手」藤本幸汰



「虫の気持ち」久保田颯



「乾かす空間」滝村菜香



「時を刻む場所」平沼一滋

「ポストの中から見た世界」山影悠時

空間創造演習　第３課題

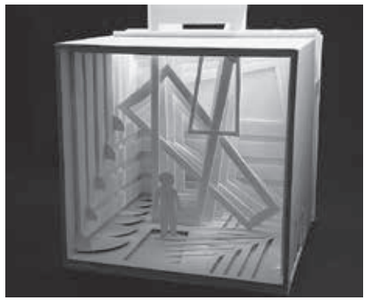
光の空間

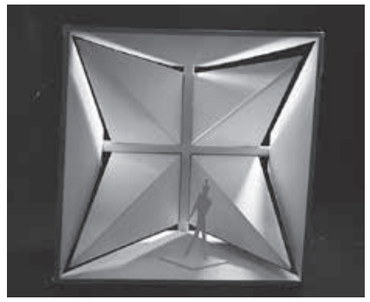
■講評

本課題の目的は、光の空間を創造することであるが、模型製作を通じて空間の把握とスケール感を養うことでもある。評価基準は課題要項記載によるが、今回選出された作品の共通点は、創りたいイメージがしっかりして、完成するまでの工夫の痕跡が読み取れるものであった。

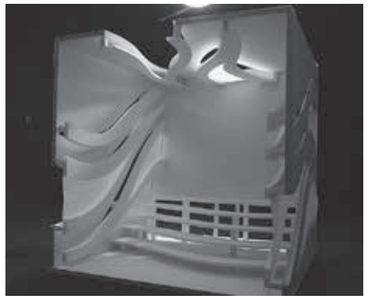
●**稲村綾人**案は、造形素材の厚み、幅、高さの変化、配置の角度、間隔、奥行きの変化、そして導かれる光の方向性の偏向等。作りたいイメージを素材の形態操作を繰り返しながら、ピラミッドの石を積み上げるように、一歩ずつ完成させる様子が読み取れる、見本のような作品である。●**亀田宏樹**案は、サンピラーと背景となる大地と海洋をデフォルメした造形をリズミカルに配置して、その構成から導かれる光の彩がサンピラーをイメージする詩的な表現である。しかし、サンピラーの外形を直接造形モチーフにするのではなく、結晶群の集合として表現されていたら、より神秘的なものになったと考える。●**佐藤和彦**案は、中央に特徴的な造形要素を大胆に配置し、周辺に間接光を導くもので、シンプルだが幻想的な表現である。特筆すべき点は、中央から四周へ奥行きのある造形が、投射された光も立体的な表情としていることである。惜しいのは中央部にも光の表情を工夫すれば、より幻想的なものとなったであろう。●**白坂　真**案は、多くの光の導入開口部が外周に現れ、本来の内部空間が希薄になった感があるが、造形素材とその構成で光の空間を表現している他の作品と異なり、周囲から光を乱舞させた環境の中に、造形は光を制御するものとして位置付け、静寂を表現するものに仕上がっている。●**樋浦直紀**案は、動きをイメージさせる波形のモチーフと、波間から導かれる光の様相を半透明素材の適宜使用による変化をつけることで、外部からの光の方向性に内部空間が呼応する、多様な表情と柔らかな時間の移ろいをもつ空間表現となっている。●**山崎未来**案は、造形的な要素で全体が構成されており、課題の主旨と乖離するようであるが、きれいに作り込まれた模型とその構成は、はちのすに外部から光が差し込んだら、このような表情になることを連想させ、１つの光の空間の表現となっている。●**山中大河**案は、安定を示唆する正方形をモチーフに、その大きさ、厚み、配置の奥行き、設置の角度等を変化させて、造形と光のグラデーションの動きを表現している。正方形で統一したことが、混沌とした造形群にある種の秩序を与えているようである。　（前鶴謙二）

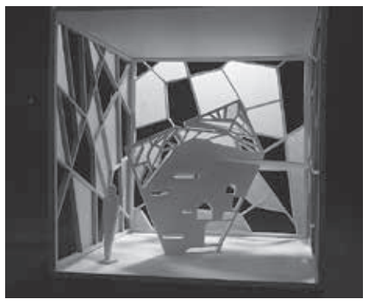
「エジプトのこれから」稲村綾人


「太陽の柱」亀田宏樹


「光の奇妙な物語」佐藤和彦

「光の空間と安らぎ」白坂　真


「波」樋浦直紀


「はちのす」山崎未来

「動きがある空間」山中大河

空間創造演習　第４課題

点・線・面から空間へ

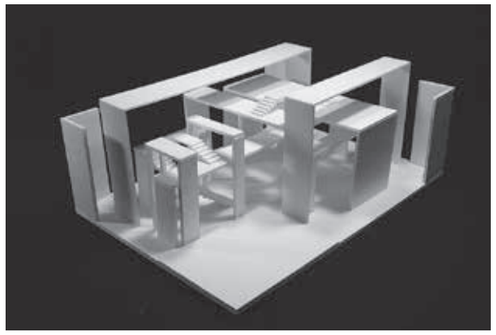
■講評

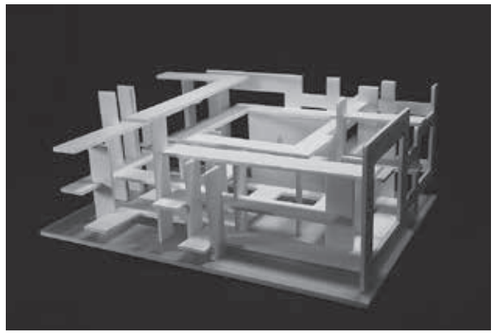
「空間」という言葉は曖昧で、わかるようなわからないような、掴んだと思えば手からすり抜けてしまうような概念であると考えている。今課題では、物理的な断片を組み合わせて空間を作る。当たり前だが、適当にばらまいたとしても空間は生まれる。しかし、それが第三者に何かしらの感想を抱かせる「空間」となるとは限らない（余程の天才であればそのセンスの良さで何かを生み出すことができるかもしれないが）。では〈どうすれば良いか。〉その問が立てられれば可能性は出てくる。

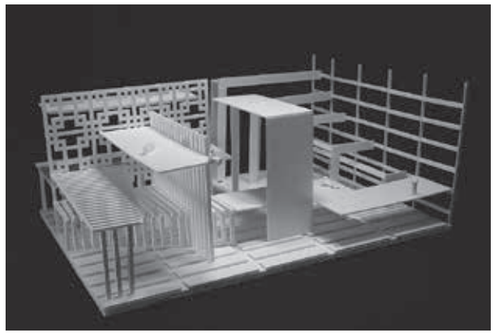
ここに挙げる６作品は、その問が立てられたものだろうと推測する。

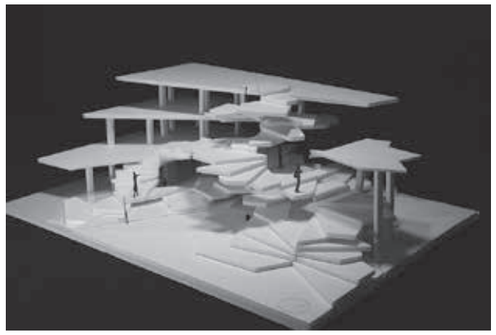
小口篤大さんの作品は、比較的面積の広い、細長い板を水平・垂直に組み合わせて入れ子にしてくぐる、歩く、上るなどの体験を作り出している。**亀田宏樹**さんの作品は歩く行為と留まる行為に変化を与えようと水平材の設定高さに工夫し、かつ地上面は水面にすることで浮遊感を出すことを試みている。**志萱侑太**さんの作品は線材と面材を組合わせ、装飾的な効果を試みている。 **滝村菜香**さんの作品は、ずらしながら重ねることにより、階段のように上る行為を誘発しつつ、形状の重なりの面白さを工夫している。**樋浦直紀**さんの作品は、高さが変化する３列の門型フレームで全体を歩き回る楽しみを与えている。**横山　巧**さんの作品は敷地を線材と面材で高く囲むことで内部に閉じつつも開放性をもたらす工夫をしている。

各自が単純な点材・線材・面材を無目的に配置する行為からそこに何かを発見しようと模索している。その思考する行為自体が「空間」を発見できる始まりである。さらに、連続・反復・断層・垂直・水平・回転ずれなどの操作によって、その操作がもたらす「空間」操作のシステムを考察できたとしたら「構成」とは何かを考察への始まりであるとともに、建築を考える行為へとつながるであろう。成果の是非は別として、その過程が重要であると考える。　（長尾亜子）

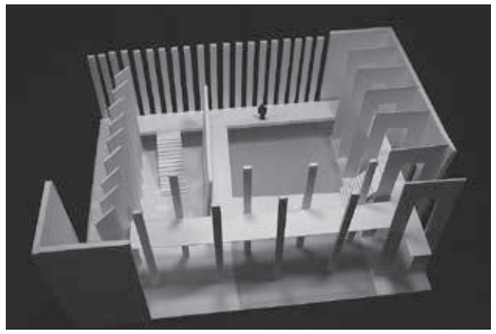

小口篤大


亀田宏樹


志萱侑太


滝村菜香

樋浦直紀


横山　巧

空間創造演習　第５課題

形・素材ウォッチング

■講評

今年は東日本大震災による福島原発の問題が電力不足という事態となり、その影響で課題の出題のみを先に行い、１カ月ほどの期間をおいた後に課題を行うこととなった。演習当日まで期間があったことは、学生にとってはいろいろな場所を探して、考え、選定する上では、良かったように思う。

この課題は、校内の身近な建築の中から、自分が何かを感じる、複数の素材で構成されている立体を、観察し、描くことで、表現するというものである。そして、この課題を通して、建築やそれらを構成する素材や構造について、観察することや考察することを知る一歩となればと考えている。

●**滝村菜香**さんの作品は、外壁のレンガの様子がよく観察され、金属のベントキャップと、光が透る窓という形と素材の違うものを描いている。下から上へパースをつけていることで、画面の構図も巧みである。

●**平沼一滋**さんの作品は、鉄骨ブレースのジョイント部分をクローズアップし、同じ素材ながら形を丁寧に捉え、細かく表現された陰影によって、その描きたい対象をよく表現できている。

●**多津田紗季**さんの作品は、配管されたパイプとそれを固定、支持する金物との関係を正確に捉え、とくに支持金物の形状を細かな部分まで丁寧に描いていることに好感が持てる。

●**ソ　ニト**さんの作品は、レンガの外壁に開けられた換気口を描いていて、素材ではないけれど、換気口の奥の暗闇がしっかり表現されることで、手前の金属の換気口の硬さや形状が、上手く強調されていて面白い。

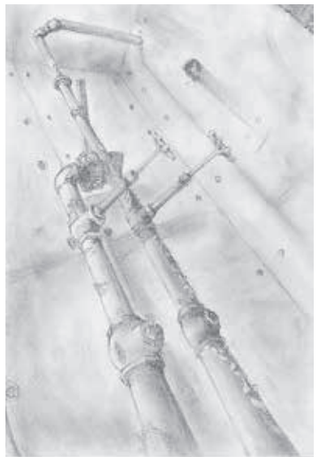
●**白坂　真**さんの作品は、コンクリートらしき外壁と塗装が剥がれ落ちかけているパイプを描いていて、素材感を忠実に表現するというよりは、面白いと着目したことを伝える気持ちが、描写の仕方と構図からもわかり魅力がある。

●**池上信太郎**さんの作品は、鉄骨の種類の違う力が集まる柱脚部を描いていて、細密に設計されている構造部に着目したことや、複雑な形や関係性を丁寧に描こうという姿勢に意欲を感じる。

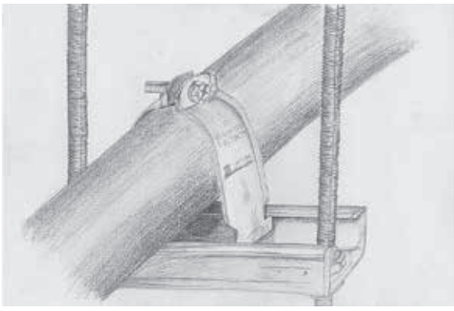
●**藤本幸汰**さんの作品は、鉄骨ブレースを全体的に描いて、一見分かりにくいが、何枚も違ったアングルを描くなどした上で決めていて、形が捉えにくい対象物を、しっかり捉えられている。描き込みがされれば、さらによくなったと思う。　（木内厚子）

滝村菜香

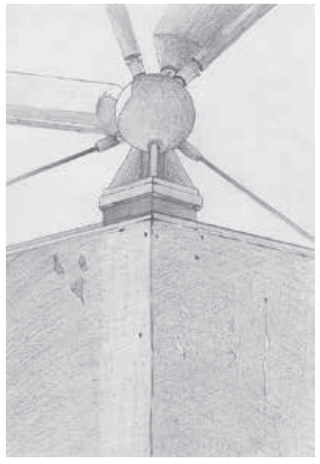
平沼一滋



白坂　真

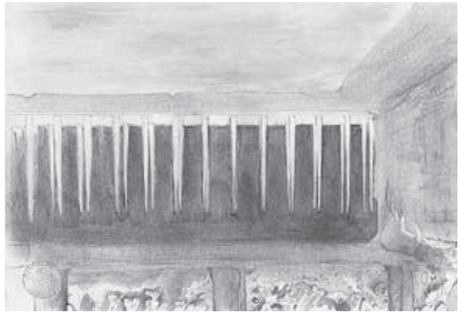


多津田紗季



池上信太郎

藤本幸汰



ソ　ニト

設計製図Ⅰ　第２課題

ウォーターフロントに建つマイスペース

小松浩樹

■コンセプト

敷地は MM21の象の鼻、観光客やカップルなど多くの人が集う場、そんな賑わいかつ景色のよい横浜象の鼻に喫茶店、ライブハウスを置くことにより良い空間と憩いの場を設けた。

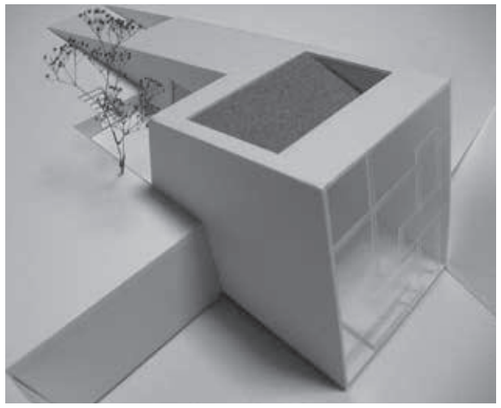
コンセプトは３つ、景観を大きくとらえること、２つの機能、レベル差、である。

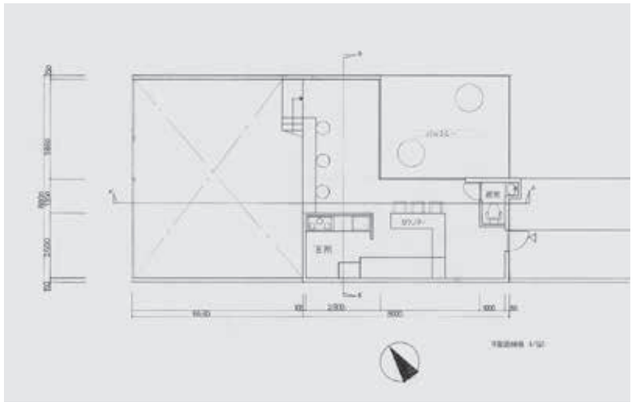
横浜の景色は朝と夜で大きく変わっていてこの景色をとらえるために大きなガラスと屋上庭園を用いた。朝はすがすがしい景色、夜はライトアップされた景色が一望できる。またこの２つの顔を大いに用いるために朝は喫茶店、夜はライブハウスといった２つの機能を持たせた。

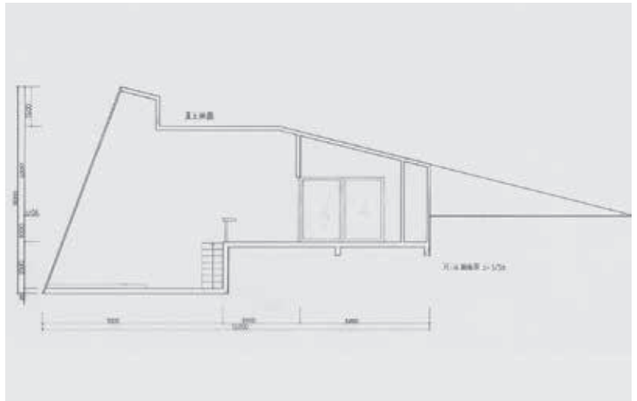
スロープで屋上庭園、階段を下がりバルコニー、さらに水面ギリギリまで下がったところにステージ、この３つのレベル差を使いまったく違った空間を表現。水面ギリギリまで下げたフロアは水面に反射した光を取り込み横浜の景色を大きくとらえ、朝の光により落ち着いた雰囲気が感じられるバルコニー、横浜の風・音・匂いが感じられる屋上庭園と一つ一つのレベルに意味を持たせることにより快適かつ有意義な空間ができる。

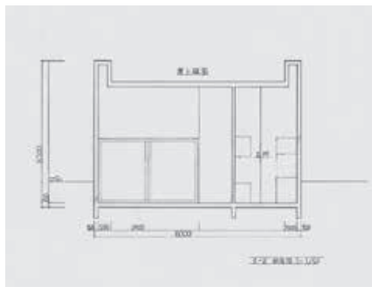
■講評

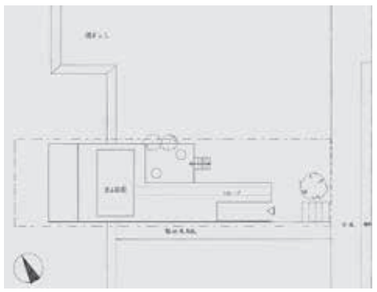
一見難しいと思われる細長い敷地を、素直に捉えた案といえる。敷地全体に細長い形で計画され、海上に建築をはね出すだけでなく、水面により近くなるように床レベルを下げることで、親水性を獲得し、また斜めの屋根を丘のように考えるなど、断面計画がよく考えられている。その断面計画から、シンプルに与えられた形が周辺環境に馴染み、ランドスケープ的に扱われているのも魅力である。また広場スペースに面した場所に、一部テラスを設けて広場とのつながりも忘れてはいない。マイスペースの設定としては、朝昼は喫茶店、夜はライブハウスを開くというものである。海辺のさわやかさを感じる朝昼と、横浜の夜景が浮かび上がる夜の環境の違いに着目し、時間帯により使い方を変えてイメージしているところも面白いが、その辺の表現が、図面または模型でされていればさらによかったように思う。　（木内厚子）











設計製図Ⅰ　第２課題

ウォーターフロントに建つマイスペース

木安玲王奈

■コンセプト

「三角窓のカフェ」

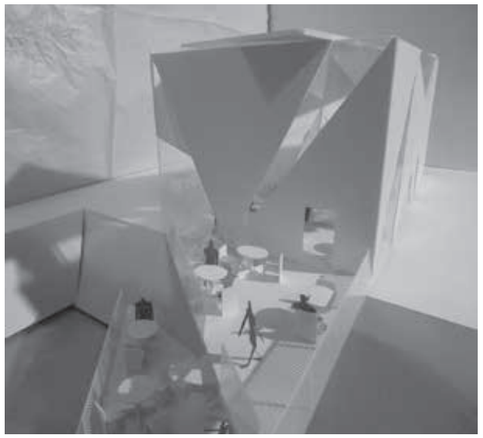
今回の計画地では３方向が開いており、潮の干満による水位の変化や日の光、浜風によって多彩な変化をもたらす水辺の自然が感じられ、船が行きかう港の風景とともに横浜の赤レンガ倉庫や大さん橋国際客船ターミナルなどが一望できるようになっていました。

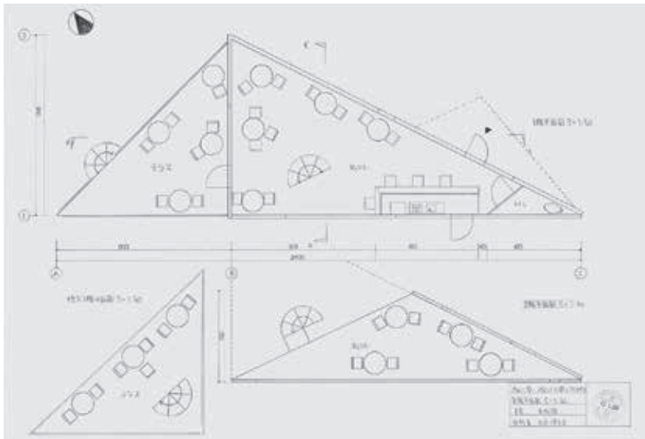
私はその計画地の極めてオープンなスペースに人々がふらっと立ち寄れるオープンスペース的なカフェを設計しました。このカフェは全体が三角形でできており、三角形の形にこだわり統一感をできるだけ出すようにするために窓も三角形にバラバラに配置し、全体をまとめました。開口部は中と外の関係が崩れない程度の微妙なバランスで窓があり外から中の様子がすべてではないが切り取られ外から見て中が見えて気になり思わず入ってしまうような設計となっています。中からの外の関係は窓が三角形になっているので大胆に外の風景が切り取られ、赤レンガ倉庫や大さん橋国際客船ターミナルを見て楽しみながらくつろげるようになっています。

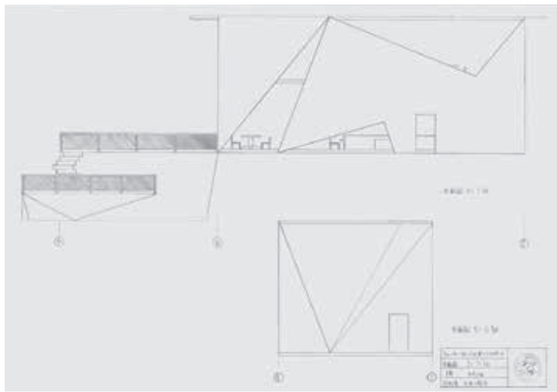
■講評

スタディーにおいて、模型を作ることでアイデアを思いついたり、飛躍させたりすることあるが、そのような過程を経験し、完成させた案といえる。マイスペースをカフェやギャラリーとして開放するという設定であるが、公共性の強い敷地のため、中からの見え方や外からの見られ方をどのように建築で考えるかということで、スタディーを重ねた。その中で三角形という形に着目し、平面形状だけでなく、三角形を立体的に組み合わせることからできる形の面白さや、光の入り方や視覚的な変化の複雑さに気付き、構成を試みている。単純な操作のようであるが、最終的なものは、ウォーターフロントにふさわしく軽やかであり、思いもよらぬ視界や空間が繰り広げられるであろうことが想像できる魅力的な案である。１年生にとって初めての設計課題であったが、スタディー模型を作ることが、設計を進める上で重要な作業であることを忘れないでほしい。

（木内厚子）







設計製図Ⅰ　第２課題

ウォーターフロントに建つマイスペース

白坂　真

■コンセプト

今回の計画地は周りに近代的なビルが建ち並び、少し視点を変えると、広大な海が広がる。そこから自分の要望にあった計画が求められ、また、今回の計画地は公共施設の中にあるので、周辺に調和したデザインが求められる。

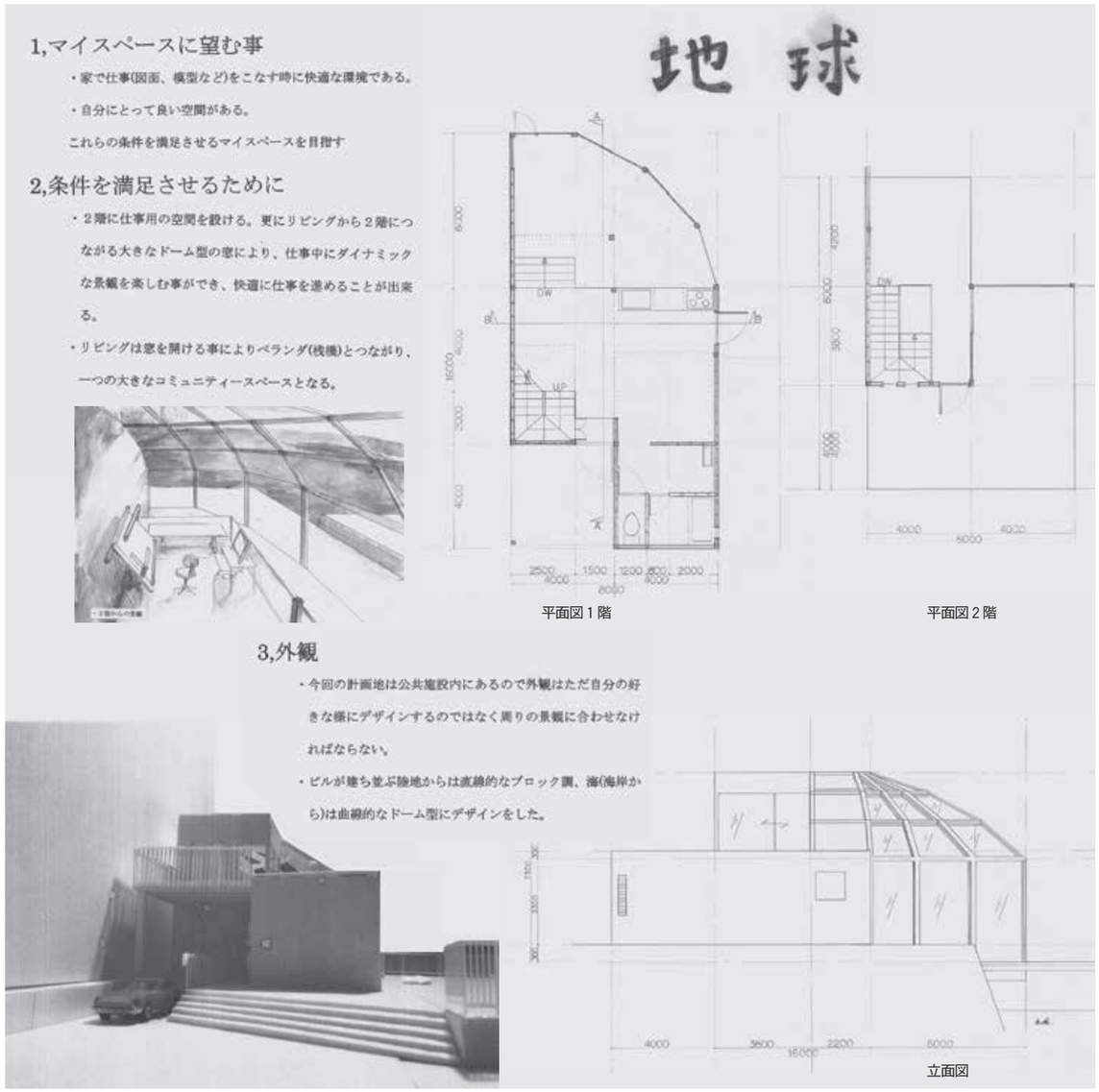
最初に、私はマイスペースに求めることについて考え、それに基づいて計画した。

私がマイスペースに求めることは、「楽しく仕事ができる」「落ち着ける」「周辺との関係性」の３点で、それらを実現するために、ドーム型の大きな窓を設けた。これにより、広大な海の景観を得ることができ、仕事中でもそうでない時も、眺め、楽しむことができる。また、「周辺との関係性」については、海側を曲線的なドーム、ビルが建ち並ぶ陸地側には直線的なフォルムにすることにより、周辺との調和を保っている。そして、リビングにベランダを設けることにより、窓の開口時にはリビングとベランダを合わせ、１つの大きなコミュニティースペースとなり、より海との関係性が感じられる。

■講評

ウォーターフロントに建つマイスペースの課題において、白坂君のテーマは壮大な「地球」と題して、建築家の学生が住まう快適でリラックスできる場を提案している。しかも、横浜の海に臨む象の鼻という歴史的港景観に在って、その棲家から望む大海原とパノラミックな夜景がおりなす景観を自分のものとする建築計画を提案している。白坂君が提案するマイスペースは１年生としてはかなり優れた計画案で、手慣れた巧みな技が光る。とくに、リビングから２階につながる大きなドーム型の窓により、開放感を助長し、設計への意欲を喚起する仕掛けを演出している。また、隣接する５階建ての診療所施設を考慮して、マイスペースのプライバシーと独立性を保つように計画されている。ドーム型の屋根はある意味でのアトリューム的な要素を加味し、外部空間と内部空間の融合をはかる装置となっている。この作品は、今後の成長を期待させるマイルストーンとして位置付ける作品となっている。

（近藤健雄）



2年生（前期：設計製図Ⅱ、後期：設計製図Ⅲ）

【担当】畔柳　昭雄
佐藤　信治
内海　智行
佐藤　浩平
永曽　琢夫
長井　義紀
松本　成樹
水本　　光
矢野　一志

設計製図Ⅱ　第２課題

掘割に立地する住宅

山川大喜

■コンセプト

今回の課題の敷地を見学しに行った時、一番最初に隣が公園、目の前は運河という状況に驚いた。なぜならこんなに隣地に恵まれている場所はめずらしいと思ったからである。そして驚きと同時にこの隣地を両方とも生かすためにはどうしたらいいのか？　と考えたときに思いついたのが隣地との一体化である。まず、公園とは敷地の中心に木を植えることによって建物が木を中心に構成され、一体化がなされる。次に運河とは、敷地を全面水で浸してしまうことで、まるで運河が建物の下まで続いているかのように見せることができ、それによって一体化がなされる。

一体化の利点としては隣地とつながっているかのように見せることで敷地が広くなったかのように感じさせることができるという点にある。また、運河側を開放することで、建物の中にいても運河との一体化を感じることのできるようになっている。

■講評

東京の東に位置する江東区は、江戸時代には開削された運河が縦横に走り、水辺に人々の賑わいがあった。現在、その名残を持つ掘割は区内の多くの場所で親水空間化されている。こうした親水空間化から外れた数少ない掘割（護岸）に面した場所が、今回の計画敷地とされた。

課題に対して山川君は敷地と周辺環境のコンテクストを十分に読み取り、隣地の公園と前面の掘割を取り込むことで周辺環境と住宅を“一体化”する計画を立案した。具体的には、敷地中心に樹木を据え、掘割の水を敷地に取り入れることで周辺の環境との一体化、連続性を表現し、建築をキュービックな立方体に分節し、カラムによって積層させることで、これらの環境要素との融合調和を表現した。プランの軽やかさは水辺に一服の清涼感を創出している。ただ、表紙のレタリングはやや軽やかさに欠ける。　（畔柳昭雄）

設計製図Ⅱ（前期）

第２課題
「掘割に立地する住宅」

【課題主旨】

本課題は、東京の下町の江東区の中に位置し、周辺地域では現在でも運河が町中を縦横に走り、その一部は都内屈指の親水公園として再整備され、地域住民の憩いの場として親しまれてきている。こうした水辺の豊富な江東区深川に残された掘割りの一画において水辺の資質を生かした住宅を設計する。各住戸に対する設計上の要件（住み手の要望やライフスタイル）を理解し、設計者の立場から、その意向に対していかに応えるかに重点を置くこと。

また、水辺の持つ資質（水面を介しての眺め、水面からの涼風の取り入れ、水の環境特性）を設計に反映させ、水辺を楽しめる設計をする。

【設計条件】

①夫婦（会社員、専業主婦でともに50代）、大学生（男）、高校生（女）の４人家族／②自家用車１台／③部屋の構成は自由、収納に配慮／④当該敷地が「水辺」であることを日常生活の中で意識できるようにする／⑤家族がお互いの気配を感じ合える空間とする／⑥敷地周辺の環境に配慮した計画

１．敷地と周辺条件

(1) 敷地の形状、接道条件、周辺状況は別添の図面どおり
(2) 電気、ガス、上下水道は整備済
(3) 地盤は良好

２．建築物の条件

(1) 敷地条件は、建ぺい率60%、容積率200%
(2) 延べ床面積は150㎡程度（±10%程度は許容範囲）
(3) 木造２階建て
(4) 敷地は各自が選定
(5) 水辺に対する空間的な配慮

設計製図Ⅲ（後期）

第１課題
「仙台堀川の集合住宅
～アーティストたちが暮らす
水辺の集住体～」
（矢野一志）

【課題主旨】

東京都現代美術館の立地する木場公園内の敷地に15戸の集合住宅を計画する。敷地は北側に仙台堀川、東側に第２課題計画地と木場公園大橋、南側に葛西橋通り、西側に三つ目通りとそれぞれ面している。また、敷地周辺には、仙台堀川公園や横十間川親水公園などが整備されており、アート・自然・人・情報・交通など、さまざまなものが交差する極めてポテンシャルの高い場所である。日常生活においてアーティスト各人の作品制作の刺激となり得る空間であると同時に、都市に人が集まって共に暮らすことをポジティブに捉えることができるような意欲的で魅力のある〈集住体〉の提案を求めたい。

１．敷地および周辺条件

(1) 形状・接道条件・周辺状況等、添付資料参照。敷地面積は、2,414㎡。
(2) 敷地条件は第一種住居地域。防火地域、最低高さ７m。
(3) 敷地と道路・河川との高低差を考慮（必要に応じて歩道の切り開き、敷地内の盛り土・切り土は可能）。
(4) 電気・ガス・上下水道などは整備済。
(5) 地盤は良好、温暖で特別の配慮不要。

２．建築物

(1) 鉄筋コンクリート造（一部鉄骨可）、地上３～９階建て程度の中高層集合住宅とし、地階を設けても良い。
(2) 総戸数は15戸、１戸の床面積は90㎡程度とし、述べ床面積を算定。
(3) フラットタイプのほか、立体的な住戸形式としても良い（住戸内に吹き抜けなどを設けることも可）。
(4) 設備は空気調和設備を設ける。また、原則エレベーターを設置する。
(5) 共用エントランスを設ける場合は、メールコーナーを設ける。共用エントランスを設けない場合は、各住戸で対応する方法も可。
(6) 共用部として、管理員室・ゴミ保管庫・倉庫・盤室・ポンプ室などを設ける（各10㎡程度）。また、集会室（100㎡程度）を設ける。

３．屋外施設

(1) 水辺を充分に生かした外構計画をする（護岸形状の変更や、敷地内への水の引き込みは可）。
(2) 広場、遊歩道、水盤、中庭、ベンチ、東屋、屋上庭園など、適宜自由。
(3) 駐車場は平面駐車（台数適宜）とし、来客用兼搬入用１台分を確保。
(4) 自転車置場を15台分以上設ける。

第２課題
「仙台堀川の
アートギャラリー＋ショップ＋カフェ」
（永曽琢夫）

【設計条件】

本課題は、東京都現代美術館の立地する木場公園内の敷地に、アートギャラリー＋ショップ＋カフェを計画するものである。ギャラリーには、隣接する仙台堀川の集合住宅に住むアーティストの作品を定期的に展示する場であるとともに周辺市民の発表に場となるような身近で魅力のあるギャラリーの提案を求める。ショップは、ミュジアムショップとしてセンスのある空間、カフェには、ギャラリーの余韻を楽しむことができる水辺の空間の提案を求める。また、新たに東側に隣接する木場公園大橋から直接アクセスできる動線の提案を求める。

１．敷地および周辺条件

(1) 敷地の形状・接道条件・周辺状況等は、添付資料参照。敷地面積は、2,470㎡。
(2) 敷地条件は第一種住居地域（建ぺい率60%・容積率400%）。防火地域。
(3) 敷地と道路・河川との高低差を考慮（盛り土、切り土は可）。
(4) 電気・ガス・上下水道などは整備済。
(5) 地盤は良好であり、気候は温暖で特別の配慮は不要。

第３課題
「即日設計課題「橋の計画」」
（水本　光）

【課題主旨】

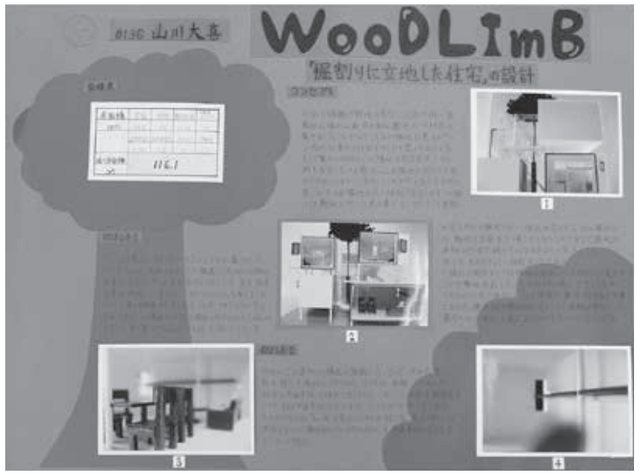
仙台堀川を挟んで木場公園の南北を250mに渡ってつなぐ既存の木場公園大橋は、防災上の意味はあるものの、主な利用対象が公園歩行者とすると、かなりスケールアウトしており、架構としても決して美しいとはいえない。そのダイナミズムさえも、公園平面計画の表層的な机上の産物と見えなくもない。川を渡す橋にも拘らず、南北の水辺空間とのつながりも、橋を渡る時の川の臨場感も希薄である。今回の課題では、橋を再構築することによって、川の南岸に沿って連なる集合住宅とギャラリーへの有機的な関係性と北岸も取り込んだ水辺空間の一体感をいかに生み出すかを考える。都市的な概念として、近接する現代美術館や、遠くは江戸の成り立ちにまでブリッジすることを思考できれば、後期課題全体を通してより説得力のある計画とすることも可能であろう。

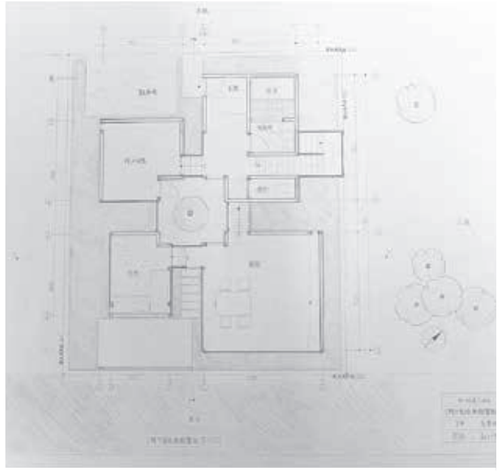
【設計条件】

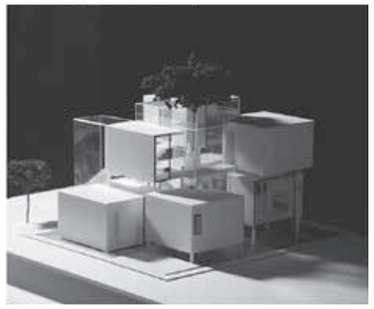
(1) 木場公園大橋のイノベーション（建替え）またはリノベーション（改修）
(2) 構造・形式は自由
(3) 第２課題アートギャラリーの敷地にアプローチを設ける

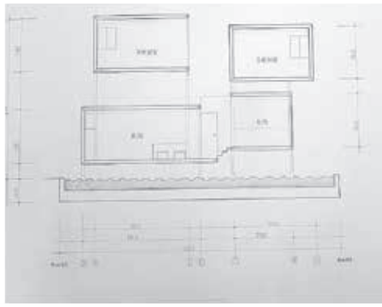
【提出物】

A2ケント紙に配置、平面、立面、断面、パース、スケッチ、ダイアグラム、模型写真、設計趣旨など、表現方法、縮尺各自自由。ただし、すべて当日の時間内に作業した成果物とする。









設計製図Ⅱ　第２課題

掘割に立地する住宅

徳永尚亮

■コンセプト

敷地条件は、西側が運河に、近辺は中高層のマンション、事務所が建ち並ぶというものだった。これらの敷地条件と、施主家族がお互いの気配を感じ合える空間という設計条件のもと、設計主旨を考えた。

公園は比較的緑地が多くあり、整備すれば、魅力的なものとなり得ると思えたので、この公園に圧迫感を与えないように、ボリュームを少なくし、ファサードも公園に溶け込むようなものにした。削ったボリュームは、運河側に持って行き、運河と建築の接点を増やし、公園と運河の自然を享受できるようにした。

曲線を主に使用して構成した理由の１つは、当初は直線で構成された案で構想を進めていたが、立面が重すぎるように感じたので、これらを解消するためであり、壁面を円弧で構成することで、リズムと軽やかさを立面に持たせることを狙った。

もう１つは、設計条件に対する答えとしてこうなった。キッチン、食事室、居間など主な共用空間は、壁で仕切ることをしていないので、壁面が円形故に、直接姿は視えないが、端からでも家族の気配を感じることができると考えた。

■講評

柔らかい曲線が特徴である中庭を持つ住宅。まず隣地の公園側への配慮から、巧みなボリューム操作がおこなわれている。

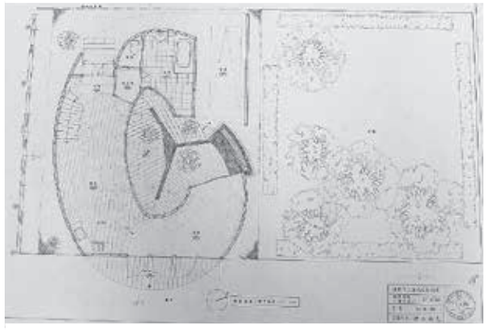
建物をいくつかのブロックに分節し中庭を中心にらせん状に配置する。大小のボリュームを組み合わせること、さらに曲面を使うことで、空間にほどよい余白と動きが生まれている。

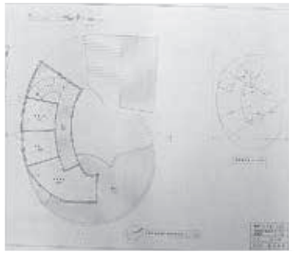
公園側のボリュームを少なくしたことが中庭の息苦しさをなくすことにもつながっている。前面道路に対しては、アプローチの奥行き感を生み、運河に張り出したテラスは運河と建築の間を取り持っている。

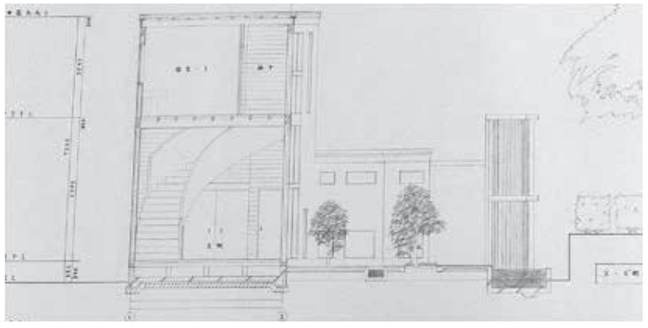
外からの視点と、内側からの視点を交互に行き来しながら設計を行ったことが伺える。いろいろな形態や素材を使いながらも全体として１つの建築にまとめあげた点、具体的な材料のイメージを与えている点も評価できる。

苦労もあっただろうが、作者の作品への愛情を感じるものとなっている。

（松本成樹）







設計製図Ⅲ　第１課題

仙台堀川の集合住宅
～アーティストたちが暮らす水辺の集住体～

川崎　将

■コンセプト

ここには未来のトップアーティストたちが暮らす。日々の生活の中から新しい発想を模索する彼らにとって、自分以外の人々との「出会い」「触れ合い」その中で生まれる刺激は大切なものである。そんなつながりを日常的に引き起こすしかけとして3Chouseを提案する。3C とは Cut／Cross／Connect の頭文字である。まず Cut とは木場公園への眺望を考えて引かれた軸線方向にたいして開口をあけること。これによりアーティストたちは景色だけではなく互いの創作風景や気配を視覚的に感じ取ることができる。そして Cross とは視覚的に認識しあったアーティストたちが今度は物理的に交わって交流をふかめることである。そのためにウッドデッキを設ける。最後が Connect。ウッドデッキによってつなげられたセミパブリックな空間をパブリックまで拡張する。そこはつながりを生む「路地」のようにさまざまな人々が行きかう空間となりアーティストたちへよりいっそうの刺激を与える。

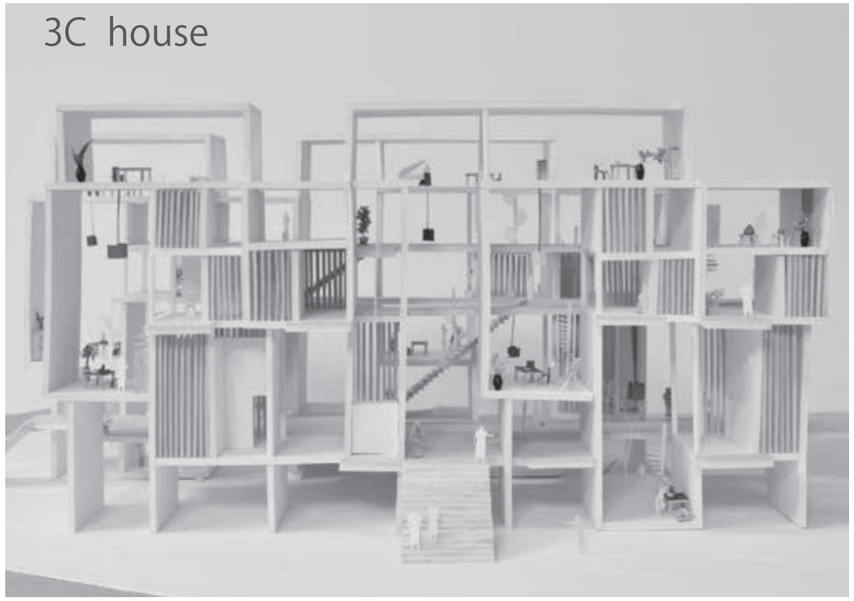
■講評

本課題では、水辺に建つ集合住宅の設計を通して、個と集合のあり方や周辺環境と住戸の関係性、コミュニティの可能性を考察するとともに、アーティストたちが共に暮らす魅力的な集住体を提案することが求められた。

「3Chouse」と名付けられた本作品は、Cut、Cross、Connect という３つのキーワードを手掛かりに多様な生活シーンや偶発的な関係性を集住体に取り込もうとした秀作である。本場公園は中央を横断する仙台堀川によって北地区と南地区に分断されている。この状況を少しでも解消するため、通りを行き来する人々の視線を敷地内に引き込み、対岸に意識を向ける建築的な仕掛けとして都市的な軸線が設定されている。このような配棟計画の操作だけで終わらず、住棟や住戸を巧みに分節し、ずらすことによって、複雑な視線の関係や立体路地的な共用部を創出することに成功している。大きなガラス面の処理や住戸と水辺の関係性についてより説得力のある説明ができれば、さらに力のある作品になったと思う。

また、本作品は住宅課題賞2012に本学科代表として応募・入選し、惜しくも優秀賞は逃したものの、公開審査にて審査員の先生方から高い評価を得たことを追記しておく。これらの貴重な経験を糧に、川崎君の今後の活躍を期待したい。

（矢野一志）



切り抜かれた風景の先に何があるのだろう。

陶芸家でも絵画から学ぶ事はあるかもしれない。

通りすがりの人との触れ合い。またファンが１人増えそうだ。

Cut　～切り抜き～

住居を切りぬくようにｂ軸方向に開口をあける。大通りから木場公園にかけてのの「視線の抜け」を作り人々を呼び込む。またアーティスト同士が互いの創作活動を見て聞いて感じる事で刺激をうけお互いに成長できるような空間を目指す。

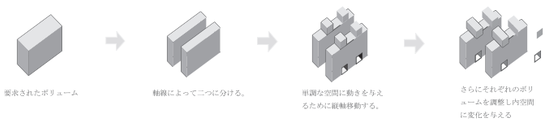
Cross　～すれちがい～

路地は人々の「つながり」の場である。物体。空気。視線。すれちがう瞬間に人は様々な思いを抱く。アーティスト達が創作や演奏する姿。はたまたそこを訪れた子どもたち。見て見られて、そんな都市的空間の中にも両者にとっての刺激はあると考える。それらの光景を日常に溶け込ませるためにそれぞれの階層をつなぐデッキを設ける。デッキによって廊下は路地となり人々の交流を誘発する。

Connect　～つながり～

しかけによって引き込まれた人々は路地で出会い見て聞いて感じる。そこで生まれた交流はアーティスト達にとってもそこを訪れる人にとっても刺激となる。刺激を受けたアーティストは再び創作活動に訪れた人々は興味をもったアーティストのギャラリーへ、そうしてつながりは大きくなってゆく。

Diagram



設計製図Ⅲ　第１課題

仙台堀川の集合住宅
～アーティストたちが暮らす水辺の集住体～

田原　拓

■コンセプト

この敷地の周りに建つ建物は、隙間なく箱が並べられている、という印象があった。

もっと隙間を開けることによる、スペース的に、また景観的に余裕が必要だと考えた。

とくに木場公園内ということで、建物をつくることで視線を遮り、今までの景観を完全につぶしてしまわないようにすることが必要である。

そこで箱同士を意図的に「ずらす」ことで「隙間」をつくり、視線を通す。またそこを「空間」として利用する。

縦に、また横にずらすことで、周りの開けた空間や周りが閉じた空間などさまざまな空間ができる。

この空間は、視線を通す場、採光の場、コミュニケーションの場、互いのプライバシーを守る間、プライベートゾーン、などの機能を持つ。

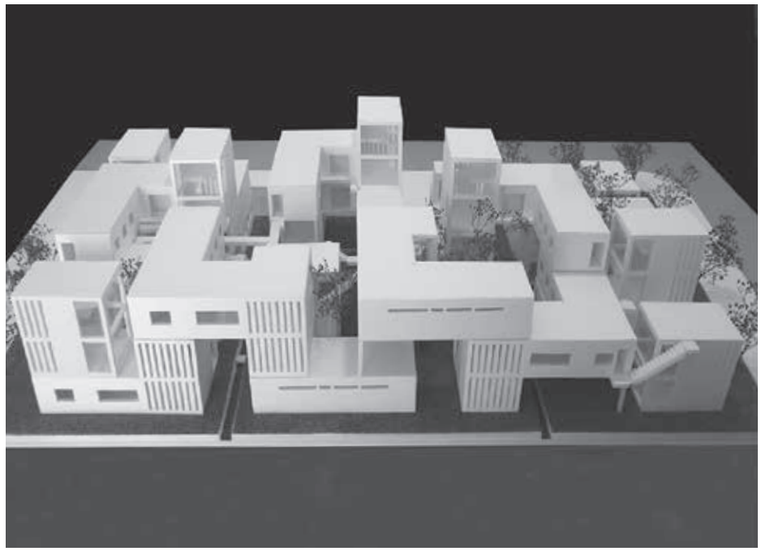
この空間があることにより、ここに住むアーティストたちは日々をゆったりと、また刺激的に過ごし制作活動を行うことができる。

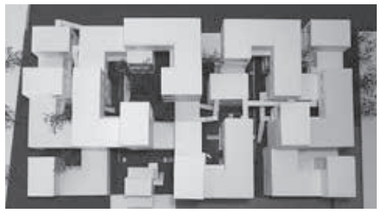
■講評

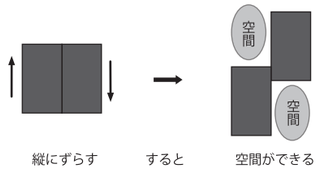
たったひとつのユニットプランで成り立っているとは、にわかに理解できない。路地状の通路が中庭へとつながり、かつ縦方向へと空間が連続している。構成は迷路のように複雑で、同じ空気の場が存在しないからだ。

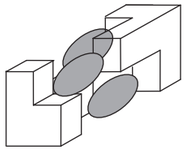
これは建物や中庭、上層へとアプローチする階段、テラスやブリッジが巧みに配置されているからに他ならない。住戸の構成は、平面的には矩形を分割しずらすことによって、２つのＬ型の平面とそこに生まれる隙間を意識してつくられている。加えてアトリエを２層分のボリュームとして意識したことで断面としてもＬ型の形態的意図をもち、縦方向にずらすことによって新たな空間をつくりだしている。平面だけではなく立体的に捉えたことが、この案の最大の特徴であろう。ひとつのユニットはとても単純だが、驚くほど多様で魅力ある集合住宅となった。

ここまでつくりあげるのは、簡単なことではない。田原自身が幾度もスタディを繰り返し、粘り強く課題に向き合った結果であり、優秀作品として充分誇れるものである。　（長井義紀）

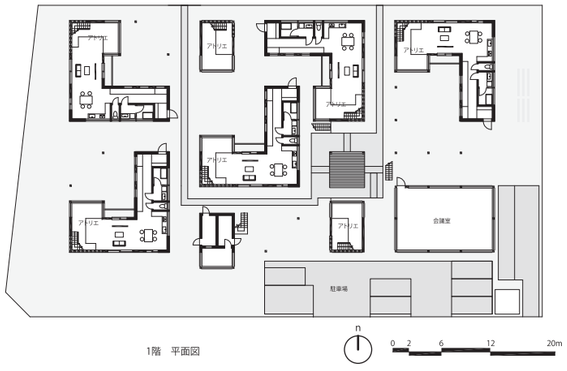




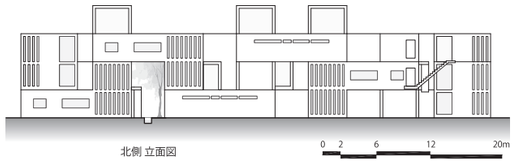




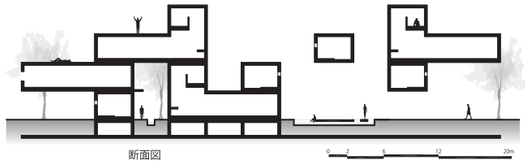
縦と横のズレを
合わせることで
様々な数巻ができる



1階　平面図



北側 立面図



断面図

設計製図Ⅲ　第１課題

仙台堀川の集合住宅
～アーティストたちが暮らす水辺の集住体～

村松拓人

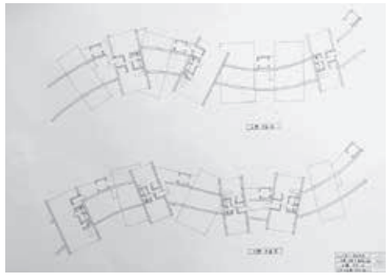
■コンセプト

まず敷地を２つの壁で分ける。それらを曲線にすることで人がたまり、住民同士の交流の場が生まれる。また、２つの壁に住居を差し込むことで住民は都会と自然の景色を感じることができる。壁と壁の間には、ここに住むアーティストが自らの作品を自由に展示できるウォールキャンバスが広がり、代々住んだ人の作品が羅列され、住居を支える壁自体が「完成しない作品」となる。それを住民だけでなく、何気なく通りかかった人たちが立ち寄ることで、刺激を受け、別世界に来てしまったような感覚を覚えさせる。普段、なかなか見ることができないアーティストの生活を感じることができ、かつ、ここを訪れる人に何かしらの影響を与えることができるような集合住宅を設計した。

■講評

壁のように立ちはだかるような建物……とてもネガティブなイメージを与える。村松君の作品はまさにそうであるのに、見事に１粒で２度美味しい、いや３度美味しい場を作り出している。南北の対照的な環境を分断するように敷地中央に立ちはだかる壁を２枚挿入することにより、双方の景観をより引き立てることに成功している。南側は交通量の多い広い道路に面し、オフィスビルが立ち並ぶ。この面には水盤だけが設けられている。カリフォルニアの滴るような緑の中を分け入っていくと忽然と現れるソーク研究所のトラバーチンの床、もしくはニューヨークの喧騒を見事にシャットアウトしているシーグラムビルの足元を思い起こさせる秀逸なアイディアである。北側は静かに運河が流れ、公園の緑が続く。こちら側には芝を張り小さな小屋を点在させ、楽しげで躍動感を味わえる公園にした。そして全住戸がその両面に面しているのである。２度美味しいとはこのことである。３度目は各住戸を支える２枚の壁の間の空間である。周囲から完全に隔絶された緩やかにカーブした路地。その上には浮遊するように住戸が点在する。この異空間がまさに芸術家の住人たちの展示空間なのである。誰もがいつでも訪れる場に自由に作品を展示できる。これは作家、鑑賞者双方にとって、とてもハッピーなことではないか。それが村松君の作品のような素敵な建築であればなおさらのことである。すばらしいセンスのわりに図面に入れ込んでないのがおしいな～。

（佐藤浩平）



設計製図Ⅲ　第２課題

仙台堀川のアートギャラリー＋ショップ＋カフェ

徳永尚亮

■コンセプト

第１課題、アトリエ付き集合住宅での設計案は、各住棟の東西に、外に開かれたアトリエを備えるものであったので、集合住宅の東に隣接する今回のギャラリーは、アーティストと世間との接点となる空間があることが前提としてあった。

敷地条件としては、東京都現代美術館が同じ公園内にあり、これらの建築との関係性から設計主旨を考えた。

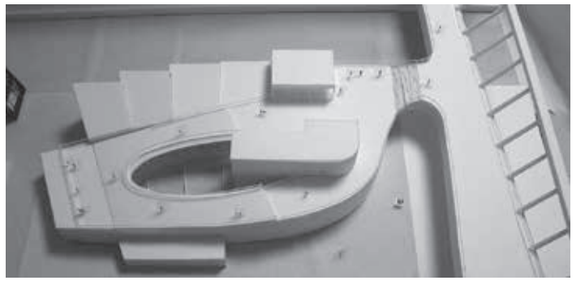
ギャラリーに展示される作品は、集合住宅に住むアーティストたちのものが主だったものになると想定できるので、現代美術館は、すでに名声のあるアーティストの作品を取り扱うことから、今回計画するものは、作者との距離を縮め、より作品の世界に入り込める展示空間とすることで、現代美術館との差別化を計った。

よって展示室は、おのおののアーティストのアトリエに訪問するというイメージを基に、分割・配置させている。

集合住宅内のアトリエを臨める、木場公園大橋と直接連結させた屋上テラスは、回遊性を重視した構成としており、動きのある楕円形の平面としている。また、展示室の採光のための天井高さのズレをそのまま立面に出すことで、屋上テラスからの風景に変化が与えられることを期待した。

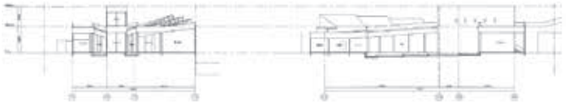
■講評

敷地は仙台堀川の親水公園の中央に位置している。南側に車道、北側に河川が直線的に整備され、南北をつなぐ歩行者専用のブリッジを東側に望む立地である。徳永君の計画の特徴は、人の流れの起点をこのブリッジの延長に設定し、オーヴァルな形状の屋上へ導いているところであろう。河川と都市公園を望む周辺環境を全方位的に取り込みながら、カフェを介した中庭を目下に低層階へと誘う。その形状は、ギャラリーホールでは今度は逆に内側への求心力へと切り替わる。明るく透明で柔らかい中庭に対峙するかのように、各展示室は強い幾何学的な意志に囲われた固い空間だが、それらは分節された展示室のボリュームと巧く適合している。展示室はハイサイドの開口以外、一切の周辺を取り込んでいないが、単純なキューブではない壁面のリズムが面白い。対照的に、コントラストのある屋上ランドスケープの一体性はこの計画のもう１つの魅力であろう。一点に収束する雁行した屋根の連続は、視点を変えながら独特の景観をつくり出しているに違いない。その出来事が具体的にイメージできる表現が加わるとさらに説得力がある。　（内海智行）



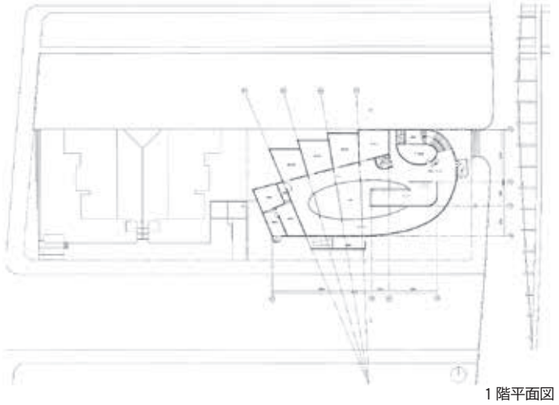
俯瞰

立面

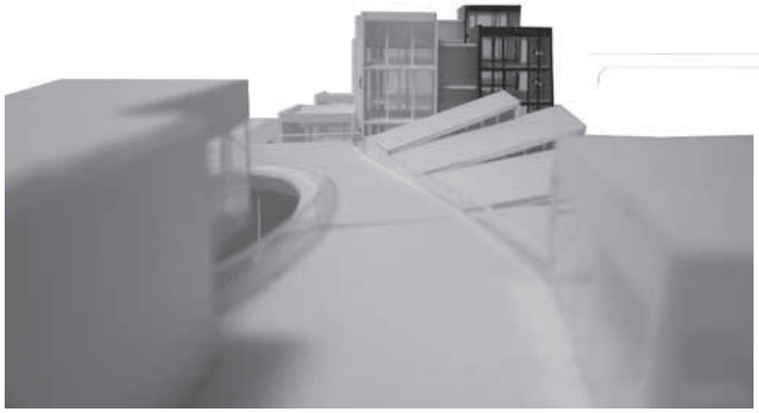


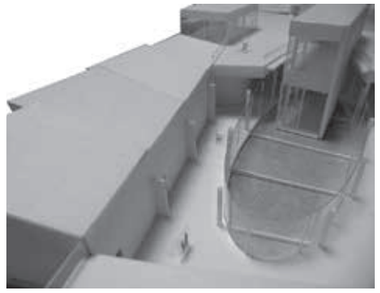
断面図

配置図



1階平面図





設計製図Ⅲ　第２課題

仙台堀川のアートギャラリー＋ショップ＋カフェ

山川大喜

■コンセプト

まだ駆け出しのアーティストたちの作品を多くの人に触れてほしい。そこで、ふらっと寄り道をするような感覚で作品に触れることのできるギャラリーを計画する。

緩やかに曲がった壁を壁が少し重なるように配置していく。→奥へと吸い込まれるような空間ができる。

壁の重なっている場所に少しだけ作品が見えるように展示する。→あれはなんだろう？　と興味をさそう。

壁にそって、作品を展示していく。→次へ次へと作品が人々を誘導する。

曲がった壁、壁の重なり、少しだけ見える作品、壁にそって展示された作品。これらによって敷地付近を通る人々は誘い込まれるようにまだ駆け出しのアーティストたちの作品に出会いながら奥へと進んで行く。気に入ったアーティストに出会えたなら、エントランスでチケットを購入して、個室に入ることもできる。それぞれの個室ではアーティストたちがもっとも大切にしたい作品に出会うことができる。

■講評

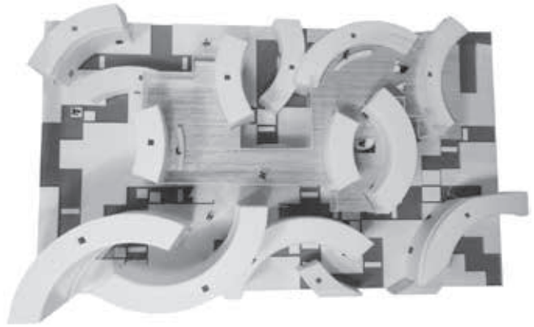
内部空間と外部空間の狭間にある「すきま空間」としてのギャラリーを木場公園横に創ろうとした提案である。

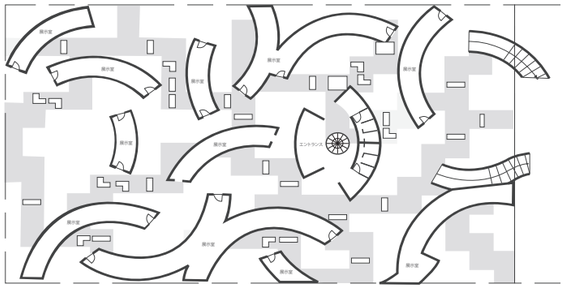
具体的なギャラリーとしての提案は、集合住宅と公園に至る橋の間に１Ｆの水盤と２Ｆのガラススラブを設け、これらの間にさまざまな形状をした衝立状の美術鑑賞用空間をランダムに配置することにある。個々の美術鑑賞空間はすべて互いに平行な曲面で構成されており、その一つ一つの内部と外部にはそれぞれ１点のみ作品が展示されている。さらにこれらの衝立状の美術鑑賞用空間は互いに独立しており、道行く人はそこに生ずる「すきま空間」を通じて、外部空間に展示されている作品を臨むことができる。こうすることで、この近くを通る人をギャラリーの森に誘引することが可能となっている。

一方、美術鑑賞空間の内部空間には、作品が一点とこれを照らし出すたった１つのトップライトしか存在しない。こうすることで入り口より真っ暗闇の中を壁づたいに進んでくると内部空間の奥深くに作品が浮遊しているように演出されている。こうした最小限の工夫により作品をよりいっそう際立たせることを意図している。

このギャラリーは外部空間の誘因性と内部空間の演出性を最小限の空間操作で巧みに融合させた秀作である。作者がこうした両者の関係性を理解した上で、意図的に操作した結果のデザインであるならばこれは慶事である。

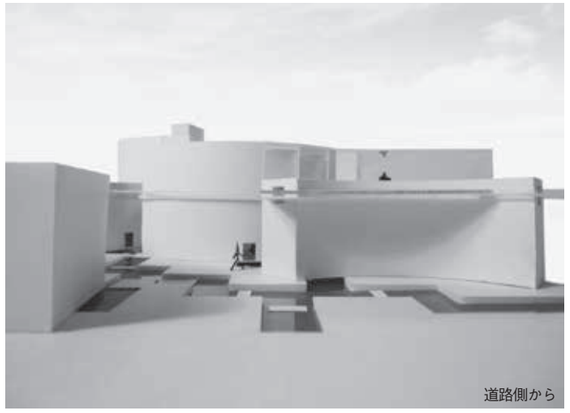
（佐藤信治）



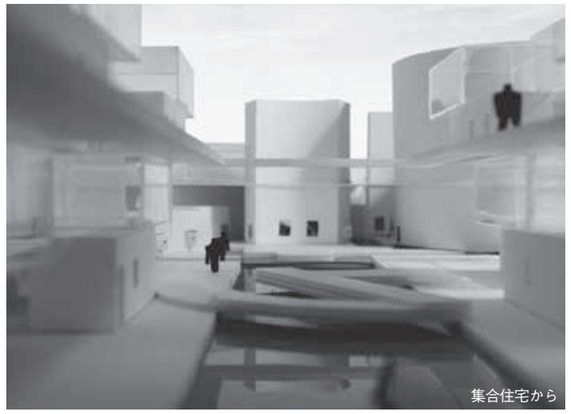


一階平面図

立面



道路側から



集合住宅から

3年生（前期：設計演習Ⅰ、後期：設計演習Ⅱ）

【担当】佐藤　信治
畔柳　昭雄
井上　武司
玉上　貴人
鶴田　伸介
廣部　剛司
藤岡　　尋
光井　　純
矢野　一志

設計演習Ⅰ（前期）

第１課題
「海の駅」
（出題：廣部剛司、佐藤信治）

【課題意図】

「鉄道に駅があるように、道路や海路にも駅があってもいいのではないか」という発想から、『道の駅』、そして『海の駅』は生まれた。

海の駅（うみのえき）とは、国土交通省により登録された、「海から、誰でも、いつでも、気軽に、安心して立ち寄り、利用でき、憩える」船舶係留施設である。離島振興策からスタートして、当初は大型のヨット、モーターボート等の利用環境整備や情報のネットワーク化・提供を目的に設置が推進された。誰でも利用できる船舶係留施設、施設の予約受付案内担当者の配置、公衆便所の設置の３点が必要最低登録要件となっている。

このような行政的解釈から、『海の駅』とは、休憩施設と地域振興施設が一体となった施設であり、単体としての機能に加えて海の駅ネットワークの構築が図られるものと考えられる。加えて、以下の３つの機能が浮かび上がってくる。

(1) 休憩機能：海路利用者の誰もが24時間自由に利用できる休憩施設の提供
(2) 情報発信機能：来館者に対してその地域の文化・名所・特産物などを活用したサービスの提供
(3) 地域連携機能：それぞれの地域（町）の核となり、海路を介した地域（町同士）連携の促進

計画地は、稲毛海浜公園の一帯で、幕張メッセ（設計：槇文彦）からもほど近い場所に位置する。この付近は、昭和20年後半頃まで、浅瀬の海で、貝や海苔の養殖が行われていた。その後、臨海部の海浜ニュータウン埋め立て事業により、市民の安らぎの場と自然環境の保全のためにできた人工公園である。東京湾に面する、海浜ニュータウン地区の海岸に沿って長さ３km、幅約0.1～0.3km、総面積83.0ha もある大規模な公園となっている。人工海浜いなげの浜は、シーズンになれば日光浴や海水浴をする人で賑わい、人工海浜いなげの浜の隣にあるヨットハーバーは、海洋レジャーの拠点にもなっている。このほか園内には、「花の美術館（設計：A&T 建築研究所）」、テニスコート、野球場、稲毛の歴史や海に関する資料が展示されている稲毛記念館なども点在している。

『海の駅』は、このうち既存ヨットハーバーの係留施設、駐車場等を生かしながら、機能を拡充して約6,400㎡の設定敷地エリアに計画することとする。海へと開けた眺望を生かしながら、駐車場〈道〉と係留施設〈海〉の結節点として、賑わいを演出するような『海の駅』の計画を求めたい。

今後、第２課題ではヨットハーバー対岸の敷地に『水族館』、後期では少し離れた場所に『宿泊施設』の計画をしていくことになるため、一体的な地域再開発イメージを持ちながら取り組むことも求められる。

【設計条件】

(1) 敷地条件：敷地形状、接道条件、周辺状況は、別添図面を参照。電気・ガス・上下水道は整備済。地盤は軟弱であり、杭基礎とするが、耐圧盤下の表現は不要。敷地設定範囲外への提案については、各班ごとの指導によること。
(2) 建築条件：構造形式は自由。建ぺい率・容積率の考慮は不要。基本的に隣地および道路境界より１m以上セットバックさせる。
(3) 計画諸元
① 建築諸室：延べ面積 約2,000㎡（各室面積の±10%を許容範囲とする）

客用部門	計1,450㎡
・玄関ロビー	200㎡
・休憩ラウンジ	100㎡
・レストラン、カフェ	300㎡
・物産販売店舗	400㎡
・展示スペース	250㎡
・来館者用化粧室	80㎡
・廊下、階段、客用 EV	120㎡
管理部門	計550㎡
・事務室	170㎡
・会議室、応接室	50㎡
・宿直室	15㎡
・給湯室、従業員トイレ	15㎡
・管理エントランス、廊下、階段、人貨用 EV	100㎡
・倉庫	100㎡
・機械室（電気･空調･受水槽）	100㎡

② 屋外施設：アプローチ、広場、散策路、植栽などを、建築と一体のランドスケープとしてデザインすること（敷地外への提案も可能）。来館者用駐車場100台（うち大型５台、身障者用５台）、サービス用10台程度については既存駐車場を利用するが、それぞれの想定エリアは明記すること。

【提出物】

(1) 表紙：作品にタイトルを付け、設計主旨をテキスト、ダイアグラム、パース、スケッチ、模型写真等で明快かつ視覚的に表現（枚数自由）
(2) 配置図（縮尺１/500）：建築物は屋根伏とし、外構計画を表現
(3) 平面図（縮尺１/200）：各階平面、室名は凡例をつけて略号も可。１階平面図には周辺の外構も記載
(4) 立面図（縮尺１/200）：４面すべて、影や素材等を表現
(5) 断面図（縮尺１/200、１/300）：２面以上、水域と建物との関係を表現（南北、東西それぞれ）
(6) 模型（縮尺１/200）：模型提出のほか、模型写真２カット以上を表紙にレイアウト
(7) 内観パース：手描きでも CG でも表現方法は自由。１カット以上

※提出図面はＡ１横使い左端とじ、用紙・図面表現は自由、CAD・CG の使用も可とする。

第２課題
「稲毛海浜公園水族館」
（課題担当：鶴田伸介、藤岡　尋）

【課題主旨】

今回の課題は、第１課題：海の駅に引き続き、同じ稲毛海浜公園の近接地に水族館の設計をします。

水族館は19世紀以来、自然科学系の博物館として（1853年ロンドン・リージェント・パーク）、また集客施設として（1867年パリ万国博覧会）多くの人々から親しまれてきた施設です。

水族館の定義には、娯楽・教育・研究・環境保護が考えられますが、基本は、魚類を代表とする水生動物を生きたままの状態で展示することでその方法は時代とともに進化しています。アミューズメント性の高い海中空間を疑似体験できる大型水槽や３次元水槽の導入に技術を駆使する傾向も見られます。しかしながら新しさ・楽しさだけが良いとも限りません。水族館のこの課題を契機に社会の中での「水族館」という施設の在り方を考察するとともに、来客機能、飼育・研究機能、設備機能、管理機能のソフト、ハードを把握してください。そして、この水辺の敷地環境を生かした陸と海をつなぐ空間の複合体として風景となる施設を第１課題：海の駅と後期の課題で予定している東側対岸の宿泊施設の計画と内外部空間、動線等一体的な地域再開発イメージを考慮の上、ランドスケープを含めた魅力ある水族館を設計してください。

【設計のポイント】

・水族館機能の把握：観客スペースと管理スペースの関係性
・水族館施設の配置：教育、研究、展示、アミューズメント性の関係性（適正な動線の確保）
・コンセプトの創出：説得力のあるコンセプトに基づく新しい海と陸を結ぶ水族館の創出
・コンセプトの表現：コンセプトを具体化する水際空間の設計、屋外展示を含む造形性とそのプレゼンテーション表現
・地域再開発的配慮：敷地東側に隣接する第１課題の海の駅と後期課題の宿泊施設との連動性、景観的な配慮、周辺環境との関係性

【設計条件】

(1) 敷地の形状や高低差、接道条件、周辺状況などは別紙図面を参照。
(2) 計画諸元
建物の高さ：15m内（３階程度）
敷地面積　：12,000㎡
延べ床面積：合計 約6,000㎡
①建築諸室

パブリック部門	約3,500㎡
管理部門	約2,500㎡

②屋外施設
・アプローチ、入口広場他
・駐車場適宜（高齢者や身障者用に５台、サービス車用に大型車３台）
・その他のランドスケープ
屋外展示施設、水際、広場、植栽、等 適宜

【提出物】

(1) 図面
①配置図：縮尺１/500
②各階平面図：縮尺１/200
③立面図：縮尺１/200（２面以上）
④断面図：縮尺１/200（２面以上）
(2) 計画概要（表紙とする）
①タイトル
②設計主旨：感想ではなく、計画意図を的確に文章化し、ダイアグラム、フロー図などを交えて、簡潔かつビジュアルに表現する。
③各階の床面積（部門別）および延べ面積を表としてまとめる。
(3) 模型および写真
①模型は１/200スケールで敷地内外を含めて仕上げる。
②写真はキャビネ版４点以上。
(4) 図面提出仕様：A1判横使い左綴じ。コンセプトおよびゾーニング図、面積表並びに写真を貼ったものを表紙とし、レイアウト、着色は自由。CAD 等の使用は自由。

設計演習Ⅱ（後期）

第１課題
「海のリゾートホテル」
（出題：光井　純）

【課題テーマ】

前課題の施設を活かしながら、短期滞在型ホテルのデザインを行います。家族や友人と海を見ながらゆっくりとした時間を過ごせる空間をデザインしてください。客室数は14室程度ですが、キッチンやリビングスペースを備えた快適な空間を作成。また、既存の森や海との関係を工夫すること。

ホテルの入り口は大切です。車回しから客室へつながる空間のシークエンスが日常から特別な空間への心の変化生み出します。今回は桟橋を作って海からのアクセスも考えたいと思います。

心を開放する空間とはどのようなものなのか、各自がじっくり考えて自分だけのリゾートホテルを作り出してください。

【設計のポイント】

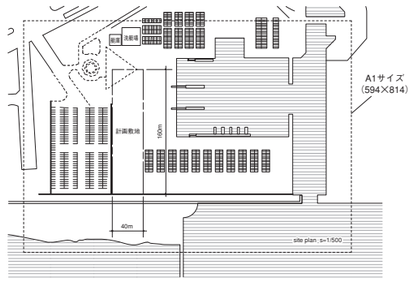
・滞在時間、リゾートホテルのデザイン･配置をする。
・３～４泊でヨットハーバー施設を利用したり、水族館を楽しみながらゆっくりと家族で過ごせるホテルとする。
・客室は全部で14戸とする。
・配置を工夫し豊かな外部空間を作成。
・平屋建て、または２～３階建ても可能だが、変化のある宿泊施設とする。
・入り口に車回しを設け、ロビーへとつながる動線を考えること。
・天気の良いときには外部での飲食を楽しむことができるものとする。
・レストランは室内とする。
・敷地全体に散歩道を設けてそぞろ歩きのできる外部空間を作成する。

【設計条件】

敷地面積：18,000㎡
延べ床面積：2,000㎡程度
構造形式：自由
(1) 宿泊エリア：スイート（80㎡）14室
(2) フィットネス･スパエリア：スパ施設、フィットネス施設（各100㎡）
(3) パブリックエリア：ロビー（200㎡）、ライブラリー（100㎡）、レストラン・バー（100㎡）
(4) 管理エリア：事務室（50㎡）、リネン庫・倉庫（50㎡）、スタッフ食堂（50㎡）、スタッフ休憩室（20㎡）、機械室（200㎡）
※ 海との関係に留意した計画とする。
※ ランドスケープも含めた提案。
※ 建物高さ12m 以内。
※ 前面道路、海の駅、水族館、新設の架橋それぞれからのアクセスに留意した動線計画とする。

【提出物】

(1) 計画趣旨を文章、ゾーニング図表のダイアグラムを交え簡潔に表現すること。
(2) 建築面積、延べ床面積、各室の面積を表にして添付すること。
(3) 配置図：縮尺１/500
(4) 各階平面図：縮尺１/200
(5) 客室平面図：縮尺１/100
(6) 立面図（２面）：縮尺１/200
(7) 断面図（２面）：縮尺１/200（海との関係性を表現すること）
(8) パース（２カット）：フリーハンド。１カットは客室を必ず入れること。
(9) 模型および写真：模型は敷地内外を含め縮尺1/200で仕上げること。模型写真は大きなもの１枚と小さなものを複数配置し、タイトルを入れて表紙を作る。



第２課題
「稲毛海浜公園総合プロジェクト
―マスタープランづくり―」
（出題：畔柳昭雄）

【課題主旨】

本課題は、３年生の前期課題として行った「海の駅」「水族館」と後期第１課題「ホテル」、即日設計「橋梁」の４つの課題を改めて、この水辺の敷地環境を活かし、陸域と海域をつなぐ空間の複合体としてのマスタープランをまとめる。

【提出物】

(1) コンセプト：A1　１枚
(2) 全体配置図：縮尺１/500
(3) 断面図（２面　縮尺１/300（全体がわかり、立面がわかるもの）
(4) 全体模型：縮尺１/200～１/500（１/200の場合、これまでの提出模型の使用も可）
(5) 模型写真：３カット以上
(6) ランドスケープがわかるパースまたは部分模型

設計演習Ⅰ　第１課題
海の駅

海藤　航

■コンセプト

「Sunbeams｜木洩れ日」

人間は自然環境のような原初的な居場所に本能的な魅力を感じます。それは木洩れ日のような柔らかい光のある空間に心地よさや好奇心を抱くからだと思います。

この建築は無数の開口のある大屋根と無数の柱によって構成されています。大屋根は天井から柔らかな光を内部空間へ届けます。柱は木の間をぬって歩くような体験を人々に与えます。人々の活動で賑わうヨットハーバー内はヨットを保管するためのスペースが必要であるため、日光を遮るものが何もない状態。そこで木洩れ日のような心地よいスペースを作ることが必要であると考えます。木洩れ日のような空間を天から拡散した光が降り注ぐ空間としてとらえます。そこで大屋根に無数の開口のある空間を提案します。大屋根が内部空間に日陰を作り、屋根に無数の開口をあけることによって拡散した光が内部空間に届けられます。

■講評

本課題は稲毛海岸のヨットハーバーに海の駅を設計するという課題である。

敷地はバスや船といった陸、海からの各交通機関のアクセスだけでなく、第２課題で設計する水族館への動線、海側に広がる雄大な景観など、ほぼ全方位へ何かしらの配慮が必要な難しい課題であった。

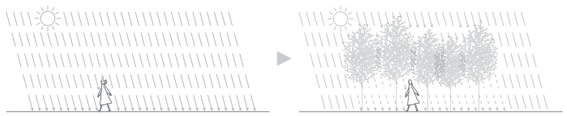
敷地を持て余し、外部空間と内部空間が乖離した案が多いなか、そのような敷地に海藤君はランドスケープと連続した全方位ガラスで囲われた抽象的な「森」を配置した。建物に正面を設けずガラスで囲う手法は現代建築の常套手段ではあるが、本敷地への解としては妥当といえる。本案はそれよりも人々の集まる駅を「森」として解釈し、木漏れ日を人工的に作り出すことで美しく「森」を表現したことが評価につながったといえる。

「木漏れ日のなか木立を縫って歩くような空間が市民の集まる癒しの場である」という海藤君のコンセプトの魅力は模型から存分に伝わってくる。天井に開けたランダムなトップライトからは光がこぼれ落ち、木立のメタファーである林立した細い柱によって森の体を成している。諸室が屋根と切り離し独立させていることでそれがより強調されている。

敷地を良く観察しコンテクストを読むことは設計のアイデアを生み出すためにとても大切なことである。周囲に日陰が無いことに気づき木漏れ日の森をつくろうとした感性を大切にし、今後に活かしてほしい。　（玉上貴人）

Photo：建築全景

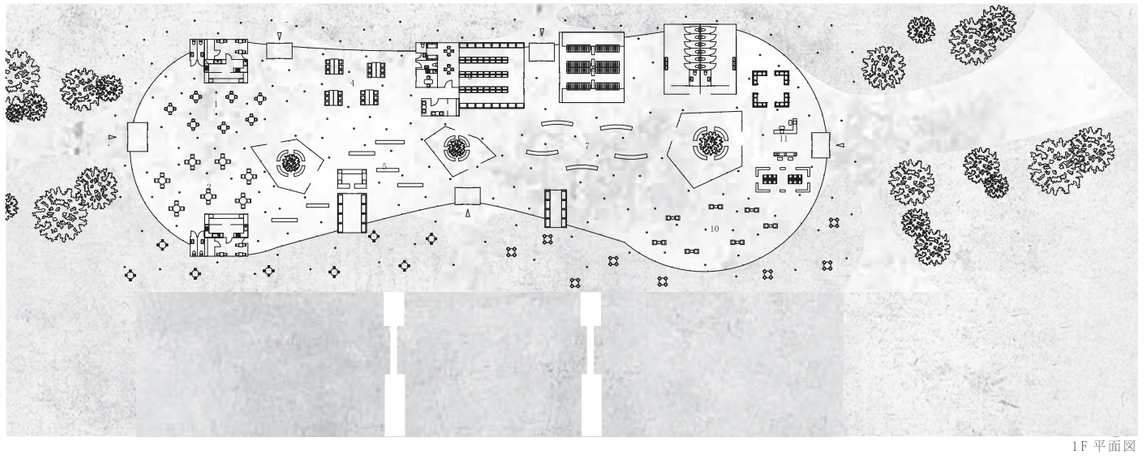
Concept1｜木洩れ日空間



ヨットハーバー内は日光を遮るものが何もない状態。そこで木漏れ日のような心地よいスペースを作ることが必要であると考ます。

Diagram

木洩れ日のような空間を大屋根のある空間ととらえます。大屋根が内部空間に日陰を作り、屋根に開口を設けることで拡散した光が内部空間に届けられます。



1F 平面図

断面図

設計演習Ⅰ　第１課題
海の駅

青木秀史

■コンセプト

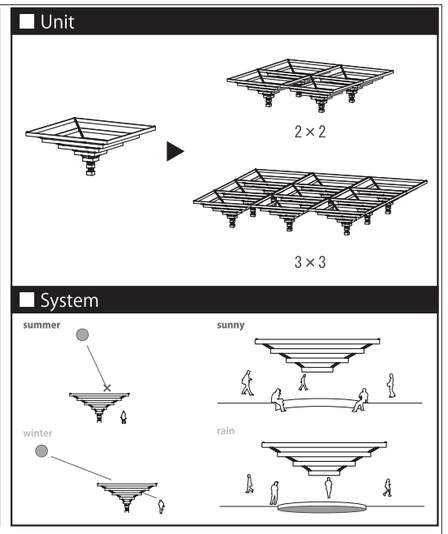
「自然と連動する海の駅」

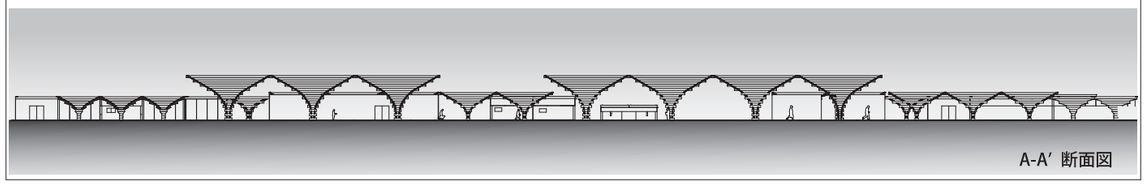
本作では、敷地の特徴である雨や風、陽などの自然環境因子の影響を受けやすい点に着目し、その影響を遮るのではなく、利活用する海の駅を計画した。この海の駅は季節・天候の変化に対応する傘状のユニットの結合体で構成されており、さまざまな異なったスケールのユニット群が集まっている。夏季になると陽が高い位置を通過するため、真上から入射する陽はユニットのルーバーに遮られる。一方で、冬季には陽が約30度付近と低い位置を通過するため、ユニットのルーバーの間から陽が中に差し込む。つまり、夏は陽を遮ることができ、冬は陽を取り込むことができる構造になっている。また、ユニットの中心部をみるとだんだん下部に向って収束しており、雨が降ると、このルーバーをつたい、雨水が中心に集まる仕組みになっている。このユニットをくぼみのある広場の上に設けることで、雨天時には水たまりが形成され、親水空間が生まれる。

■講評

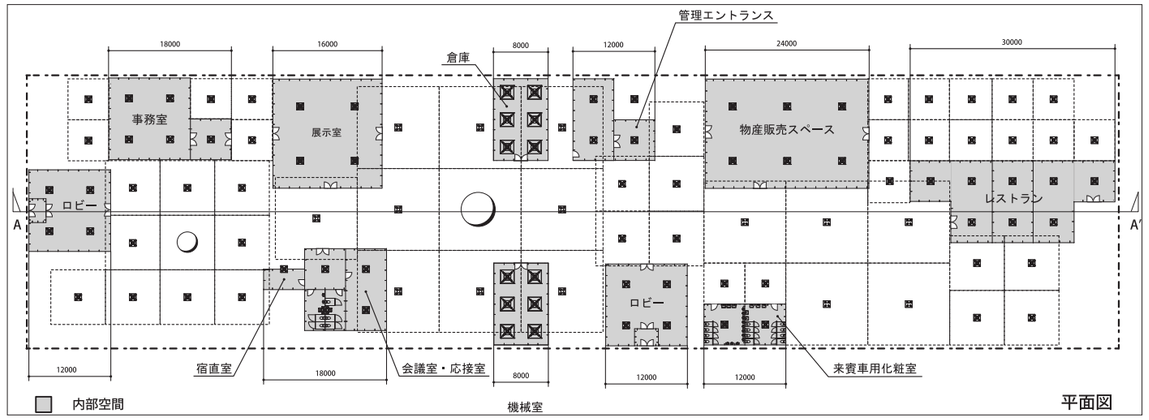
１つのかたちを見つけて、それを建築に展開していく。選び取るカタチによって、またその展開の仕方によっては、ともするとそれは単調な空間に陥るという結果を導いてしまう。

まるで樹木のような基本形からスタートした本案は、スタディの末に大きさの違う相似形を組み合わせるというプランに辿り着いた。１つのモチーフでもそのスケールを移動させていくと内部に生まれる空間とそこに居る人間との関係は、とたんに大きな「動き」を見せ始める。平坦な大空間が連続するのではなく、人の目線に近いスケール→人を包むスケール→それ全体を大きく包むスケールが連続的に展開されているのだ。模型を上から眺めるとかなり大きな塊に見えるが、人のスケールに目線を落としてみると、それは大きな広場に内部的な空間が入れ子のように存在する空間構成になっていることに気付く。また、この樹木的な基本ユニットの特徴は、その中央部がつねに「外」であるということだ。だから大きなユニットも小さなユニットも常に〈中心に外部を抱え込んで〉いる。そこから抑制された光と風が内部にいる人間に提供される。スケールの大きな建築は、奥行きの深さによって息苦しい場をつくってしまう危険性と隣合わせだが、ここでは外部から隔絶された「奥」というものが軽妙に払拭されているのだ。呼吸をするような自然さで内部のアクティビティを包んでいく可能性を持った提案である。（廣部剛司）





A-A′ 断面図



平面図

設計演習Ⅰ　第２課題

稲毛海浜公園水族館

斉藤亮介

■コンセプト

昭和30年代、稲毛海岸の埋め立て工事が始まる前まで、稲毛は半農半漁の町でした。

今の稲毛地区の人たちは、畑や田んぼを耕しながら、海苔の養殖や漁業・海水浴や潮干狩りの観光客相手の仕事をする人がたくさんいました。

この遠浅の浜は、新月の晩になると、潮が引いて広い砂浜となります。

この引いた浜の“潮溜まり”には、たくさんの魚や貝やえびなどがいました。

新月の晩になると、住民たちは“カンテラ”を下げながら、この魚やえびなどを獲る遊びの漁をしていました。

この漁の名前が「夜灯し漁」です。

この今では失われてしまった稲毛の“記憶”をこの稲毛海浜公園に表現し、カンテラの代わりに“水槽”を使って稲毛の人たちに伝えていこうと思い、この水族館を提案しました。

■講評

この課題では水族館という施設の機能を理解し、水辺に新たな景観要素として成立させるとともに、隣接する海の駅や計画敷地周辺の環境との関係性を考慮し環境全体を一体的に創造する意識を高めることを目的としている。陸路としてのアクセス手段とともに海路交通のハブとした海の駅に隣接することで、さまざまな視点からの理解と提案が期待できる課題となった。

敷地は稲毛海浜公園に近接したヨットハーバー内に計画し、既存の造成を考慮に入れた計画となったため、比較的具体的で建築の内容に集中できた秀作が多く提案された。

斎藤案は水辺の波紋を造形的なモチーフに取り入れながら、海の駅からの人の流れが建物や周辺に穏やかに美しさをもって展開されていく提案となっている。ともすると自由な曲線の造形が稚拙なものになりがちなところを、施設の要素を緻密に取り込みながら、彼の表現する「流れ」をコンテンポラリーな建築表現として説得力を持たせている。施設のテーマに地域の歴史性を紐解きながら、歴史の重層感を動線の高低差で表現し、過去に沈み水槽からゆっくりと浮かび上がりながら過去と現在を行き来する展示空間。水辺に開かれたカンテラ水槽は過去の懐かしさを現在につなぐオマージュであり、こうした歴史の時間を潮の満ち干きで表現しているところなど施設全体に一貫した詩情性に満ちている。こうした豊かなストーリーの片鱗を建築的に一つ一つ解決しながら完成度を持った秀作であり、今後の成長が楽しみな作品である。　（鶴田伸介）

設計演習Ⅰ　第２課題

稲毛海浜公園水族館

涌井　匠

■コンセプト

街の人の流れから水族館を設計する。

計画地は千葉県美浜区稲毛海浜公園内のヨットハーバーに面した土地。

美浜区は1961年に埋め立てられた土地で、人が生活しやすいように作られた。そのため、まっすぐの道路は垂直に交差し、起伏もなく、先に何があるか容易に見渡すことができる。

そんな美浜区の海沿いに造られた稲毛海浜公園は、約２km に及ぶ大きな海浜公園である。美浜区の住宅地の形状に反して、曲がりくねった起伏のある場所で、曜日や時間帯を問わず家族連れや散歩客で賑わっている。

既存の散歩道の道幅５m で必要諸室の合計面積3,000㎡を割ると、必要な水族館の動線の長さ600m が算出される。道の長さ600m は変えずに、周辺の環境や、展示、バックヤードの諸室に合わせて動線を自由に、ダイナミックに操作していく。

公園の動線の形態、道幅に合わせた水族館の動線は、緩やかにこれまでの公園と結ばれる。

散歩道の途中に現れた、賑わいの集まる水族館。

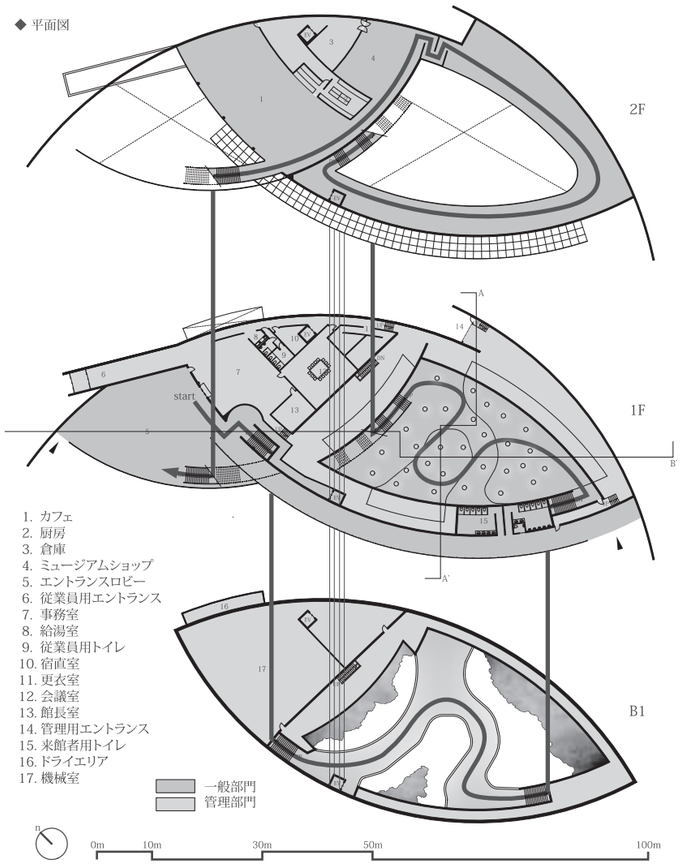
■講評

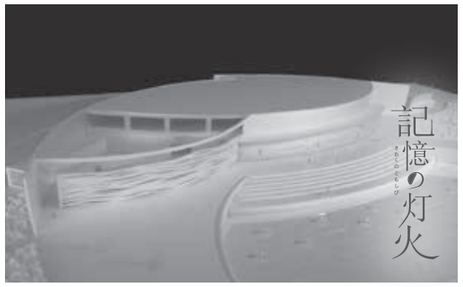
本課題では、稲毛海浜公園の隣接地に建つ水族館の設計を通して社会の中での「水族館」という施設のあり方を考察するとともに、水辺環境を生かしたランドスケープとしての建築を提案することが求められた。

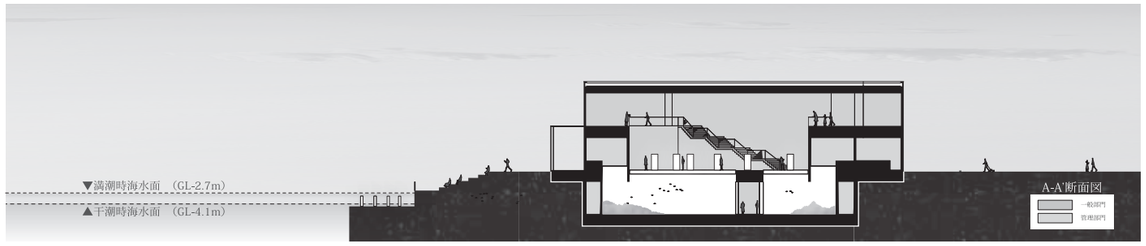
「心海－道が向かう場所－」と名付けられた本作品は、真に生命を観察する場所としての水族館の可能性を探求しようとした力作である。魚という生命体が持っている擬態という機能に着目し、その性質をあらゆる角度から観察できる水槽配置と動線を計画している。また、埋立地特有の直線的な風景に新たな息吹を吹き込むことを意図して、心臓を模したような生命感の溢れる建築形態を提案しており、計画地と公園や陸と海を有機的につなぎ合わせることに見事に成功している。２つのスパイラルで構成された展示空間が魅力的であるが故に、水槽と鑑賞者との関係にもうひと工夫あればよりコンセプトを具現化できたと思うが、いずれにしても圧倒的な力量の作品であった。

涌井君は、前年度、本学科の海外研修旅行に参加し、欧州の優れた水族館や近・現代建築を見学している。その際の体験がこのような形で作品化され、高評価につながったことを考えると学生が優れた実例に触れることの大切さを実感すると同時に、学生諸君には、多くの名建築に触れ、自らの感性を磨いてほしいと思う。　（矢野一志）

◆ 平面図

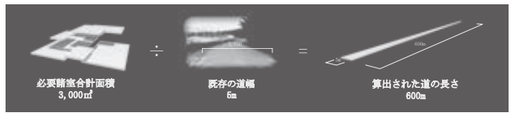






■ 形態の設定方法 － 紐を使った動線スタディ

■ 動線の設定方法 － 既存の道幅による動線の算出



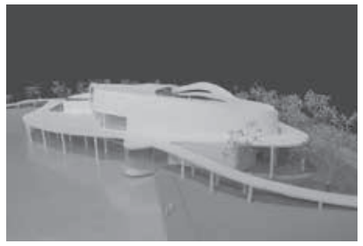
■ 動線計画ダイアグラム － 機能に応じた形態と展示をあらゆる角度から魅せる経路

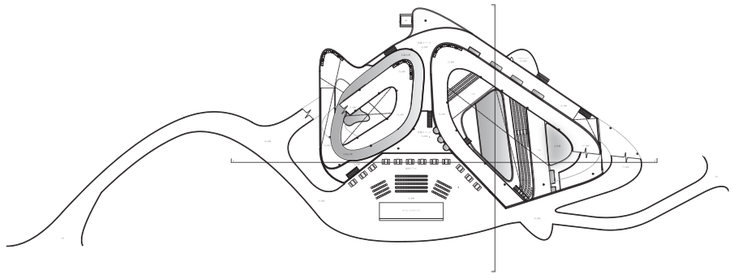
空間を分断しないために一筆書きで動線を計画。
展示をあらゆる視点から鑑賞できる円形をもとに積層させる。

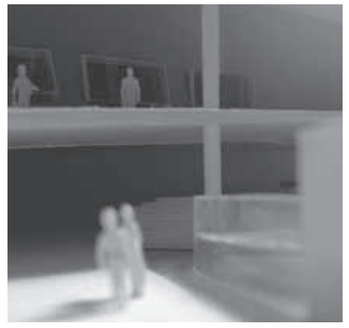
水槽や管理スペースの大きさと内部機能を考慮し、円径を調整する。
天井高が同じ小さな空間と大きな空間ができる。

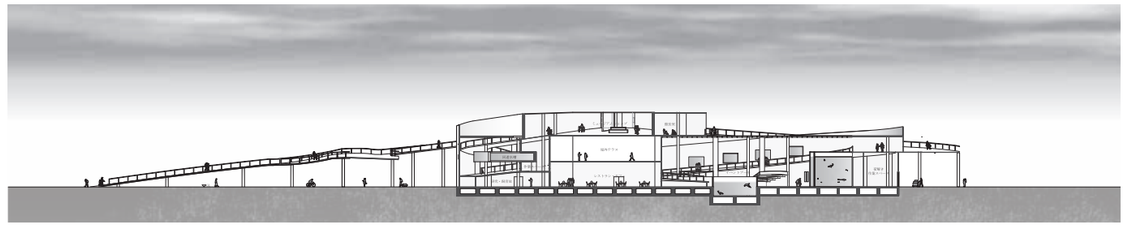
更に細かいゾーニングに合わせて動線を適応させる。
法規の勾配から必要最低長さを算出し、敷地に合わせて形態が決まる。

既存の散歩道に合わせて東西２方向に伸びるアプローチを計画し、
「道の途中」にある水族館を設計する。









設計演習Ⅱ　第１課題

海のリゾートホテル

涌井　匠

■コンセプト

「群生 hotel」

―空間利用―

今回の敷地は整備された公園内にあり、すでに心地良い空間が構成されている。それは散歩や釣り・サイクリングを楽しむものなど、近隣住民の日常も含んだ空間である。その心地良い空間をできる限り壊さず、既存の空間に寄り沿うようなホテルを設計した。

―森の利用―

この地特有の景色を利用し、それを切り取ることを心がけた。不自然に高さのそろった森を、スラブの隙間を利用し、高さごとの顔を覗かせる。GLでは森の根元を切り取っていた隙間は、レベルが上がるごとに色や量の違う森を切り取る。そして客室に入ると森の上に自分が立ち、そろった木々の頭の先に東京湾を一望する。

―海の利用―

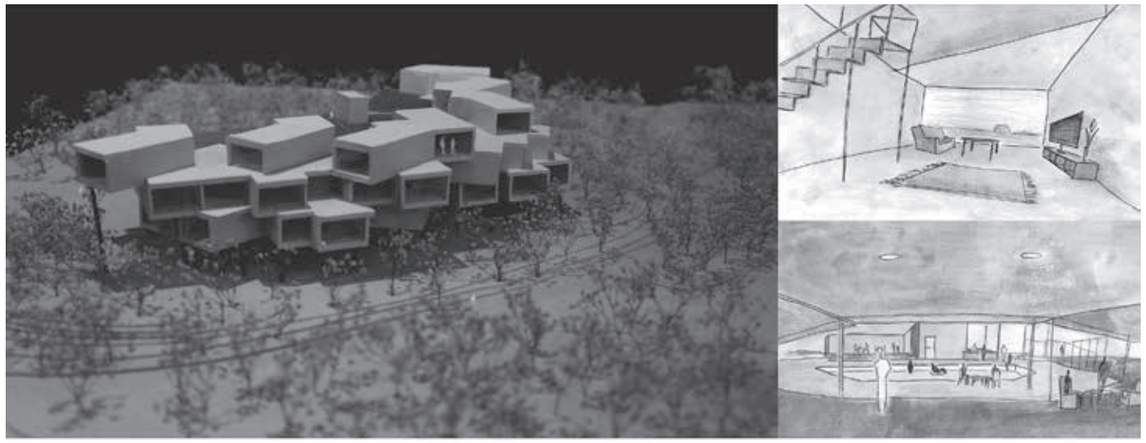
客室では東京湾の２種類の顔を見せる。東京側は、遠くに見えるビル群とそこに落ちる夕日を切り取る。千葉側は、工業地域の工場群を切り取る。客室に入った瞬間に見える景色は、同じ空間にいても、違う顔を見せる

■講評

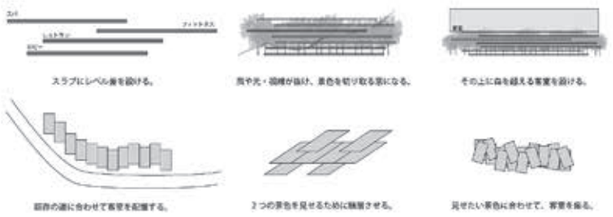
この作品はまず、敷地の中の豊かな樹林と建物との関係をデザインに取り込んでいる。樹木は見る高さによって表情を変えてゆく。すなわちホテルの部屋の高さによって、樹木の表情は変化してゆく。幹、茂った部分、頂部の樹形、樹林を見下ろす視点など森と建築との関係を巧みにデザインに取り入れた作品である。さらに、東京湾への眺望、房総方面への眺望、マリーナへの眺望を考慮して配置したホテルの客室は、太陽の角度の変化によって刻々と表情を変えてゆく。時間によって変化する森の表情と共鳴しながら、人工物と自然との境界をできるだけなくしてゆくデザインを目指しているようにも見える。

外部空間は広場状のデッキを階段状に展開して、森の中のイベント空間を作り上げている。欲をいえば、具体的なランドスケープデザインまでデザイン提案がされていると、外部空間の魅力はもっと伝わったのではないかと思う。

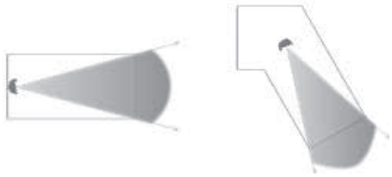
本来、建築デザインとランドスケープデザイン、そしてインテリアデザインは一体的なものであり、同時に考えることによってそれぞれを不可分のものに仕上げてゆくことができる。この作品はそうした意味ですぐれた着眼点を持った佳作となっている。（光井　純）

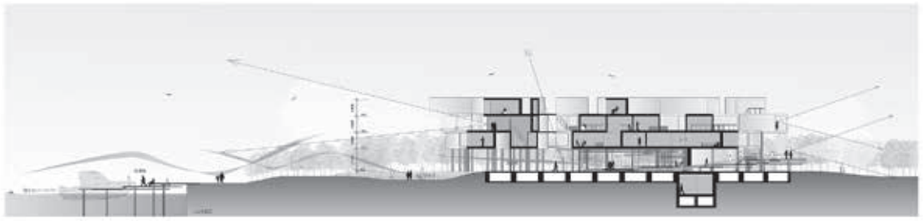


■ダイアグラム



■限定される視野





設計演習Ⅱ　第１課題

海のリゾートホテル

伊藤春樹

■コンセプト

「人々の心をつなぐ新しい散歩道

～落ち着きを与え素に帰る～」

私の中のリゾートとは、散歩である。

リゾートホテルとは、現実とかけ離れ非日常的な空間であり、その空間で過ごしていただき日常に戻るときには、素の自分で帰るということである。

木々の中を散歩するということは、木漏れ日・風による木々の音などによりリラクゼーション効果をもたらせ、人々を落ち着かせる。

また、大都会と自然地域（房総半島）との中間地点なので、道を曲線ではなく雷のようにし、現代的な建築にし、その中で木々の空間、見せ方を変化させてどのニーズにも対応するように設計した。

■講評

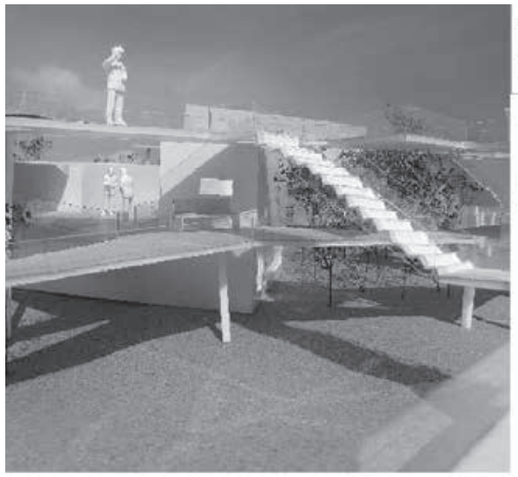
本課題では前期で設計した海の駅、水族館につづき同エリアに短期滞在型ホテルを設計することで１つのリゾートエリアを完成させた。そのため周辺施設の活用、既存の森と海との関係を考慮し外部に広がるランドスケープとともにホテル空間をいかに豊かにできるかという点が重視される課題となった。

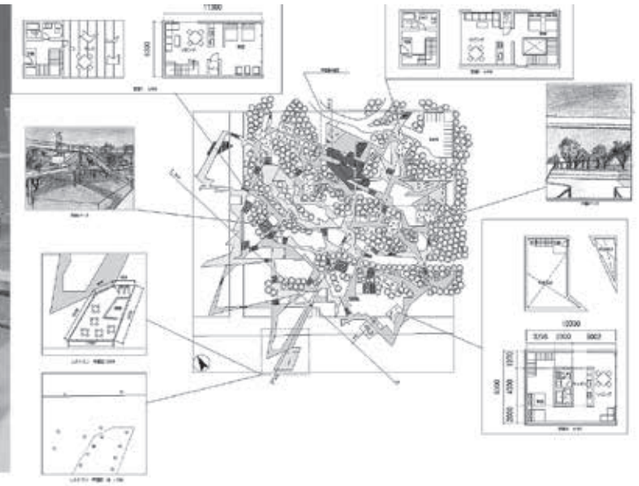
そのなかで伊藤君の案は「敷地全体に散歩道を設けてそぞろ歩きのできる外部空間をつくること」というレギュレーションをヒントに敷地のコンテクストを上手くデザインへと昇華した良案であった。

一見恣意的に描いたように見える敷地に通路を張り巡らせたデザインは敷地の航空写真の解像度を下げることで森の木々とそうでない部分のボーダーを見出し、極力既存の自然を破壊しないように建築するという配慮から生まれたデザインである。エスキース段階で私はそのアイデアについて客動線とサービス動線の交錯について配慮するよう指導したが、伊藤君は通路を２層にすることでそれを解決し木々を別の視点で眺められるという付加価値を与えた。

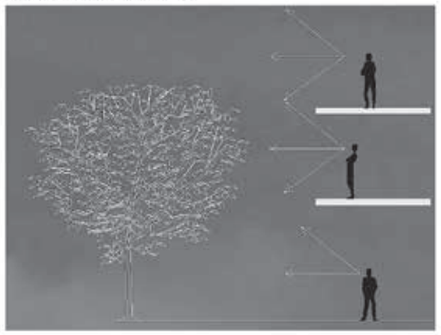
このような形態の印象が強い案の場合、説得力のあるプレゼンテーションが求められるが、さまざまな要素に対し、しっかり考慮されていたことが高評価につながったといえるだろう。

（玉上貴人）

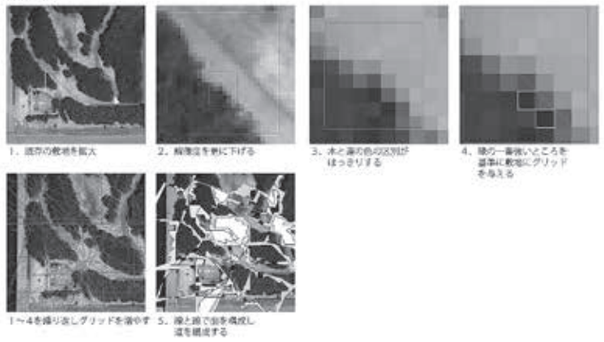


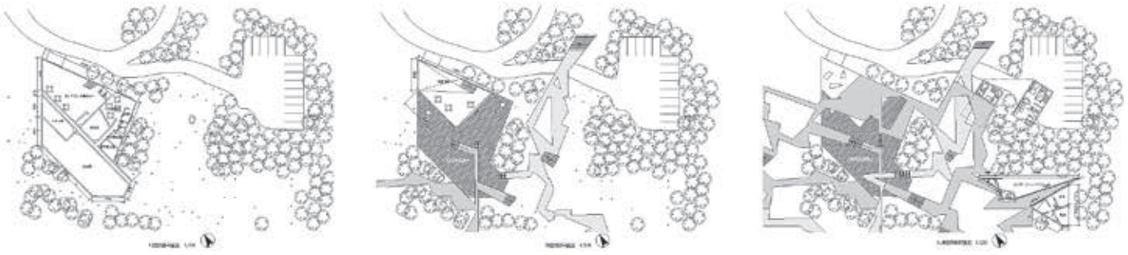


レベル差による非日常的な空間構成



道の構成





設計演習Ⅱ　第２課題

稲毛海浜公園総合プロジェクト
―マスタープランづくり―

涌井　匠

■コンセプト

ランドスケープデザインを行うということは、海の駅を設計する以前から聞かされていたので、今までの課題でそれを考慮しながらそれぞれの設計を行っていた。

今回の敷地は、埋め立て地にある大きな海浜公園で、すべて作られた人口の公園である。

人が計画した公園は、人が過ごしやすいように、心地良いように設計されていると考え、それを残し、生かすランドスケープを設計する。

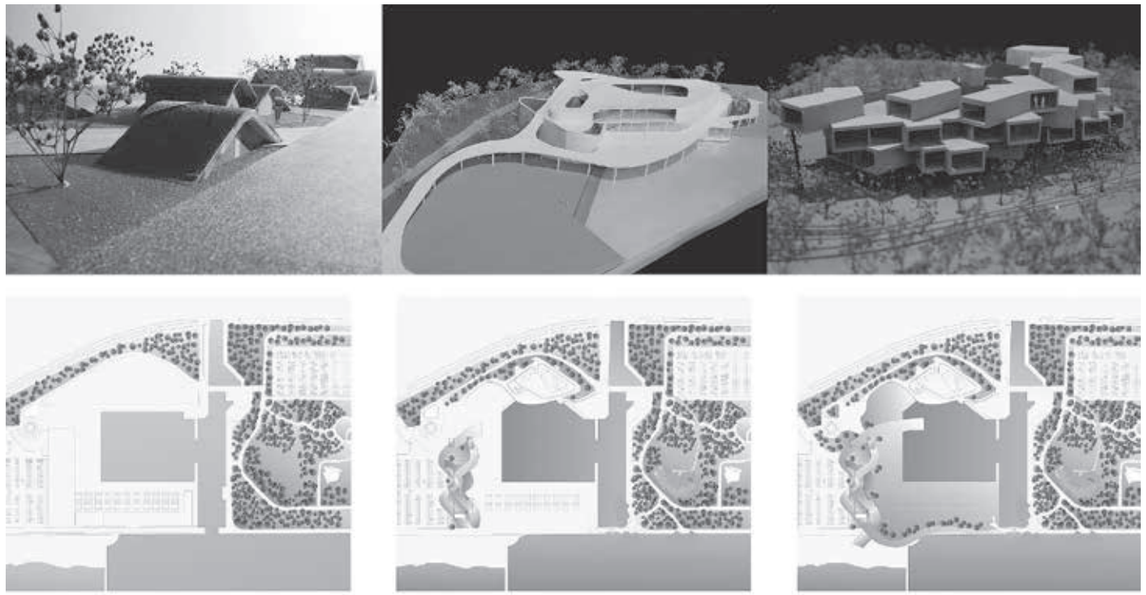
それぞれが既存の空間に合わせた設計を行っているので、そのアプローチを公園の遊歩道と結ぶと、すべての建物が自然と緩やかにつながる。

緩やかにつながったランドスケープは、今までの稲毛海浜公園の良さを残しつつ、これまでと同じように街と一体となる。

■講評

３年次の演習課題は「海の駅」「水族館」そして「ホテル」という、３つの施設を水を囲んで順次設計を行い、最後にマスタープランという視点から再度敷地を捉え直し、全体を１つの「街」として完成させるユニークな課題である。実際の設計業務では、まずマスタープランとランドスケープデザインを行い、後にその全体計画に基づいて個々のデザインを行う流れが一般的である。しかし、今回はそれを逆さまに進めることによって、個と全体との関係をより明確に理解するということが演習のゴールであった。

この作品は“路”という概念で、水域のすべての建物と外部空間を捉えようとしたものである。路にはさまざまの形がある。上る、下る、散歩をする、溜まる、集まる、佇むなど人の行動によって啓発されるさまざまな空間のあり方が、デザインの中に散りばめられている。同時に、路の持っているこれらの空間の性格は、隣接する建築の用途にも大きく関係することになる。「海の駅」では施設の屋根を道の一部として取り込んであり、家族がハイキングをしたり、散歩をしながらマリーナを眺めることのできる素敵な空間がデザインされている。「水族館」の周りでは、路を辿る人々を自然に内部に導入し、水族館を楽しめる仕掛けになっている。「ホテル」についても同様に、空間のシークエンスによって全体が構成されているが、他の２つの施設との路のつながりが今ひとつ希薄なのが惜しまれる。　（光井　純）



敷地である稲毛海浜公園は整備・管理され、既に心地良い空間が広がっている。

その心地良い空間を残すことを心がけながら海の駅・水族館・ホテル・橋を設計する。

既存の空間を利用したアプローチは緩やかに各施設・街とつながる。

４年生（総合演習Ⅰ、総合演習Ⅱ）

【担当】　畔柳　昭雄
坪井塑太郎

桜井　慎一
高島　秀訓

近藤　健雄
佐藤　信治
山本　和清
井上　武司
筧　　隆夫

総合演習Ⅰ、Ⅱ

海洋建築設計演習（総合演習Ⅰ）
ウォーターフロント計画演習（総合演習Ⅱ）

「都市防災のための水域を活用した防災支援施設の提案」

【課題主旨】

本課題は、この度の東日本大震災による被害状況や阪神淡路大震災以降、各地で発生している自然災害による大きな被害を鑑みることで、万一、今日の東京が被災した場合は、未曾有な事態の発生が予想されます。建物の倒壊、電気、ガス、水、情報などインフラやライフラインの分断、交通機能のマヒ、直接的な被災者や帰宅困難者の発生、負傷者の多発など、また、二次的被害や三次的被害の発生も予想されます。一方、東京の東部低地帯（江東区、江戸川区）では冠水の事態も想定されています。

そこで、今回想定した敷地（緑地＋水域）を活用することで、平常時は一般利用者の利用の要に機能し、災害が発生した場合、近隣住民や一般人の救援や支援に役立つともに、水域ならではの特徴を生かした防災のための各種機能・用途を備えた施設を提案してください。

また、計画の前提としては

・受入れ被災者の想定（重傷者か軽傷者か、家屋倒壊者か、近隣住民か）など
・具備する機能用途の想定
・システムの提案（機能用途）ソフト面・ハード面
・平常時の利用
・陸域・水域別の機能用途の提案
・医療機能の提案

などがあげられますが、上記を事例としてこれら以外の条件を検討し、計画の前提条件を整理してください。その前提条件に沿って、施設や各種導入機能用途を検討してください。

【提出物】

(1)図面（全体図・ゾーニング図など各種機能図）
(2)模型：縮尺１/3000）

総合演習Ⅱ

プロジェクト企画演習
「横須賀市の海を活かしたまちづくり～横須賀21世紀開国プロジェクト～」

【課題主旨】

横須賀市は、三浦半島の大部分を占め、東側は東京湾、西側は相模湾に面し、久里浜港や浦賀港など日本の近代化を担った港町を有しています。

同市は、まちづくりの基本目標である都市像を「国際海の手文化都市」とした「横須賀市基本構想」を平成９年３月にまとめ、以降、自然豊かな水辺や港など海を活かしたまちづくりの構想・計画を策定する取り組みを進めていますが、具体的なプランづくりが今後の課題となっています。

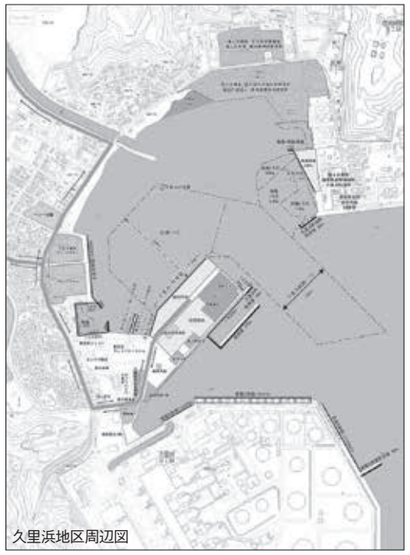
そこで、横須賀市における海を活かしたまちづくりの推進に寄与することを目的として、21世紀にふさわしい開国の都市としての横須賀市久里浜地区をデザインするものとします。

【要求図面】

①全体コンセプトおよびプロジェクト主旨説明書
②敷地全体のゾーニング計画図および水系ネットワーク図：縮尺自由
③提案施設の各階平面図、立面図（２面以上）、断面図
④①から③までの図面をまとめて A-1 ボード４枚までに整理し提出
⑤パースおよび敷地模型：縮尺自由
⑥パワーポイント資料（発表資料）

横須賀敷地鳥瞰写真

横須賀敷地遠景写真



久里浜地区周辺図

久里浜地区周辺

出典：横須賀市港湾部編
「久里浜地区航路誘致のための資料」

総合演習Ⅰ　海洋建築設計演習

都市防災のための水域を活用した防災支援施設の提案

A 班／大盛嘉一・小川雅人・絹見伸一

■背景

本計画地および周辺地域は、辰巳の森海浜公園や夢の島公園をはじめとする水と緑に恵まれた環境を有している。また、辰巳国際水泳場や夢の島総合運動場、BumB 東京スポーツ文化館など、スポーツ関連施設が集積する地域でもある。このように、本計画地は自然に恵まれたスポーツ拠点としての高いポテンシャルを有していると考えられる。

また、2011年3月11日に発生した東日本大震災を契機に、東京都でも災害に対する新たな対策が求められている。また、震災を契機に地域住民の防災意識は向上していると思われるが、今後もその意識を維持していくためには、日常の生活の中で地域住民に防災について意識してもらうことが重要であると考える。そこで、本提案では、平常ときは江東区ならではの水と緑を活かしたスポーツ拠点施設、災害時は避難者の広域避難場所・医療機能を有する、防災支援の役割を担うスポーツ防災公園を提案する。

■コンセプト

スポーツは、健康維持や自己実現を目的として、一般市民の間でも日常的に行われているのに対して、防災に関する活動は日常の生活に浸透しづらいと思われる。本提案は、“スポーツ”と“防災”の機能を結びつけることで平常時と災害時にデュアルに使える公園整備を目指す。

■提案

【スポーツ関連施設】

ウォーミングアップ・クールダウンスペースや、さまざまな講習会・イベントが開催できるスポーツ支援施設を整備する。また既存のスポーツ施設からでも手軽に立ち寄ってスポーツ用品が購入できるよう、スポーツ関連の専門店をテナントとして受入れる。さらに休憩場所としてカフェを設けることで、スポーツ中継の観戦もできるスポーツカフェ・バーとしても利用できる。

以上のように、すでに充実しているスポーツを“する”施設に加え、スポーツを“支援する”施設を整備することで、これまで以上に、誰でも気軽にスポーツを楽しめる場となり、スポーツ集積地としての魅力を高めることができる。

【防災計画】

本提案は、防災計画を予防・応急・復旧の３段階に分けて提案する。

①災害予防：本計画地は、災害時の広域避難場所としての機能を有する。日頃から防災意識や防災に関する知識を身につけてもらい、避難行動の迅速化につなげるために、防災拠点センターを利用し、スポーツ講習会の一環として防災講習会も実施する。

②応急対策：本計画地への避難は、機動力のあるヘリコプターと大量輸送可能な船舶での避難を想定した。ヘリポートは辰巳国際水泳場周辺の医療拠点近くの水上に配置し、負傷者対応の迅速化を図った。船舶の船着き場は、復旧期の仮設住居の建材搬入を考慮して広場前面に設置した。また、スポーツカフェ・バーでは、調理器具を利用した災害時の食糧支援や、スクリーン利用による情報提供を行う。さらに、水上ヘリポート内に雨水利用システムを導入することで、飲料水・生活用水を確保する。帰宅困難者対策としては、平常時から利用できるレンタサイクルポートを計画地内や周辺地域に点在させる。計画地内にはレンタサイクル拠点を設け、区内のサイクルポートの情報管理機能を付加させることで、災害時の自転車活用の迅速化にもつなげる。

③災害復旧：本計画地は、復旧期には広大な敷地を利用した仮設住宅の建設を行う。建材は水上輸送により、建設地近くの船着き場から搬入する。また、被災者の相談窓口として、平常時のスポーツショップなどの建物内を利用し、情報提供や各種手続きを行えるようにする。

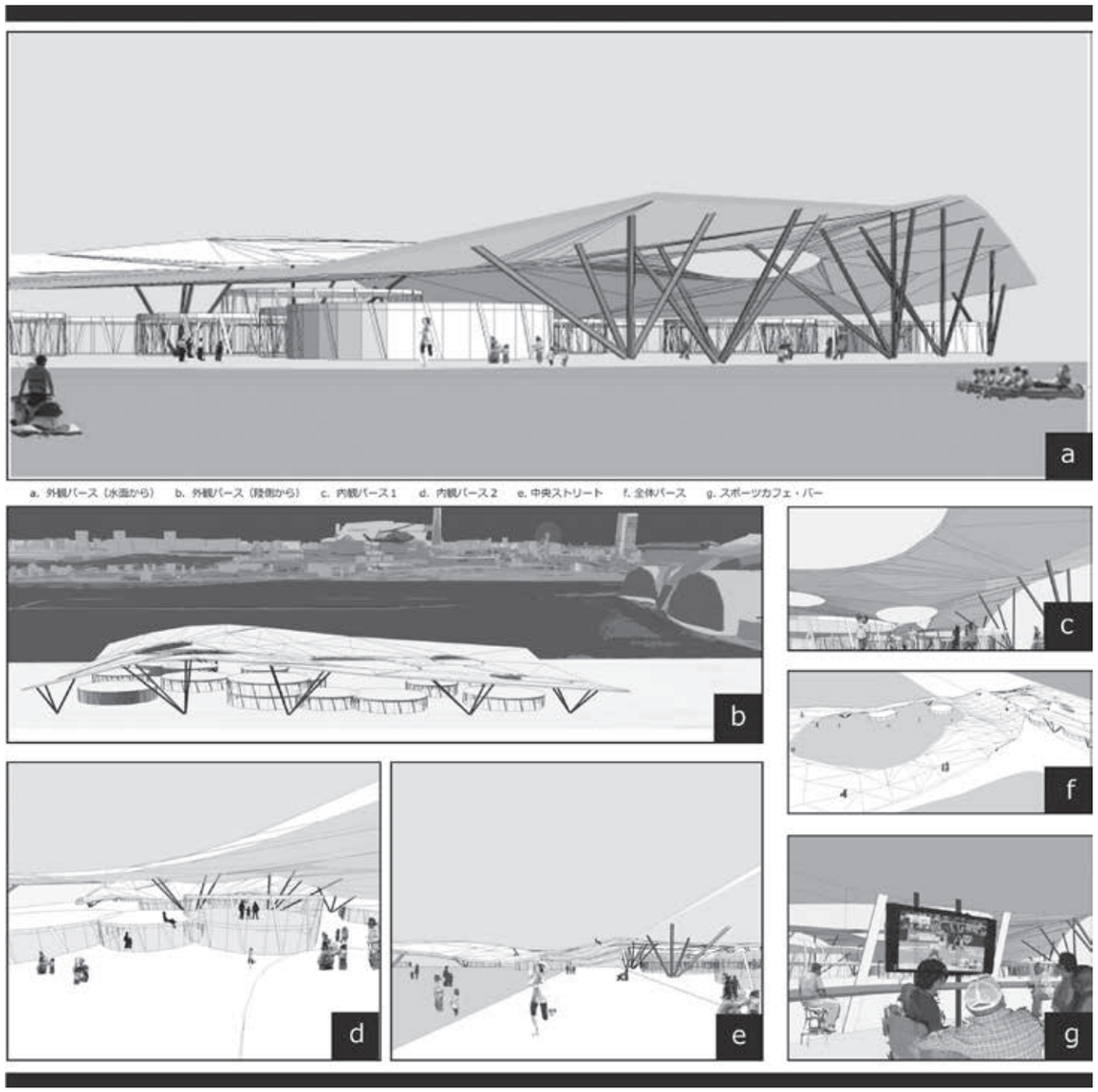
【表裏一体性】

既存の運動広場や水泳場、スポーツショップ、スポーツカフェなど日常的に利用される施設は、災害時には被災者の避難場所、負傷者対応、災害情報センター、食糧支援の場へとその機能が転換する。このように、平常時と災害時の機能が表裏一体となるような施設の整備を行うことで、発災時の機能転換が容易となる。スポーツや観戦を通じて、老若男女問わずこの公園に親しむことで、自ずと地域住民の防災力が向上してくれることを期待する。

■講評

東京都の臨海部は、臨海副都心エリアから葛西臨海公園エリアにおいてアーバンリゾートゾーンを形成しており、首都圏一帯から多くの集客がある。こうした地域の中に位置する辰巳の森海浜公園と夢の島公園は、緑のオープンスペースや各種スポーツ施設、マリーナなどが整備されている。しかし、一部水面や緑地は利用度の低位な部分もある。

課題は、こうした空間を都市防災のために水域を含めて活用することが求められた。大盛・小川・絹見の３名は、“スポーツ”をキーワードにすることで、平常時の利用を通じて利用者に場所のすり込みや認知認識を深めさせることを提案しており、人々のアクティビティとそれを補完する施設を陸域・水域に分散立地させることで賑わいの演出を意図している。こうした個々の施設機能を大屋根で覆うことで災害時にはぬくもりや一体感が感じられるように配慮している。（畔柳昭雄）



総合演習Ⅱ　プロジェクト企画演習

横須賀の海を活かしたまちづくり

横須賀21世紀開国プロジェクト

1班／榎　同子・榎本翔太・小山勇気

「花と海の劇場～育てるまち久里浜～」

■コンセプト

神奈川県に居住して東京都区部に勤務、通学するというライフスタイルは住民の町への関心を失わせてしまっている。

本提案では花を主軸とし、湾を利用した住民たちの手による見る見られるの関係を持つ劇場型の都市を計画する。

■花の道

現在展開されている花の道の計画の延長。花の国周辺から駅～湾まで延長し、湾への主要な動線を装飾する。

■フラワーバンク制度

市が各個人での花の栽培を委託、任意での栽培を行うこの制度によって住居地域全体に花を広げ、積極的な花の活用を行う。

■三浦市との都市提携

三浦市の広大な農地を一部花農園とし開拓し久里浜で購入、農作物をフェリーを用いて発信することにより、輸送手段として衰退していたフェリーでの貿易を復活。

■花の複合施設

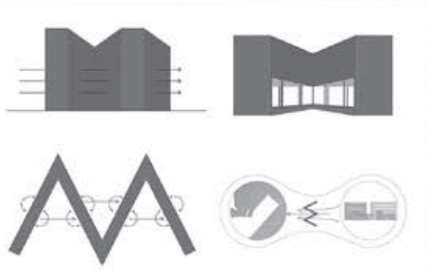
湾と久里浜地区を結びつける向かい入れの形を持つ建築の提案。前述した花の道の計画でつながれている湾岸部の景観整理を行う。

■講評

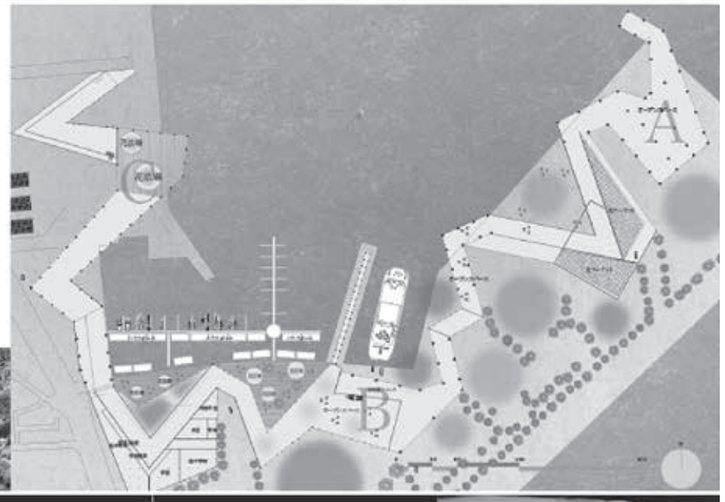
少子高齢化が急速に進行する日本であるが、バブル崩壊後の都心回帰現象に通勤圏にある周辺都市は人口減少と高齢化率の上昇という問題を共有している。横須賀市は東、南側に長い海岸線と、平地が少ないものの多様な産業、豊かな自然環境、景観を有している。

当作品は南地域、久里浜地区の京急久里浜駅から久里浜港まで約1.2kmの町に、平作川を使い港まではエレクトリックボートで、さらに港と花の国をロープウェイでつないでいる。景観を取りこむ立体的な交通ネットワークと街路に、住民が町を愛しコミュニケーションを生む仕組みとしてフラワーバンク制度を組み合わせたハード・ソフト両面のまちづくりは的を射ている。また久里浜港にジグザグに伸び、港湾および多様な文化機能を統合する複合施設は、親水性を備え変化に富む空間を創出し魅力的な計画となっている。そこに冗長なイメージはない。ただし、この長大な複合施設が端部１か所のエントランスでは機能しないであろう。個々の施設機能やアクセスする人・車に対応した固有のフロンテージが、湾とは反対側のスペースにそれぞれ計画されるべきで、その点が惜しまれる。

（井上武司）



建築として繋がりを持ちつつ、空間の仕切りを持つカタチ



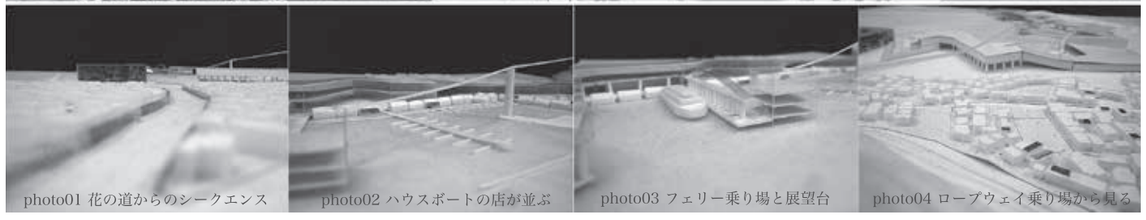


photo01 花の道からのシークエンス　photo02 ハウスボートの店が並ぶ　photo03 フェリー乗り場と展望台　photo04 ロープウェイ乗り場から見る

総合演習Ⅱ　プロジェクト企画演習

横須賀の海を活かしたまちづくり

横須賀21世紀開国プロジェクト

4班／井上彩花・増田佳菜子・大竹和也

「海の街に花が咲く」

■コンセプト

私たちの計画は、「海の街に花が咲く」というコンセプトのもと進めた。

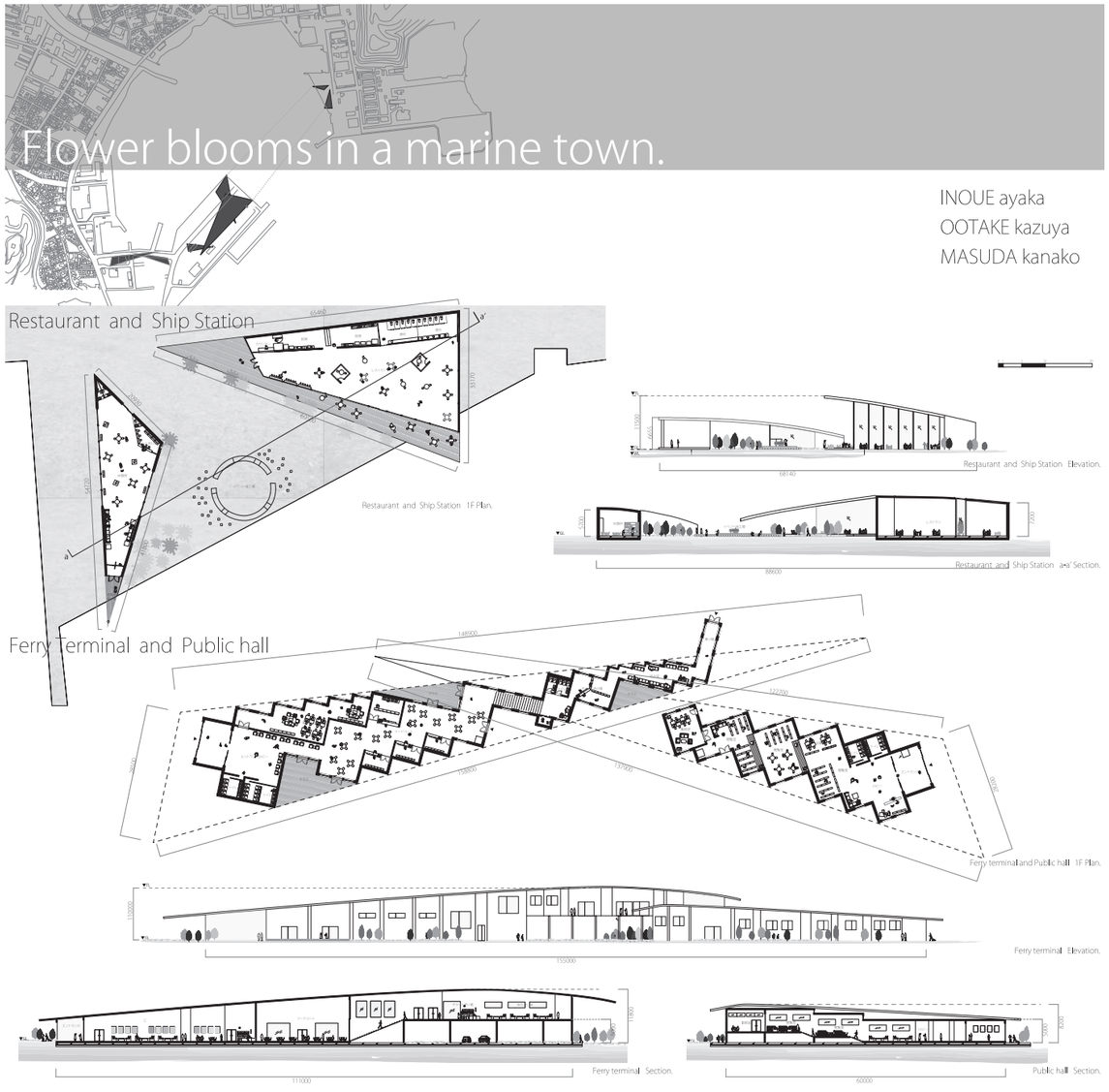
横須賀市久里浜地域には、海があり河川があり緑があり山がありと、多様な自然がある。また、電車で来る人や自動車・フェリーでも来れるという立地を活かし、花と海の両方を鑑賞することができる街づくりを行った。

私たちの計画において、久里浜地区一番の大きな機能を有する施設が港湾部にある。敷地を目一杯利用し、水族館とワークショップ・レストラン・カフェ・フェリーターミナル等の施設を含め、敷地の入り口から先端までを含めて設計した。この中核である水族館には、海の花である珊瑚・イソギンチャクの観賞をメインに持ってきて、東京外湾近郊でとれる魚や黒潮に乗ってくる魚・夏に見ることができる死滅回遊魚等を展示する。また、港湾部における計画は、周遊性を持たせた。そうすることにより、行き止まりになっていて足が運びにくい、久里浜西側地区の発展と利用しやすさの向上を図るとともに、東京湾の眺望と水族館の流れるような美しい外観をさまざまな角度から望めるようにした。

■講評

横須賀市久里浜地区は、米国艦隊を率いたペルリ提督が初めてわが国に上陸したビーチがある久里浜湾に向かって開け緑の丘陵もある環境豊かな海辺の街であるが、多くの公的施設の存在により、また、火力発電所やフェリー関連物流施設などの大規模土地利用により、恵まれた海辺環境を活かした一体感のある街にはなっていない。首都圏ベッドタウンとしての周辺宅地開発地区と久里浜湾周辺地区との一体感の無さも問題である。このチームは、交通拠点である久里浜駅と久里浜湾の間の回遊動線を、平作川を中心にした花にあふれた複合的なネットワークとして確保するとともに、フェリーターミナルに交流施設や水族館などを東京湾に開かれたゲートウェイ施設として配置。浜辺には散策空間とネットワークを、また海中部にも水中サンゴ養殖場兼展望施設などを整備することで、海辺の魅力づくりと街全体の回遊性向上により問題解決の糸口を見いだした。この簡明でわかりやすいアプローチが市民には好評価を得た。全体計画や個別建築計画・空間処理のディテール掘り下げによってより魅力的なものとなりそうな期待感がこの提案の一番の売りだろう。

（筧　隆夫）



総合演習Ⅱ　プロジェクト企画演習

横須賀の海を活かしたまちづくり

横須賀21世紀開国プロジェクト

5班／ 伊藤綾香・菅原雅之・寺崎康雄

「うみの芸術祭～変わりゆく町　くりはま～」

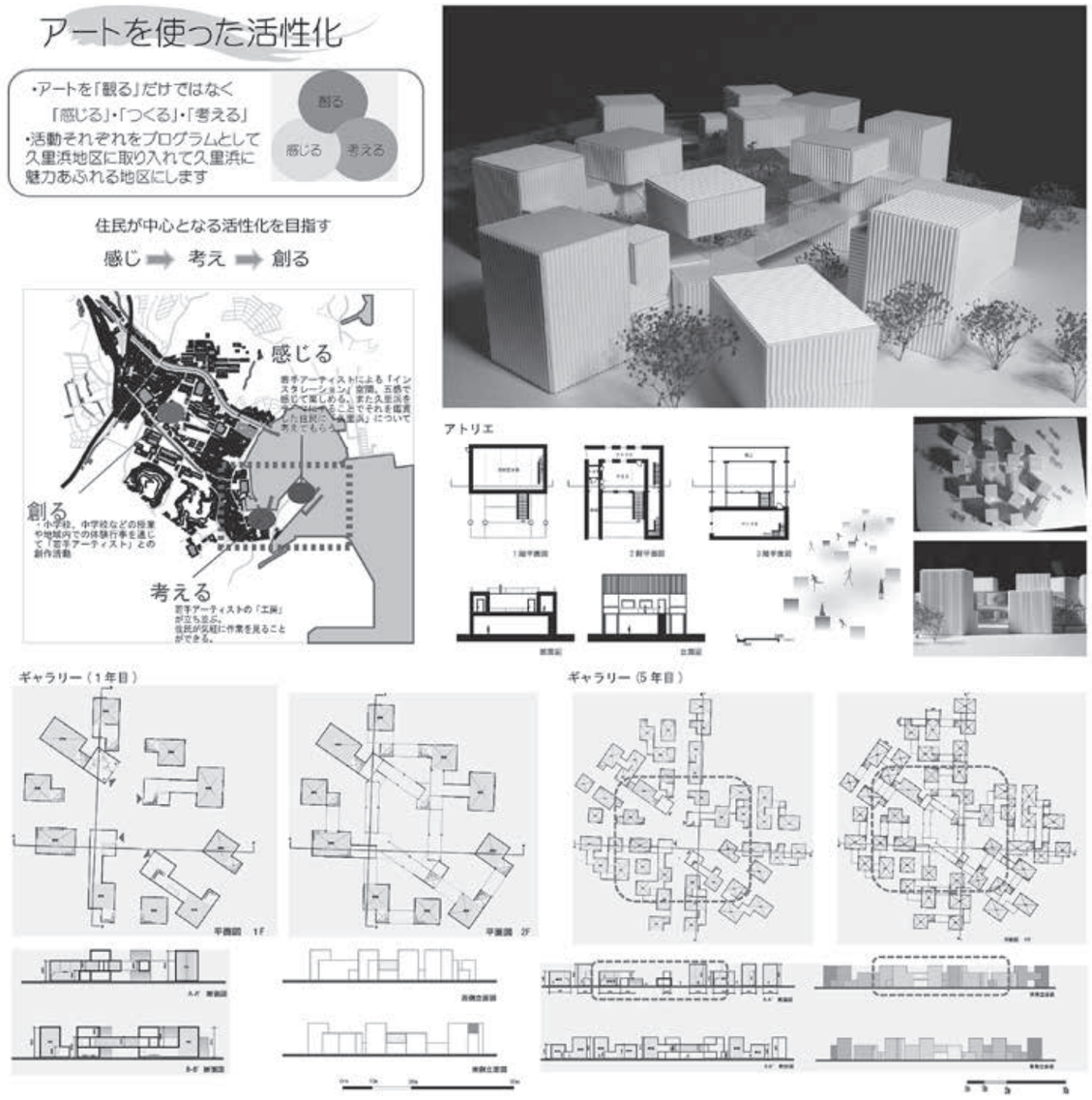
■コンセプト

計画地は社会的人口流出量が微増傾向にあり、商店街にシャッターが増え、生産年齢人口の減少が地域力の衰えを招きつつある。そこで若手芸術家を地区に招き、「久里浜の魅力」をテーマとしてアート創作してもらい、住民の自発的な活性化活動を誘発するような住民・芸術家一体となった提案をする。

若手芸術家の活動拠点となるアトリエは臨海部の日常動線に沿って配置することで住民が気軽に見学可能であり、逐日変化する作品は住民・地区に新鮮な刺激をもたらす。久里浜の特徴ある風景が集中している港湾部には、アートを集約し拡大していく「成長するギャラリー」を配置する。ここではアート作品が「レンズ」の役割を担い、鑑賞する住民に感動とともに久里浜地区を再考する契機をもたらす場となる。アートを通じて感じたことを住民も芸術家と一緒に表現し、発信できるようなアート活動を小学校、公民館等で取り入れていき、ギャラリーがいっぱいになるころには、「久里浜の魅力」が住民一人一人にまで浸透し、次世代まで残り続ける、魅力あふれるまちを目指す。

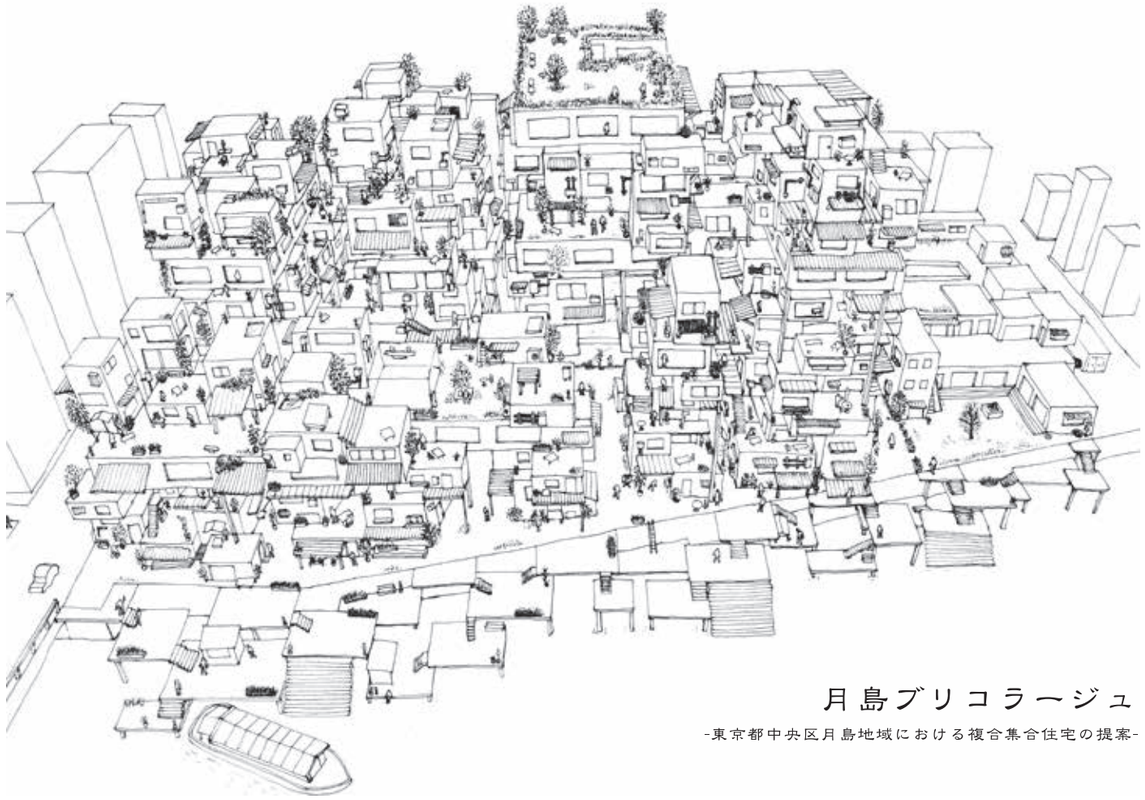
■講評

この作品のテーマは「海と芸術とくりはま」と題する作品で、横須賀市内においても地域活動の衰えが顕在する地域と位置付け、その活性化が必要であり、これまでとは異なる手法でその活性化を図るものとしている。その主要コンセプトが「アーティスト・イン・レジデンス・プログラム」というもので、各種芸術製作を行う人物を一定期間ある土地（この場合は横須賀市久里浜地区）に招聘し、その土地に滞在しながら芸術作品を制作させる事業のことであると位置づけている。建築計画としては、ある大きさのユニット建築を提案しつつ、それらが芸術家と住民とのコラボレーションにより変形し、都市空間に在って拡大したり縮小したり、時には積層したり分散する合目的的な空間装置と位置付けている。建築的な完成度はプリミティブなものであるが、都市機能としては必然性が認められないが、増殖したり拡大するような施設を展開することにより、都市に新たな機能をインスタレーションするという、新たな提案が興味深く優れた作品と認められる。　（近藤建雄）



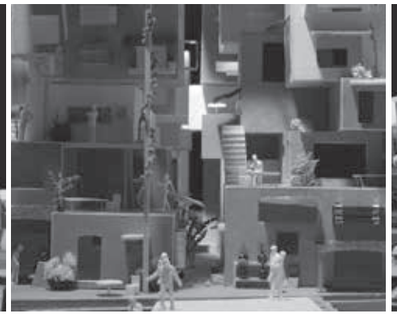
卒業設計

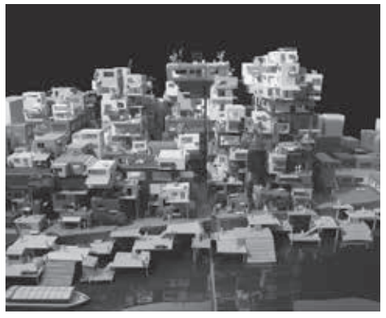
【担当】 佐藤　信治
坪山　幸王
井上　武司
藤岡　　尋
長井　義紀
矢野　一志
水本　　光
高島　秀訓
鶴田　伸介
廣部　剛司
永曽　琢夫



月島ブリコラージュ

-東京都中央区月島地域における複合集合住宅の提案-





卒業設計

月島ブリコラージュ
―東京都中央区月島地域における複合集合住宅の提案―

石原幹太

1．はじめに

今、月島の街は大きな変革の時を迎えている。

古びた木造の長屋や、それに付随する植栽・日用品など、住民の生活が滲みだす路地空間は月島の顔であった。しかし近年月島で進む再開発が、それらの魅力を根こそぎ奪おうとしている。本計画では住宅需要に応えるためだけの高層マンション群に警鐘を鳴らし、下町が下町らしさを失わないような住まい方を提案する。

2．計画背景

2.1 月島

「過去と未来が共存する」と唱われる街、月島。

関東大震災以降、街に大量に供給された家屋は今なお現存し「下町」としての風情を醸し出している。また佃の大川端リバーシティー21地区を代表とした、再開発による超高層マンション群が古い家屋の背後に建ち並ぶ様相は月島独特の景観といえる。都心というロケーションからも月島の住宅需要は非常に高い現状である。しかしその一方で「下町」の家屋は耐用年数を超過し、震災などによる倒壊や火災の延焼が懸念されている。3.11を経て、木造家屋密集地域はよりいっそうの早急な建て替えが求められている。そのような背景から、木密地域の再開発事業も多く進められている。

「過去と未来」が魅力のまち月島の、「過去」がいま失われようとしている。

2.2 再開発事業と超高層マンション

1985年に大川端開発会議が発足したことを皮切りに、月島周縁部の工場群は瞬く間に大型マンションに建替わっていった。高さ100m を超える超高層マンションが相次いで建設され、また地下鉄有楽町線、都営大江戸線とインフラの整備がそれに続いたこともあり、月島地域は今なお毎年2000人弱程の人口増が続いている。

2.3 木造密集家屋と路地

月島は労働者のための密集した長屋の名残から現在のように狭小な路地空間が形成されている。路地には出窓やベランダ・階段が飛び出し、自転車やバイク・傘などが溢れ、塀の代わりである植栽によって緑に包まれている。路地が失われるということは下町というアイデンティティーを失うとともに、地域コミュニティーや愛着の喪失、それに伴う防犯・防災意識の低下につながる。再開発によって月島の路地が失われようとしている。

2.4 朝潮運河

月島は運河に囲まれた土地であるため、水運・漁業・貯木・船溜まり・水路・仕事場など河川の利用は多岐にわたって盛んであった。しかし現在は防災と景観の観点から朝潮運河の桟橋や船溜まり、貯木場としての利用は禁止され、それらのものはすべて撤廃されてしまった。月島ではかつて魚河岸や船渡御など、船が往来する風景がよく見られたが、現状河川はただそこにあるだけの存在になってしまっている。朝潮運河を含んだ地域全体を計画することで水辺の風景を月島に取り戻す。

3．基本計画

施設は複合集合住宅とする。住居を中心に、かつての再開発によって立ち退きを余儀なくされた商業の機能、また居住人口の増加に伴って需要が伸び続けている児童施設、その他にオフィス、船着き場を付加した複合建築を計画する。

4．建築計画

下町の風情を創出している木造家屋密集地域は、住宅需要の波に飲まれようとしている。月島の路地のような「豊かさ」を持った集合住宅を計画することで、いずれ木密が消えたとしても下町の風情を残す月島の姿を提案する。

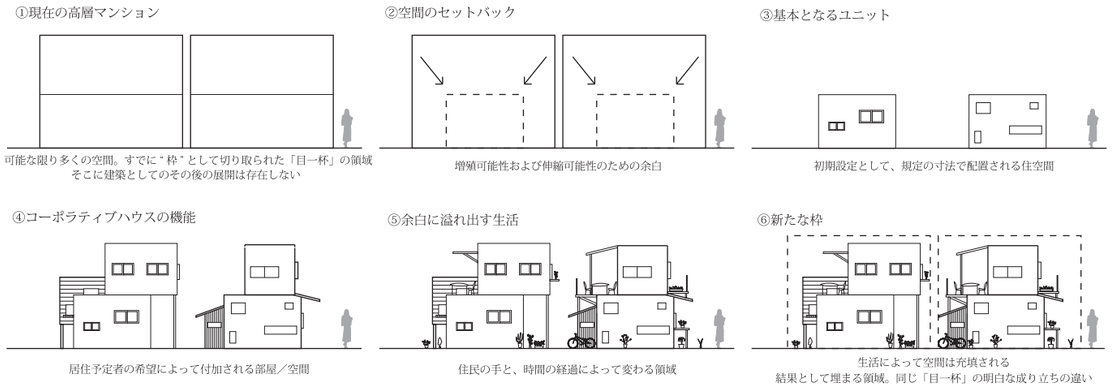
5．設計手法

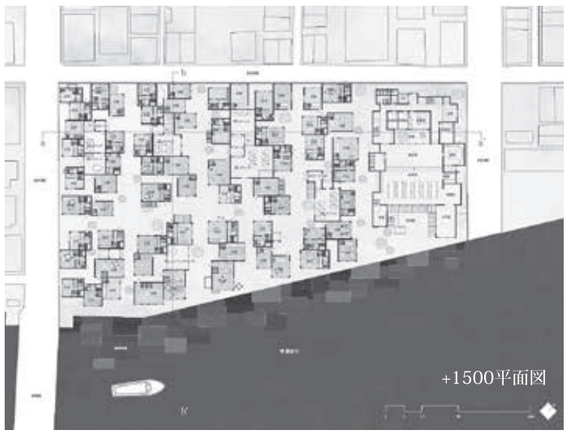
ブリコラージュとはそのひとつの断片が持つ機能を再解釈し再構成することである。例えば木密に付随する庇は本来雨を流す機能を持つが、それが密集することによりそれぞれの住戸の領域を示す機能に再解釈される。高層マンションという広い平面が、住戸の群に貫入することにより、それは公共の広場に再解釈される。木密の路地は集合住宅においては豊かな廊下に再解釈される。

そういった月島が持つ機能的断片を集め、ひとつひとつを再解釈し、総体として再構成することで、月島らしさを残した新たな集合住宅が生まれる。

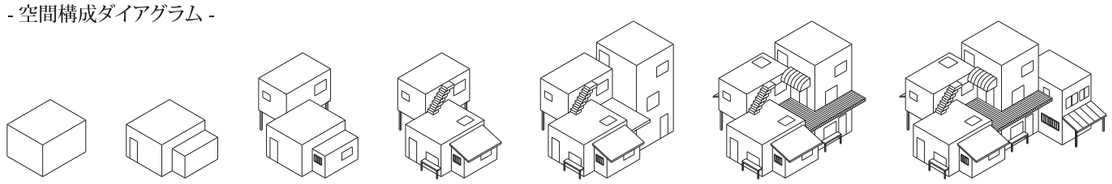
この建築は、今後も増え続けると予想される住宅需要に応えつつも月島らしさを失わない、これからの月島のあり方である。

- コンセプトダイアグラム -





- 空間構成ダイアグラム -



第44回毎日・DAS 学生デザイン賞 建築部門賞 日本一 / 第24回千葉県建築学生賞 優秀賞 地域二、市民賞 地域二 /
赤レンガ卒業設計展2012 特別賞 / 日本建築学会建築デザイン発表会 部門優秀賞

卒業設計

結ぶ言葉
―高レベル放射性廃棄物最終処分場と保存の提案―

渡部　亘

1．はじめに

東日本大震災による地震と津波の被害を受けた東京電力福島原発では、重大な原子力事故が起こった。この事故によって、原発に対する国民の関心が急激に高まってきている。原発の今後の大きな問題点として核廃棄物の処分が上げられる。この処分施設である高レベル放射性廃棄物最終処分場（以下「最終処分場」という）は未だに敷地すら決まっていない。核廃棄物は原子力発電を使用しているわれわれの世代で解決しなければならない問題である。そこで、本計画ではこの最終処分場とその後10万年残る地下施設の保存方法の提案を行う。

2．高レベル放射性廃棄物最終処分場

高レベル放射性廃棄物最終処分場とは、高レベル核廃棄物を地下300m 以深に地層処分し、人体に影響を及ぼさないレベルに下がるまでの10万年以上もの間生命から隔離するための施設である。

3．計画背景

3.1 現状

日本では、最終処分事業を原子力発電環境整備機構が担っている。放射性廃棄物の貯蔵施設が飽和状態になりつつある今、最終処分場の建設が急がれている。

3.2 候補地

現段階で候補地は決まっていない。現在の候補地選びは多額の交付金と引き換えに行われている。財政の厳しい地方に押し付けているようにしか見えず疑問を感じる。

3.3 長期的視点

地層処分後10万年の間に放射性物質が漏れ出す可能性がある以上、後世の人々にこの危険性を伝えていく必要がある。そのためにも、この建築は地方ではなく日本の首都である東京に計画し、われわれ国民全体で見守り、後世に伝え残していくべきである。

4．保存方法

10万年後の後世への正確な伝達方法として言語を選択する。現在、世界で言語はおよそ7000語存在する。しかし、今後 1 世紀の間に半数以上が消滅すると予想されている。消滅し、変わりゆく言語を保存し言語の多様性を残すことで放射性物質の危険性を10万年後の後世に伝える。

5．敷地

高レベル放射性廃棄物最終処分場を東京に計画する。敷地を中央防波堤内側とする。この土地は現在境界未定地域であり、どこにも属していない。また、後世の為の「海の森計画」が行われている。そして最終処分場が置ける広大な敷地と廃棄物の海上運搬が可能である海沿いとする。

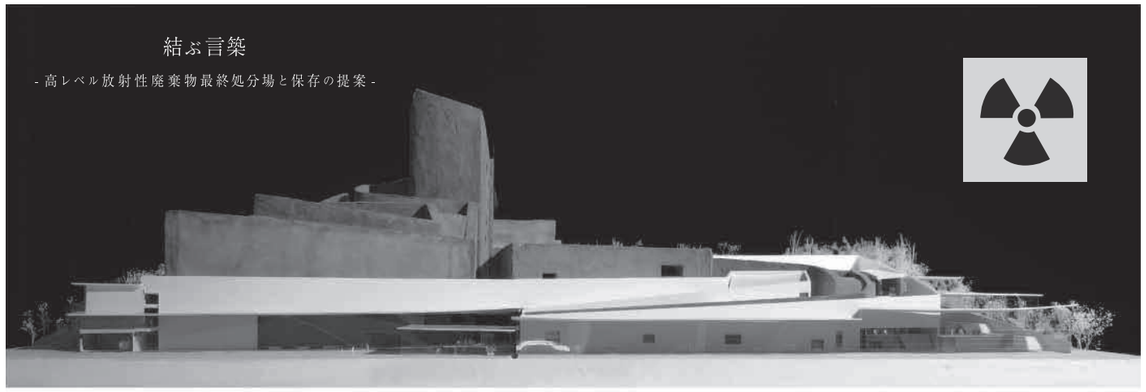
6．基本計画

6.1 高レベル放射性廃棄物最終処分場

最終処分場を原子力発電環境整備機構の計画に従い建設する。10年をかけて建設し、2020年までに出る4万本のガラス固化体を50年の間に埋蔵する。その後10年をかけて施設を埋め戻す。完全自己完結型の処分場とし、その後埋め立てられたこの敷地は完全に安全となるといわれている。

6.2 言語保存センター

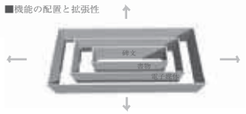
処分場後の工場の跡地に言語保存センターを計画する。このセンターでは世界中のおよそ7000語ある言語を保存する。あらゆる言語を使って地下に埋まっている放射性廃棄物の危険性を10万年間伝えることを目的とする。



■工場スケールと存在の保存

既存の工場群。　壁で内包する。　工場のスケールを残す。v

■機能の配置と拡張性



入れ子状の配置は外側への拡張が可能。

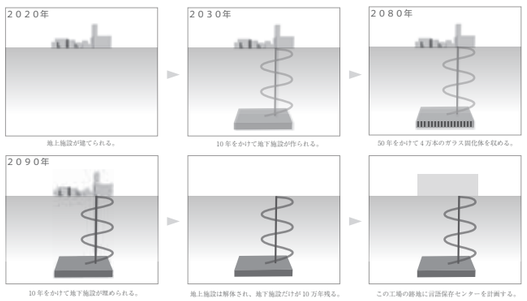
■壁高と壁厚

人から工場のスケールへとシームレスに続く構成とする。

■言語保存方法

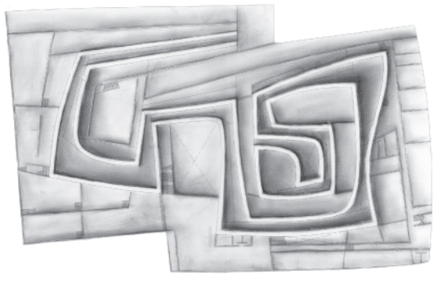
碑文　書物　電子媒体

■保存のプロセス

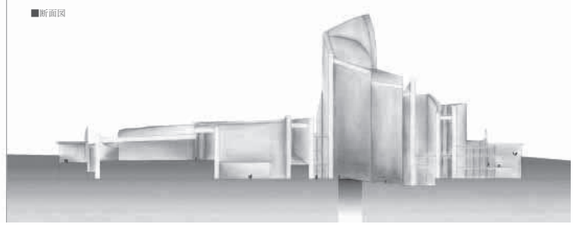


地上施設が建てられる。
10年をかけて地下施設が作られる。
50年をかけて４万本のガラス固化体を収める。
10年をかけて地下施設が埋められる。
地上施設は解体され、地下施設だけが 10 万年残る。
この工場の跡地に言語保存センターを計画する。

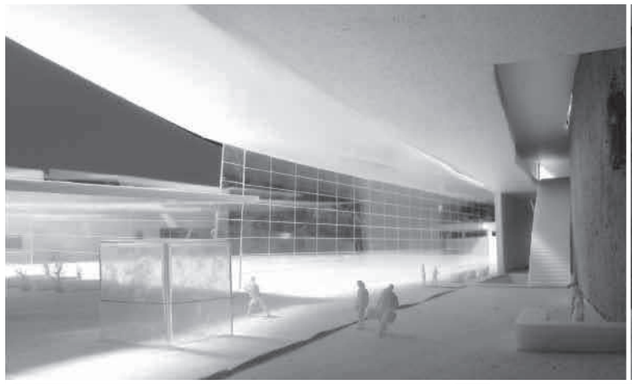
■平面図

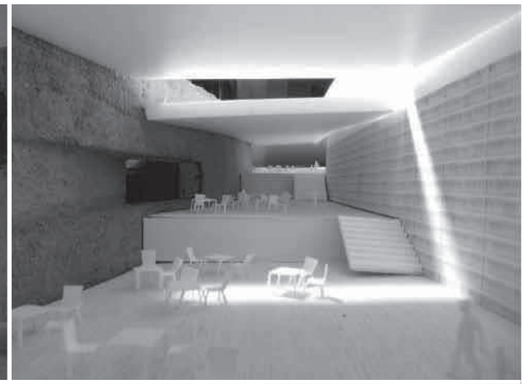


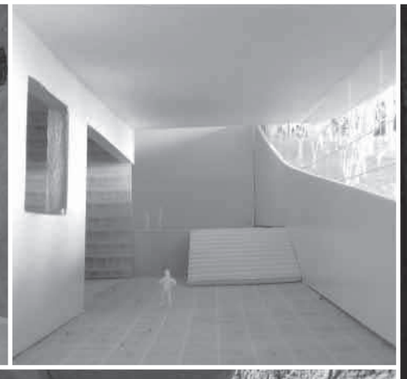
■断面図

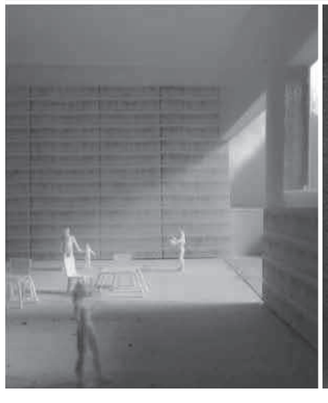


第44回毎日・DAS 学生デザイン賞 入賞 / 第24回千葉県建築学生賞 奨励賞 /JIA 全国卒業設計コンクール2012 出展 / 卒業設計日本一決定戦2012 100選 / 全国大学・高専卒業設計展示会 出典









卒業設計

愁いの果てに
空疎化した都市に心のアジールを

井上彩花

1．はじめに

環状第２号線は都市計画決定したが、実現を見ないまま長期間が経過した。立体道路制度創設を契機とし、新橋・虎ノ門地区が都市計画決定され、道路上のビルを一部廃止し沿道に再開発ビルを建てる計画が動き始めた。

このように建築は日々巨大化し、外形を失った都市「インテリア都市」となっていく。見た目ばかり豊かになっていく一方、どこか空疎化してしまった都市。ここ新橋に、愁いの果てに辿り着く“心のアジール”を創出する。

2．計画背景

2.1 現代人の心

平成10年を境に、都内の自殺死亡者数は2800人余りに急増し、交通事故死亡者の10倍以上に上った。

2.2 外形のなさ

日本人は自らを無宗教だと主張する者が多く、それは紛れもなくこの国が豊かで、ある程度の自由であることを示している。しかし、現代日本人は無宗教であるが故に、来世を見いだせず、世界で最も「“死”を恐れている」と宗教学者のカール・ベッカー氏は語る。内部の空間と建物の外形は関係がある。一方、地下構築物の形を想像することはない。しかし、建築が巨大化し、地上の空間が地下空間の特徴を持ち始めている。地下は、光がなければまったくの闇である空間、非人間的なスケールの空間、そこには風景と呼べるものはない。外形を失った都市のように、人の心にも外形はなく決して外から見えない。この外形を失った都市に心が休まるポケットパーク的な場が必要なのではないだろうか。

3．立体道路制度の創設

立体道路制度の採用により、道路整備とビル建設とを併せて行う提案が環状２号線で浮上した。既に神田佐久間町～虎ノ門までの区間で供用されており、両区間をつなげる新橋～虎ノ門間の整備が緊急課題となった。

4．敷地選定

都心の中心部、環状２号線再開発が行われている全長1,353m、幅員40m、面積49,305㎡を敷地とする。

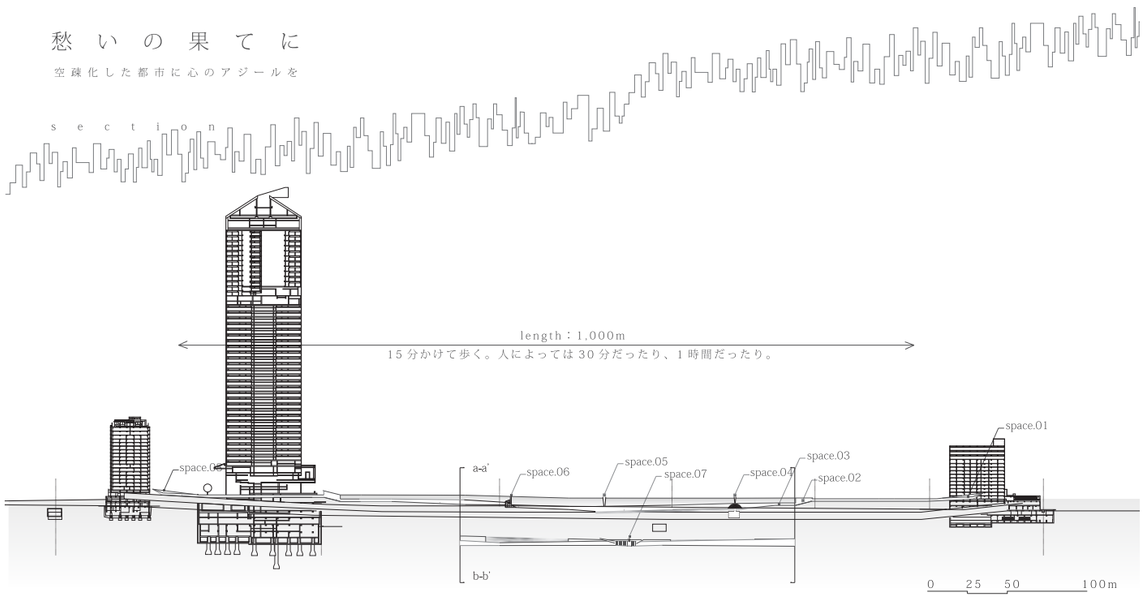
5．全体計画

歩くことを誘発させる道を創出し、約4.0km/h で歩くと片道15分、往復30分の道のりとなる。1人が通れる程の細く暗い通路から、突如なにもない空間が現れたりと、地上とかけ離れた空間を体験する。日常のスケールからいつの間にか非日常のスケールになり、日々を忘れたった１人の空間へと導かれる。無宗教の人々は神でもキリストでもなく紛れもなく、何気ない日々に支えられている。ここは私たちの心のアジールとなる。

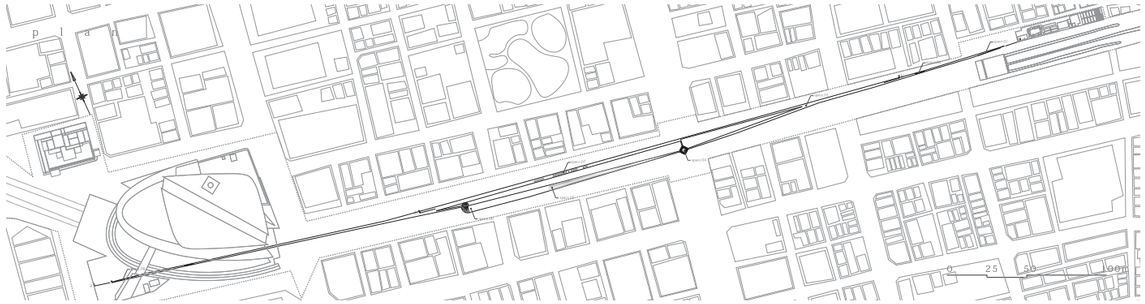
6．詳細計画

かつて新橋周辺は日比谷入江があり、運河とともに生きてきた江戸庶民にとって、季節の移ろいを映し出す身近な行楽場所であった。しかし、現在では地下水脈さえもほとんど残っていない。かつての憩いの場であった水辺を都市に甦らせるとともに、雨水を地下空間に流し込み、人工的に地下水脈を作り出す。それは計画地と地下鉄の空気を冷やし、地上とつながり、循環させる。

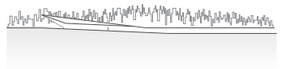
そこから意識のアンダーグラウンド、内面の無意識の世界へと導いてゆく。



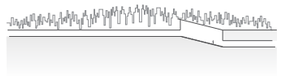
The proposal of the underground space accompanying an annular No. 2 line redevelopment project



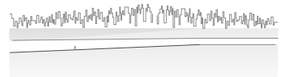
□ space.01
機能で埋め尽くされた所から、
無為な所へと逃げ込む。



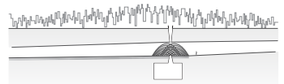
□ space.02
地上からの光は、そこで途切れていた。



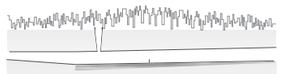
□ space.03
道が枝分かれしている。
頼れるのは、たった１人 “自分” だけ。



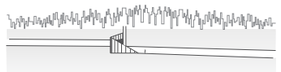
□ space.04
細い道を通り抜けると、
地上とかすかに繋がる空間が広がっていた。



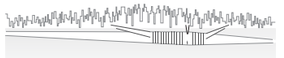
□ space.05
行き交う人々や車、電車の流れが
温まりすぎた都市を冷やしていく。



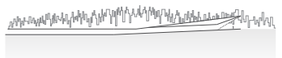
□ space.06
インボリュートの階段を上ると、
張りつめていた糸が緩んだ気がした。

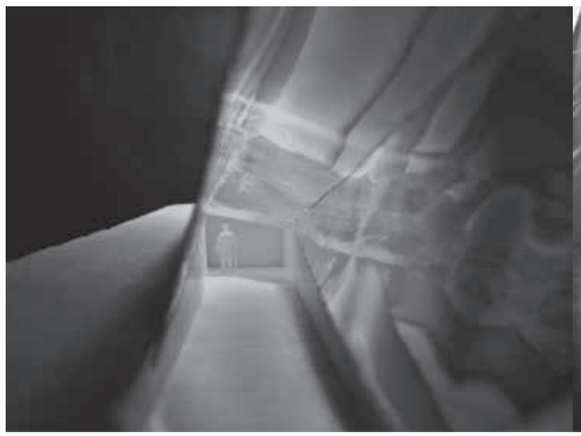


□ space.07
折り返し進んで行くと整然と柱が並んでいた。
光が差し込んでくる。

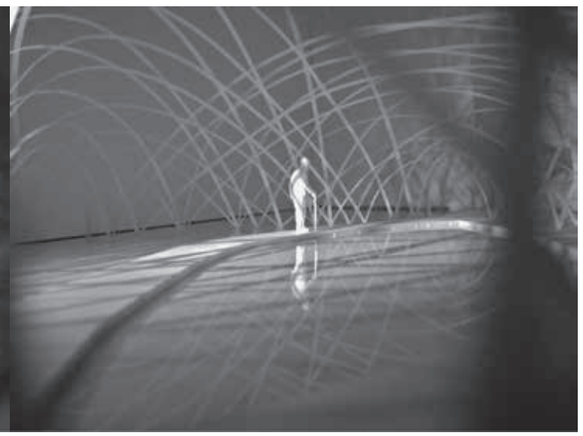


□ space.08
心地よく疲れた足に寄り添うように、
帰路につく。





space.01



space.04

space.06

space.07

卒業設計

未来に生きる誰かのために
―福嶋第一原発における封印機能をもった博物館の提案―

菅原雅之

1．はじめに

2011年10月28日、福島第一原発の廃炉計画が発表された。「廃炉」とは除染と解体を行い、最終的には土地を更地に戻すことを指す。利権とお金と一時の利便性のために、生物の生きる土地を不当に奪い、放射性物質という以後何万年も残るかもしれない解決不能の問題を未来に残してしまった「罪の証」ともいえるあの場所を、まるで何もなかったように戻してはいけないと思う。人の起こしてしまった罪を後世まで忘れぬよう福島第一原発に残る物語を遺し、今を生きる人々に語りかけるような建築を提案する。

2．原子力が抱える問題

数多くある原発事故の原因は「安全性とリスク」に対する倫理と責任感の欠如だろう。廃炉について確立されてきた技術は通常の使用を終えた原発に対する技術のみであり、事故が起きた場合の技術は未だ研究されていないことからも事故が起きる可能性を考えていないことが明らかである。現在、日本では原発推進のため研究施設・機関は数多く存在するが、反原発のための研究施設・機関は存在しない。福島第一原発事故が起き、改めて原発の危険性が根本から問われるようになった今後は、反原発派のための機関の存在も必要だろう。

3．原子力の不透明性

福島第一原発は放射性物質が漏れ出ぬよう封印する必要がある。しかし従来の「石棺」方式で覆ってしまえば、原発は「ブラックボックス」となり、外部からは見ることのできない人々から遠い存在となってしまう。新しく封印する方法として、人々が皆で監視するように封印することが大切だろう。そこで事故を起こした福島第一原発を展示として扱う博物館とし原子力の負の一面も知ることができる施設とする。

4．廃炉方式の提案

人が来られるようにするには、放射性物質の隔離と放射線を遮蔽することが最低限必要である。さらにその上で見えるようにするためには透明性のある材料が必要となる。そこで本計画では封印のために上記の性質を併せ持つ「水」を用いて建築を構成する。また、現在の廃炉作業のために「洗浄・拡散防止・非常用水」で大量の真水が必要となるため、建築により真水を貯蔵可能な計画とする。

卒業設計

対話の建築
―日韓関係に呼応する多重メソッドによる変位空間―

榎本翔太

1．はじめに

日韓の関係は、両国の歴史観と現在の文化交流の形によって極めて複雑なものとなっている。マスメディアはK-POP、韓国ドラマを報道、現在の盛んな日韓文化交流を形作った。しかし、ネット上での両国の関係は深刻である。両国とも相手を罵るネットスラングで埋め尽くされ、感情が先行し事実を置き去りにしたレッテル張りが行われている。その真因は両国間の対話が行われてこなかったことにある。本計画では日韓の歴史観および文化の展示の機能を持つ複合施設を提案することにより、両国間の新しい国際意識の在り方の開拓を目的とする。

2．計画区域

計画区域を日韓暫定水域内とする。この暫定的な水域は竹島（独島）の日韓双方の領有権の主張により生まれ、両国の歴史観の要であるとともに両国が利用可能な水域である。本水域内で両国の主要都市であるソウルと東京、そして両国の竹島（独島）領有を主張している島である隠岐の島町、鬱陵島の２つの島を繋いだ線が交差するポイントを計画域とする。

3．計画背景

3-1 日本人の世代による韓国への意識

マスメディアネイティブは教育的な自虐史観を持ち、情報源がテレビ主体、親韓である傾向を持つ。

それに対し、デジタルネイティブは、戦後の言語空間に埋め込まれたものの見方や考え方を相対化してゆくあまり、今度は韓国、朝鮮を反射的に嫌い、韓国を正当な議論に基づいて批判するのではなく、韓国を差別することで優越感を得る人が目を引く。

3-2 韓国人の日本への意識

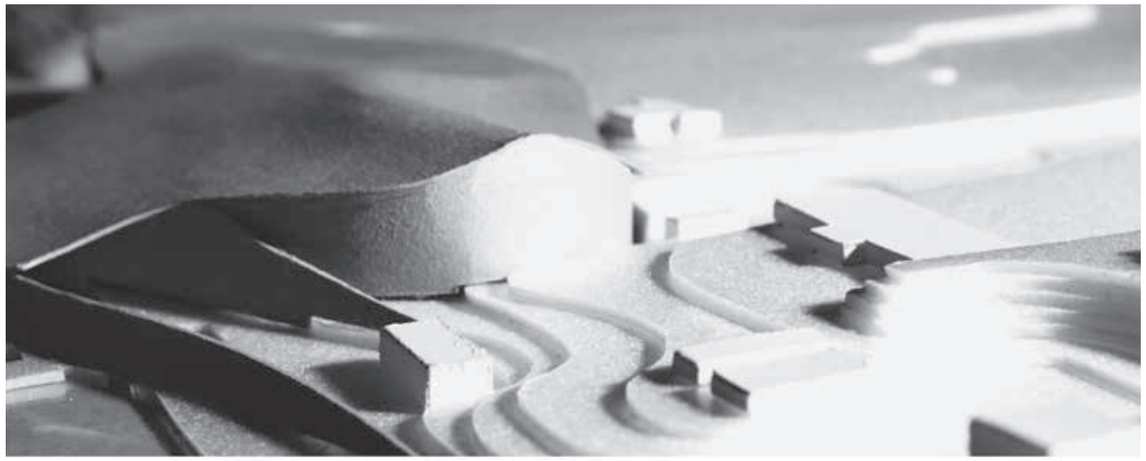
かつて韓国は日清戦争の後、韓国併合により日本の植民地（保護国）とされていた。その当時の日本による支配、それに伴う非人道的な扱いを受けていたことが直接的な原因となり、反日の気分の高まりを見せた。

その歴史観が教育の骨子に取り入れられ、現在の世代を超えた反日感情を生み出している。

4．基本計画

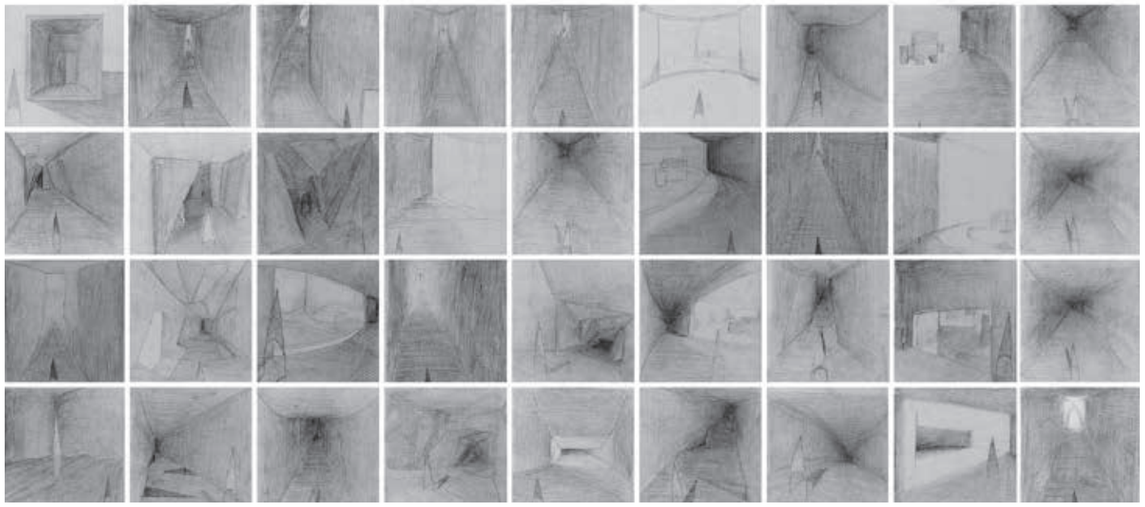
自国内で完結した思想が両国間の対話や理解を阻んでいる。日韓の文化と歴史を、インタラクティブに展示することにより、互いの国の成り立ちや文化、そして本来触れる機会のない歴史観に触れ、対等な対話が行われる。日韓の交流の形を示すランドマーク的な要素をもつ複合施設の計画。

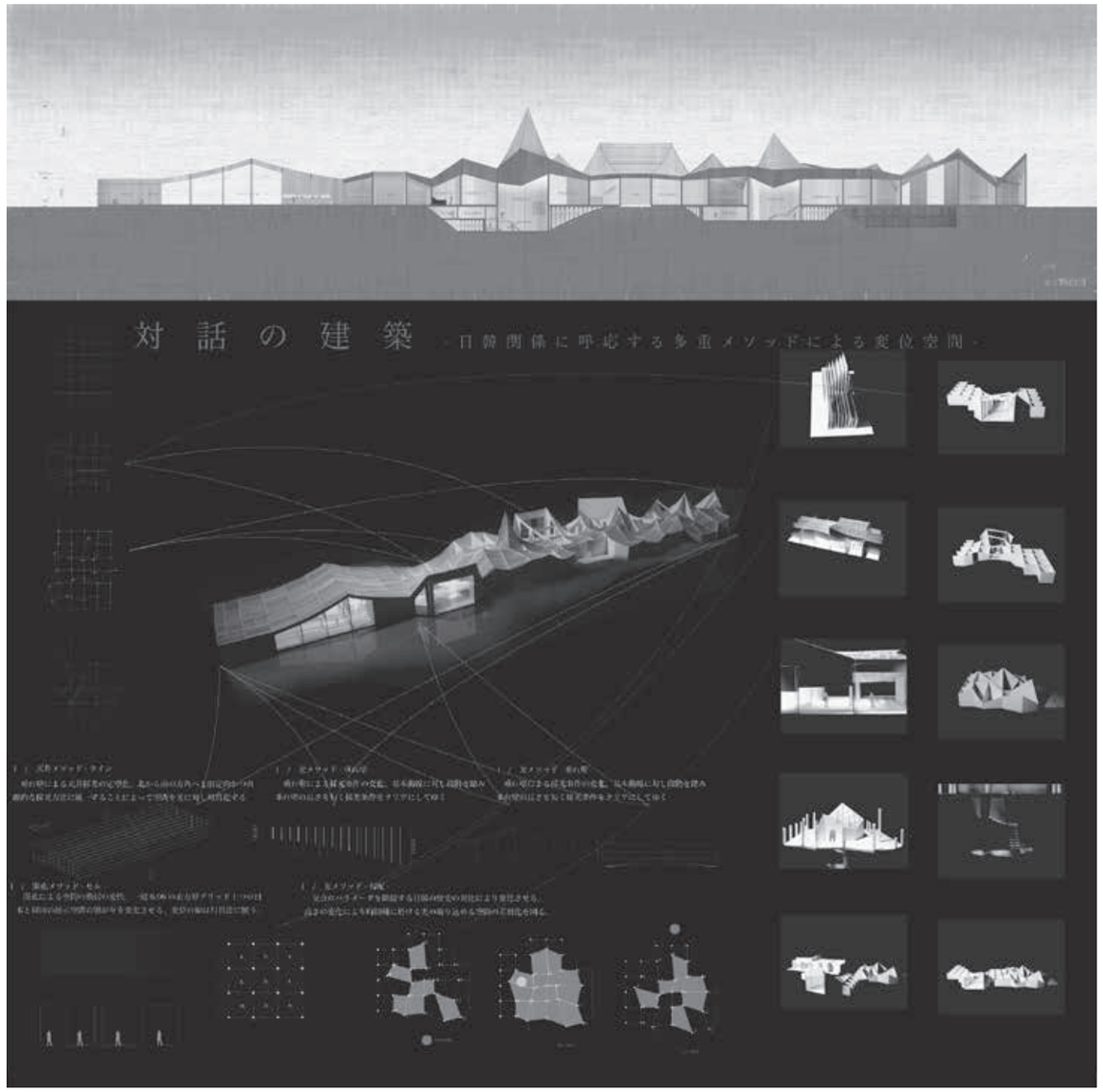
MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2012 都築響一賞 日本一 / 卒業設計日本一決定戦2012 20選 / 全国合同卒業設計展「卒、12」7 選 / DIPLOMA 2012 学科代表掲載作品 / 日本建築学会 建築デザイン発表会 部門優秀賞 /Vectorworks 教育支援プログラム OASIS 優秀研究賞



「未来に生きる誰かのために」

- 福島第一原発における封印機能をもった博物館の提案 -





修士設計

広島県大竹市小方地区における小中一貫校の提案
―地域交流と体験活動を取り入れた新たな学校施設の設計―

永田陽子

1．はじめに

近年、少子高齢化、核家族化、情報化、都市化の急変等の問題は、子どもの生活に大きな影響を与えており、教育を取り巻く環境が大きく変化している。とくに、間接体験や疑似体験の機会が圧倒的に多くなった今、子どもの成長にとって負の影響を及ぼしていることが懸念されている。これを受け、2008年に学習指導要領が改訂され、各教科の改善と総合的な学習の関係を見直し、言語活動、体験活動の重視、道徳教育の充実などが推進された。さらに、現在の社会情勢にふさわしい教育のあり方が求められており、小学校・中学校の義務教育を９年間という大きな枠組みの中で教育方法を見直す小中一貫教育や保護者や地域の声を学校運営に参画するコミュニティ・スクールが注目されている。今後、学校教育に寄せられる期待は一層高まり、学校施設そのもののあり方を考え直す節目に来ていると考えられる。

本計画は、小中学校の移転が実際に計画されている存在する広島県大竹市小方小中学校をケーススタディとするものである。新しい体験教育・地域の交流拠点となる小中一貫校を計画・設計する。

2．社会背景

2.1 子どもの現状

少子化・核家族化が進行し、子どもたちがお互いに影響し合って活動する機会が減少するなど、さまざまな体験の機会が失われている。また、都市化に伴い、子どもの生活空間の中に身近な自然が失われ、自然に触れながら遊ぶ場所が極めて少なくなっている。さらに情報化が進み、インターネット等の情報機器が普及し、直接的に関わることなく仲間と交流し、新たな情報に接することが可能なった。このように、間接体験や擬似体験が増大したことにより直接体験が不足し、社会性や生活能力、体力・運動能力の低下等、子どもを取り巻く環境が変化し、生活に大きな影響を与えている。これを受け、文部科学省は豊かな体験活動推進事業の中で、体験活動は、「感覚（体験）→思考（ふりかえり）→実践（活用）」という「学び」の過程をたどり、具体的な体験や物事との関わりを通して、感動したり、驚いたりしながら実際の生活や社会、自然の在り方を学ぶことが重要であると提唱している。自然や社会、人と関わることで五感を活性化させ、自ら学び、自ら考える力などの生きる力の基盤、子どもの成長の糧としての向上が期待されている。

2.2 教育の現状

2006年に60年ぶりに「教育基本法」が改正され、新しい教育の基本理念が示された。これを受けて、2008年に「小学校・中学校学習指導要領」が改訂され、子どもの確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育む学校教育が推進された。さらに、2010年に入り、学校施設整備についての目標（「新たな学校施設づくりのアイディア集」、「環境を考慮した学校施設の整備推進」）を次々に発表した。そして現在、新しい教育のあり方として、９年間の継続した教育活動を行うことにより、「中一ギャップ」等の問題を解決するとともに、子ども一人一人への理解を深め、個性の伸長と指導の充実が見込まれる小中一貫教育が推進されている。また、にしみたか学園のコミュニティ・スクールを基盤とした小中一貫教育は、独自の方針により文部科学省で「三鷹方式」と呼ばれ、地域との共同や学力の保障等を促進するのに有効な汎用性のあるモデル校として全国的に認知されている。今後、地域との積極的な関係性や環境を配慮した学校設備等、新しい教育に対する学校建築のあり方を考え直す必要性があると考えられる。

2.3 地方と都市の教育格差

都市は、教育費全体に占める社会教育費の割合、社会教育関連職員数、社会教育施設数、公立図書館の蔵書数、社会教育事業数等の優位性が高く、地方との教育格差が生じている。また、地方では、東日本大震災を踏まえ、学校施設の津波対策や耐震対策、防災機能の確保、孤立集落対策など、速急な対応が求められる。

3．計画方針

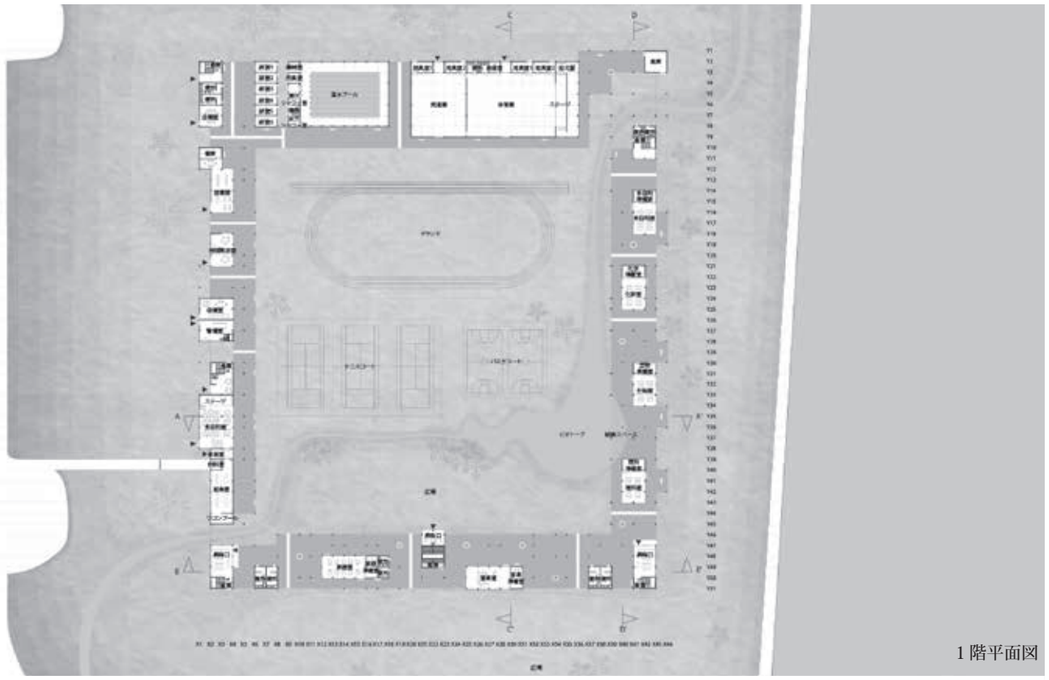
建替えが具体的に計画されている小方小・中学校をケーススタディとし、今後、小中一貫校の基盤になると期待される三鷹方式の教育ビジョンを取り入れる。地域の風土を活かした自然体験を通して子どもの教育や育成を推進するとともに、地域の交流拠点の場となる小中一貫校を計画する。

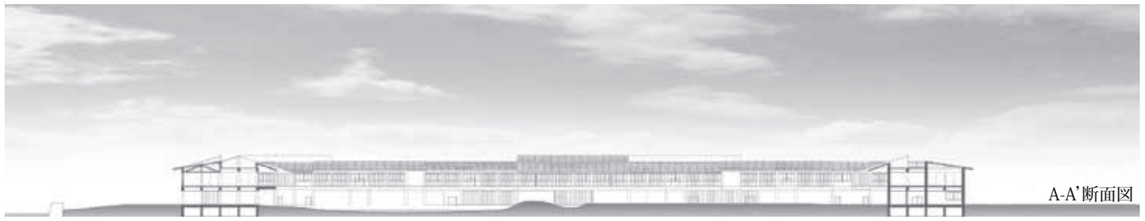
3.1 小中一貫教育校の施設一体型

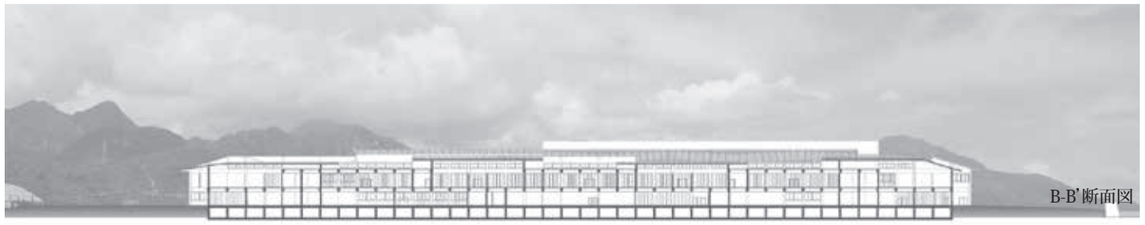
一体型の校舎とすることで、９年間を見通した教育により「中一ギャップ」への効果を図るとともに、異年齢集団間の交流で行われる体験学習等を通して人間性や社会性の育成を図ることを目的として計画を行う。

3.2 自然環境の積極的な利活用

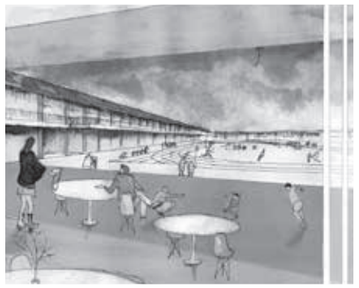
特定の教科等や学級での取組みを通じて、活動計画、評価計画等を持ち、持続的かつ系統的な教育活動としての役割を果たす。さらに、身近な自然を観察、体験する事で四季による生活、環境・生物の変化への興味・関心、意欲を向上することを目的として計画を行う。

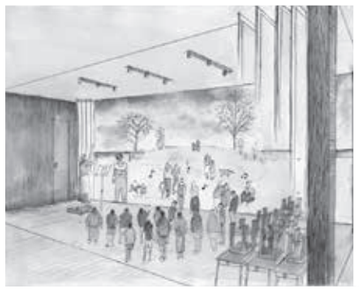

1階平面図


A-A'断面図


B-B'断面図

模型写真





パース

修士設計

名古屋市における基幹的広域防災拠点の提案
―啓発機能を有した複合施設の設計―

細谷祥太

1．計画概要

平成23年３月11日に発生した東日本大震災では，被災区域が東日本全域に及び、広域的防災対策の重要性を再認識させることとなった。

同年６月に公表された平成23年度版防災白書では今後の防災対策として、近い将来に切迫した東海地震、およびほぼ一定周期で発生している東南海・南海地震の三連動地震に対する取り組み強化と促進が掲げられるなど、これらへの懸念はさらに高まっている。わが国の経済を支える三大都市圏において、大地震に備える基幹的広域防災拠点の整備が未着手であるのは名古屋圏のみであり、早急な整備が急務である。

そこで本計画は、大地震への懸念が高まる名古屋圏において、啓発機能を有した複合型の基幹的広域防災拠点施設の提案・設計を行うものである。

2．計画方針

2.1 都市型の基幹的広域防災拠点として

防災拠点施設は、平常時から街に対して開き、市民に広く認知される場でなければ震災時の活躍は期待できない。本計画では、充実した都市機能・周辺環境との相乗効果や付随機能を導入し、普段から多くの市民に活用される場として施設提案を行うものとする。

2.2 市民の防災意識啓発への貢献

震災時は、普段からの市民の防災意識を高めることが被害を最小限に抑える原動力となることは過去の震災の教訓として残されている。本計画は、人々の防災意識の高まりに寄与する計画を行う。

2.3 防災に関する「知」の拠点

過去の大震災の経験と教訓、学術的な知見や蓄積された研究成果に基づき、わが国の防災上の課題を的確にとらえ、政府・地方自治体・コミュニティ・企業などの災害対策や防災政策の立案・推進に資する実践的な防災研究を行う場として計画する。また、防災に関する博物館的機能の充実を目的とする。

2.4 周辺環境との調和

防災施設の多くは、災害時の機能を重視することから周囲に対して閉鎖的な建築となる。しかし、本計画では日常的な市民の利用を促すため、周辺環境との調和も重視する。建築の圧迫感を抑え、スカイラインやファサード等の工夫を行い街に溶け込む計画とする。

3．基本計画

3.1 敷地選定

計画方針を踏まえ、計画地は名古屋駅より南方約１km に位置するささしまライブ24地区に選定する。

3.2 敷地特性

①津波の被害を受けにくい。
②周辺に広域避難場所が多数存在する。
③震災時の緊急物資の輸送ルートとして期待されている中川運河終点の船だまりに面している。名古屋市では貴重で広大な水面であり、有効利用が可能である。
④名古屋駅から徒歩約10分圏内に位置する。
⑤半径２km 圏内の人口密度が名古屋市を上回っている。
⑥三方を鉄道、高速道路に囲まれ、人々に認知され易い場所である。
⑦住宅や教育機関、集客施設が近接している。

3.3 導入機能・規模計画

首都圏、および京阪神圏における基幹的広域防災拠点の整備資料、防災関連施設の事例などを参考に導入施設および、その規模算定を行った。

4．建築計画

4.1 設計方針

【施設機能の複合】主要４機能を複合させた防災拠点とし、相乗効果による発災時の対応力向上、平常時の施設間連携による防災啓発機能の充実を図る。

【広場との融合】建築の平面形が多様な折れ曲がることで、建築と外部との間に大小さまざまな溜まりを生まれる。これらが多目的な広場として機能し、平常時は市民活動や防災学習、訓練の場の中心として、発災時は応急復旧活動の場の中心として活躍する。

【空中へと建築を持ち上げること】防災拠点施設と都市公園とを重ね合わせ、１階のピロティー下を市民が自由に回遊できる空間とすることで、防災拠点としての活動が市民へと伝わることを意図した計画とする。

【津波対策による安全性の確保】名古屋市を大地震が襲った場合、最悪のケースで約50cm の津波が到達する。ピロティーは津波対策としても有効である。

4.2 配置計画

計画地は性格の異なる３つの地域に面しており、これらとの相乗効果を生み出すための施設全体の配置計画を行った。

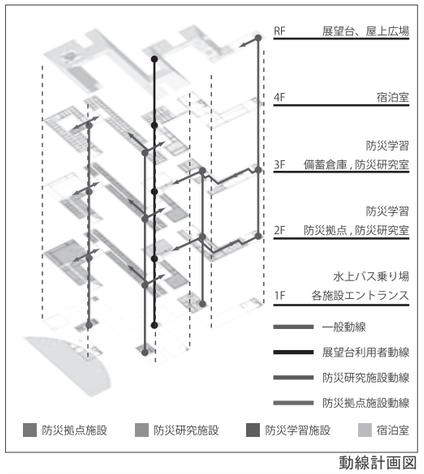
【防災拠点施設】発災時に本施設の核となる防災拠点施設は、計画地西側のヘリポート・緊急輸送ルートとなる船だまりに面するように配置した。

【防災学習施設】平常時、市民利用の中心となる防災学習施設へのアクセスは駅に最も近い北西側とし、展示資料の搬入口は車でのアクセスが良好な北側とした。

【防災研究施設】研究施設は発災時には防災拠点と、平常時には防災学習施設と円滑な連携を図れるように、それぞれに隣接した配置とした。

【宿泊施設】他施設に股がるように最上階に配置し、各施設との関わりを高めた。

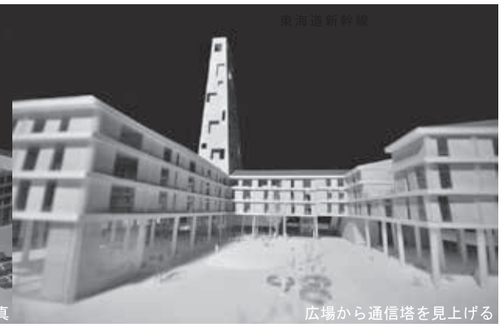
【多目的広場】メインとなる広場は、人で賑わいのある北東側とし、既存施設のライブハウスや商業施設との連携を図った野外イベント等を開催する。

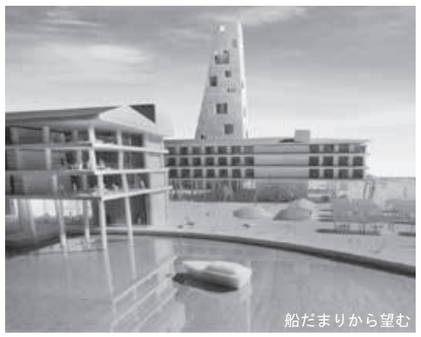


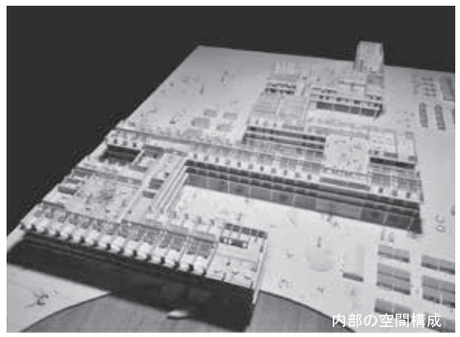
動線計画図

配置図

全体模型写真

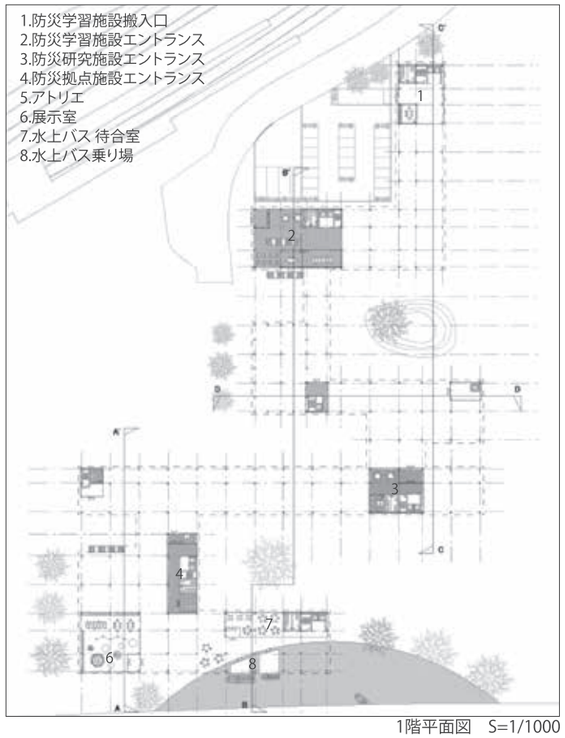

広場から通信塔を見上げる


船だまりから望む

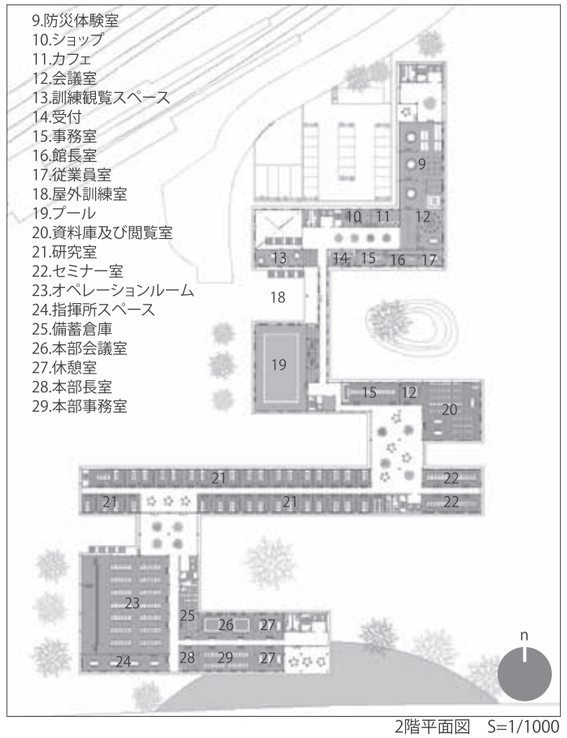

内部の空間構成

防災訓練

野外ライブ会場



1階平面図　S=1/1000



2階平面図　S=1/1000

南側立面図　S=1/2000

B-B'断面図　S=1/2000

西側立面図　S=1/2000

C-C'断面図　S=1/2000

1.展望台
2.通信塔
3.大教室
4.実習室
5.エントランスホール
6.訓練観覧スペース
7.警備員室
8.宿泊室
9.プール
10.研究室
11.本部会議室
12.本部事務室
13.自家発電室
14.ロッカー室
15.水上バス待合室
16.水上バス乗り場
17.セミナー室
18.食堂
19.資料庫及び閲覧室
20.防災シアター
21.従業員室
22.会議室
23.展示室
24.災害体験室
25.避難体験室
26.被災体験室
27.屋上広場

■コンペ受賞歴一覧

日本一 27作品（卒業設計 17作品、建築学会コンペ　1作品、その他のコンペ　9作品）
日本二 20作品（卒業設計　1作品、建築学会コンペ　4作品、その他のコンペ 15作品）
日本三 12作品（卒業設計　1作品、建築学会コンペ　5作品、その他のコンペ　6作品）
その他受賞数 234作品

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
昭和52年	●第10回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／石渡孝夫（建築学科海洋コース） 日本一		
53	●第11回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／富田善弘（建築学科海洋コース） 日本一		
54	●第12回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／小林直明（建築学科海洋コース） 日本一		
56	●第14回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／吉本宏 日本一 ・同入選／松木康治		
57	●第15回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／稲村健一 日本一	●「地場産業振興のための拠点施設」 ・支部入選／鈴木洋一	
58	●第16回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／遠藤卓郎 日本一 ○㈳日本港湾協会主催マリノポリス計画コンテスト ・優秀特別賞／川口利之	●「国際学生交流センター」 ・全国入選佳作／稲村健一 ・支部入選／大久保豪、杉田祐之、花岡豊、星野博史	
59	○第17回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／稲村健一		●第11回日新工業設計競技「ノアの箱船」 ・３等／遠藤卓郎、岩崎博一 日本三 ● R.I.B.A 英国王立建築家協会国際学生デザインコンペ ・入賞／中村耕史、秋江康弘、稲村健一 ●第19回セントラル硝子国際設計競技「グラスタワー」 ・佳作／秋江康弘 ●三井ホーム住宅設計競技「２×４による新しい住まい」 ・佳作／川口利之、菅沼徹、筒井毅 ●桜門建築会第１回学生設計コンクール「建築学生交流センター」 ・佳作／稲村健一
60	●第18回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／富田誠	●「商店街における地域のアゴラ」 ・全国入選３等／藤沢伸佳、柳泰彦、林和樹 日本三	● A.I.A アメリカ建築家協会国際学生コンペ ・２等／秋江康弘 日本二
61	●第19回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／小野正人	●「外国に建てる日本文化センター」 ・全国入選３等／小林達也、佐藤信治、小川克巳 日本三 ・支部入選／渋谷文幸 ・支部入選／林和樹、鵜飼聡（建築）、高橋義弘（建築）	●桜門建築会第２回学生設計コンクール「桜門校友クラブ」 ・１等／山崎淳一、松尾茂 ・佳作／小林達也、佐藤信治 ●第６回ホクストン建築装飾デザインコンクール「まちなかの公共トイレ」 ・佳作／小林達也
62	●第20回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／海老澤克	●「建築博物館」 ・支部入選／松尾茂、横堀士郎、石川仁、鳥海清二（建築） ・支部入選／小野正人、小沢一実、渡邊俊幸	●ミサワホーム住宅設計競技 ・入選／小林達也
63	●千葉県建築三会学生賞 ・銅賞／近藤陽次 地域三 ・奨励賞／毎見究	●「わが町のウォーターフロント」 ・全国入選１等／新間英一、橋本樹宜、丹羽雄一（建築）、毛見究、草薙茂雄 日本一 ・全国入選佳作／園部智英、石川和浩、原田圧一郎 ・支部入選／松尾茂、山本和清 ・支部入選／岩川卓也	●’88膜構造デザインコンペ ・佳作／山口明彦 ●第２回千葉ふるさと住宅設計コンクール ・佳作／川村佳之 ●桜門建築会第３回学生設計コンクール「ゲストハウス」 ・１等／山口明彦、原利明（建築）、渡辺一雄（建築） ・２等／加藤麻生 ・３等／飯田隆弘、丹羽雄一（建築）、有馬哲也（建築） ・佳作／小堀泰毅、伊藤剛 ・佳作／長谷川晃三郎、佐久間明
平成１年	●第22回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／長谷川晃三郎 日本一 ・入選／佐久間明 ●千葉県建築三会学生賞 ・金賞／佐久間明 地域一 ・奨励賞／長谷川晃三郎	●「ふるさとの芸能空間」 ・全国入選２等／新間英一、長谷川晃三郎、佐久間明、岡里潤 日本一 ・全国入選３等／丹羽雄一（建築）、益田勝郎 日本三	●石川県建築士会設計競技「垂直複合体」 ・１等／矢野一志、佐藤教明、菊池貴紀、廣川雅樹、安田友彦、鈴木宏佑 日本一 ●第１回横浜アーバンデザイン国際コンペ ・選外入選／長谷川晃三郎 ●第３回千葉ふるさと住宅設計コンクール「安全で魅力ある三世代住宅」 ・入選／山本和清
2	●第23回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／山口哲也 ●千葉県建築四会学生賞 ・金賞／矢野一志 地域一 ・銅賞／山口哲也 地域三	●「交流の場としてのわが駅わが駅前」 ・全国入選２等／植竹和弘、根岸延行（建築）、中西邦弘（建築） 日本一 ・全国入選３等／飯田隆弘、佐藤教明、山口哲也 日本三	●石川県建築士会設計競技「海に浮かぶ市場」 ・３等／川久保智康、野沢良太 日本三 ●第２回横浜アーバンデザイン国際コンペ「ウォーターフロントの再生に向けて」 ・佳作／矢野一志、佐藤教明、大坪一之、屋田直樹、佐藤滋晃、菊池貴紀、菅野聡明、門脇桂子、馬場昭光 ● BAY’90デザインコンペ（BAY’90開催記念学生建築設計競技） ・優秀賞／佐久間明 日本一 ・佳作／益田勝郎

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
平成２年			●桜門建築会第４回学生設計コンクール「建築家ギャラリー」 ・２等／岡里潤、寺尾浩康、馬場昭光 ・佳作／植竹和弘、白石充、根岸延行（建築） ・佳作／山口哲也、佐藤教明 ・佳作／広部剛司、佐藤岳志、菅浩康 ●第10回ホクストン建築装飾デザインコンペ「都市公園に建つフォーリー」 ・佳作／武田和之、岡里潤
3	●第24回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／高橋武志 日本一 ●千葉県建築三会学生賞 ・金賞／高橋武志 地域一 ・奨励賞／廣川雅樹	●「都市の森」 ・１部全国入選２等／山口哲也、河本憲一、廣川雅樹、日下部仁志、伊藤康史、高橋武志 日本一 ・２部全国入選最優秀／片桐岳志 ・２部支部入選／布川亨、八代国彦（建築）、堤秀樹	● JIA オープンデザインコンペ「都市の解体と再構築」 ・１等／佐藤教明、山口哲也、木口英俊 日本一 ・佳作／川久保智康、野沢良太 ●’91メンブレインデザインコンペ「アーバンピルとメンブレイン」 ・最優秀賞／河本憲一、石井昭博、関戸浩二、福田昌弘 日本一 ●第２回長谷工イメージデザインコンペ「現代の夢殿」 ・入選／川添隆史、渡辺千香子 ●第18回日新工業建築設計競技「都市空間の再生計画」 ・入選／川久保智康、野沢良太、花沢真哉、高山一頼、伊藤裕、森泉尚之、額村康博、布川亨、八代国彦（建築） ●第３回タキロンデザインコンペ「時代の風をはらむ都市装置」 ・３等／降旗恭子、黒田佳代 日本三 ・入選／木口英俊 ●第５回千葉ふるさと住宅設計コンクール「共働き家族のための住宅」 ・奨励賞／川添隆史 ●第２回学生のためのフレッシュデザインコンペ ・フレッシュデザイン賞／木口英俊、渡辺昇 ● 1991第１回 BUFF 国際建築デザインコンペ「東京の住まい」 ・佳作／佐藤教明
4	●第25回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／片桐岳志 日本一 ・入選／寶田陵 ●千葉県建築三会学生賞 ・金賞／片桐岳志 地域一 ・銅賞／寶田陵 地域二 ●東京ガス・銀座ポケットパーク「卒業設計制作展」 第10回記念『1993卒業設計制作大賞』 ・金賞／寶田陵 日本一 ・銅賞／片桐岳志 日本三	●「わが町のタウンカレッジをつくる」 ・１部全国入選３等／佐藤教明、木口英俊 日本三 ・１部全国入選佳作／廣川雅樹、寶田陵 ・１部支部入選／山口哲也、河本憲一 ・１部支部入選／木口英俊、高橋武志 ・２部支部入選／関谷和則、石渡義隆 ・２部支部入選／平崎彰、望月喜之	●盛岡・水辺のデザイン大賞 ・専門部門佳作／佐藤信治、河本憲一、廣川雅樹、伊藤康史、日下部仁志、高橋武志、伊藤賢 ●奈良・TOTO 世界建築トリエンナーレ ・佳作／川久保智康、野沢良太、永島元秀 ●’92メンブレインデザインコンペ「オートキャンプ場」 ・２等／片桐岳志 日本一 ・佳作／高橋武志、関戸浩二 ●桜門建築会第５回学生設計コンクール「わがヒーローとの出会い」 ・２等／片桐岳志、岡田和紀 ●アーキテクチュア・フェア KOBE 学生設計競技「神戸・学園東地域福祉センター」 ・佳作／吉田幸正 ●川鉄デザインコンペ’92 ・佳作／三輪政幸 ●第３回学生のためのフレッシュデザインコンペ ・フレッシュデザイン賞／佐藤教明 ●第19回日新工業建築設計競技「記憶の住む家」 ・佳作／野沢良太 ● 1992第２回 BUFF 国際建築デザインコンペ「東京屋台空間」 ・佳作／竹内大介、高山一頼、宍倉尚行 ● DYNAX 第２回建築学生・設計大賞’92「〈太陽・月・炎〉の家」 ・奨励賞／竹内大介、高山一頼、宍倉尚行 ・奨励賞／石井昭博、寶田陵、西上順久 ●第４回タキロン国際デザインコンペ「風の道・水の道」 ・３等／山口哲也、川久保智康、木口英俊、永島元秀、布川亨 日本三 ・３等／高橋武志、石井昭博 日本三 ● 1992新建築住宅設計競技「スタイルのない住宅」 ・佳作／川久保智康、高山一頼 ●「（仮称）中原中也記念館公開設計競技」 ・佳作／山口哲也、木口英俊
5	●第26回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・洋々賞／吉田幸正 日本一 ・入選／関谷和則 ●千葉県建築三会学生賞 ・金賞／関谷和則 地域一 ・銀賞／吉田幸正 地域二	●「川のある風景」 ・１部全国入選佳作／片桐岳志、小野和幸 ・１部支部入選／石井昭博、林正輝、福田昌弘、山口泰永 ・２部全国入選佳作／橋本廉太郎、神蔵良隆、藤生利道 ・２部全国入選佳作／関谷和則、三輪政幸	●石川県建築士会設計競技「21世紀の公園」 ・佳作／片桐岳志 ●第４回長谷工イメージデザインコンペ「現代のさや堂」 ・入選／片桐岳志 ● JIA 東海・北陸支部第10回設計競技「磐座～いわくら～」 ・銀賞／田中宏、岡田和紀、澤田憲子、倉川友紀 日本一 ・佳作／岡田和紀、田中宏、澤田憲子、倉川友紀 ●新知的生産環境1993 デザインコンペティション「グループによる新しい知的生産環境の在り方」 ・優秀賞／小野和幸 日本二 ●第４回学生のためのフレッシュデザインコンペ ・フレッシュデザイン賞／岡田和紀、田中宏、木口英俊、川久保智康
6	●第27回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／清水信友 ・入選／戸國義直 ●千葉県建築三会学生賞 ・金賞／清水信友 地域一	●「21世紀の集住体」 ・１部支部入選／小野和幸、田村裕彦、高野勇治（建築）、國武陽一郎（建築）	●まちづくりコンクール’94「都市を水からデザイン」 ・優秀賞／関谷和則、石渡義隆、館吉保 日本一 ・佳作／田村裕彦、岡田和紀、小野和幸、鳥居延行 ・特別賞／井上真樹、馬渕晃

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
平成６年			●桜門建築会第６回学生設計コンクール「磯野家のすまい」 ・優秀賞／小野和幸、井上真樹、小山貴雄 ●川鉄デザインコンペ '94 ・学生大賞／関谷和則、石渡義隆、館吉保 日本一 ●小山市城東地区街角広場デザインコンペ ・佳作／坪山幸王、佐藤信治、石井昭博、林正輝、福田昌弘、石渡義隆、関谷和則、館吉保、清水信友 ●新知的生産環境1994デザインコンペティション「高齢者のための新しい知的生産環境の在り方」 ・入賞／小野和幸 ●第１回 ARCASIA 学生賞1994「永続性ある発展を目指した都市居住と住宅改革」 ・優秀賞／小野和幸、高野勇治（建築）岡田和紀、山越寧（建築） 日本一
7	●第28回毎日･DAS 学生デザイン賞 ・入選／田村裕彦 ●千葉県建築四会学生賞 ・銅賞／浦野雄一 地域三 ・奨励賞／田中厚三	●「テンポラリー・ハウジング」 ・１部支部入選／清水信友	● JIA 東海支部第12回建築設計競技「紙～紙で街に仕掛ける～」 ・銀賞／井上真樹、馬渕晃 日本二 ●第９回千葉ふるさと住宅設計競技「ライフサイクルを見据えた安全で快適な住まい」 ・奨励賞／田中厚三 ●第５回 BUFF 国際建築デザインコンペ「東京水空間」 ・選外優秀作品賞／広瀬倫恒 ●世界の民族人形博物館国際学生アイディアコンペ ・佳作／梶原崇宏、村松保洋 ●第３回札幌国際デザイン賞「雪の生活文化」 ・佳作／馬渕晃 ●第６回学生のためのフレッシュデザインコンペ ・作品展示／下平将也 ・作品展示／川崎拓二
8	●第29回毎日･DAS 学生デザイン賞 ・入選／富永恒太 ●千葉県建築四会学生賞 ・銀賞／中村武晃 地域二 ・奨励賞／小川太士		●石川県建築士会設計競技「インテリジェンスファクトリー」 ・選外優秀作品賞／小山貴雄 ●第10回千葉県街並み景観賞 ・準特選／鳥居延行 地域二 ●桜門建築会第７回学生設計コンクール「キャンパスコア」 ・キャンパス賞／田中厚三、松元理恵 ●第10回千葉県ふるさと住宅設計競技「増改築を考慮したロングライフの住宅」 ・奨励賞／田中厚三 ●第10回建築環境デザインコンペティション「東京湾内のエコシティー」 ・佳作／小山貴雄 ●第２回九州デザインコンペティション「バリアフリーデザイン」 ・協賛企業賞／小山貴雄、田中厚三、安藤亮、北田紀子、峰村亮（生産建築） ●第６回優しい食空間コンテスト「食空間デザイン」 ・入選／馬渕晃 ●第９回ゆとりある住まいコンテスト「住まいの収納」 ・１等／田中厚三 日本一 ●'97 GREEN DESIGNING IN YAMAGATA「地球環境にやさしいデザイン」 ・奨励賞／馬渕晃
9	●第30回毎日･DAS 学生デザイン賞 ・入選／市原裕之 ・入選／針生康 ●千葉県建築四会学生賞 ・奨励賞／市原裕之 ・奨励賞／針生康	●「21世紀の学校」 ・１部全国入選２等／村松保洋、渡辺泰夫 日本二	●石川県建築士会設計競技「ヒーリング･プレイス」 ・優秀賞／富永恒太 日本二 ●第８回学生のためのフレッシュデザインコンペ ・作品展示／宮下新 ・作品展示／佐藤洋、木村太輔、村松可奈子、北田紀子 ●桜門建築会三学部建築学生交流フォーラム ・審査員特別賞／長井厚、田中啓一、寺内学、関香織、村田昌彦 ●運輸省「みんなでつくろう海洋国日本　未来のアイディア大募集」 ・学校部門　フロンティア賞／鳥居延行、若山喜信、金田岩光 ●日本大学理工学部建築学科「TEMPORARY SPACE COMPETITION(DOME COMPE)」 ・優秀賞／石川阿弥子、大野貴司、桶川嘉子、山田博栄 ●第５回秀光学生コンペティション　新知的生産環境1997「挑戦するオフィス」 ・入賞／富永恒太 ●東京建築士会第33回建築設計競技「コミュニティコアとしての小学校の再生」 ・佳作／佐藤信治、市原裕之、田中克典、長井厚
10	●第31回毎日･DAS 学生デザイン賞 ・入選／大野貴司 ●千葉県建築四会学生賞 ・金賞／大野貴司 地域一		●第４回北陸の家づくりコンペ「環境共生住宅」 ・最優秀賞／田中克典 日本一 ・優秀賞／長井厚 日本二 ●第２回太陽電池を用いた創造的構築物「太陽の恵みと建築との調和」 ・奨励賞／市原裕之 ●壁装材料協会主催「第６回 明日のインテリア･アイディア･コンクール」 ・会員企業賞／伊藤昌明
11	●千葉県建築四会学生賞 ・銀賞／寺田健 地域二 ・特別賞／江橋亜希子		●第５回北陸の家づくり設計コンペ「60年住む家」 ・優秀賞／塙貴宏 日本二
12	●第33回毎日･DAS 学生デザイン賞 ・入選／渡邊昌也		

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
平成12年	●千葉県建築四会学生賞 ・奨励賞／原香菜子 ・奨励賞／渡邊昌也	●「新世紀の田園居住」 ・タジマ奨励賞／青山純、岡田俊博、岡部敏明、木村輝之、斉藤洋平、重松研二、秦野浩司	
13	●第34回毎日･DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／秦野浩司 日本一 ●千葉県建築四会学生賞 ・奨励賞／秦野浩司 ・奨励賞／木村輝之	●「子どもの居場所」 ・関東支部入選／齋藤洋平、木村輝之	●㈱都市開発技術サービス「坪井地区を対象としたエコ・テクノロジーの活用によるまちづくり計画の提案」 ・優秀賞／山端俊也 日本二 ・佳作／大工原洋充、舟岡徳朗 ●㈳東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／羽根田治
14	●第35回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／丸山貴広 ・入選／山下忠相 ●千葉県建築四会学生賞 ・奨励賞／栗田耕史 ・奨励賞／長坂悠司		●第２回仏壇デザインコンペティション2002　森正 ・審査員長特別賞／鷲淵正憲、渡邊昌也、伊藤麻也、坂元晋介 ●福山大学建築会デザインコンペティション2002 ・佳作／白砂孝洋 ●㈳東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／清水大地 ●第８回飛騨･高山学生家具デザイン大賞 ・入選／丸山貴広
15	●第36回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／川崎未来生 ●千葉県建築四会学生賞 ・奨励賞／川崎未来生 ・奨励賞／白砂孝洋		●新建築住宅設計競技2003 ・２等／川崎未来生 日本二 ●福山大学建築会デザインコンペティション2003 ・金賞／片桐雄歩 日本一 ・入選／白砂孝洋 ●㈳東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／中村智裕
16	●第37回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／永嶋順一 ・入選／佐藤俊介 ●千葉県建築四会学生賞 ・特別賞／稲垣直秀 ・奨励賞／勝又洋	●「建築の転生・都市の転生」 ・全国入選佳作／丸山貴広、鈴木貴之、塚本哲也、長坂悠司、吉田健一郎 ・東海支部入選／土井涼恵、内田真紀子	●福山大学建築会デザインコンペティション2004 ・佳作／土井涼恵 ・入賞／勝又洋 ・入賞／奥田祥吾 ・佳作／三村舞、勝間田洋子、望月菜生 ・佳作／渡辺秀哉 ●㈳東京建築士会「住宅課題賞」 ・入賞／賀山雄一
17	●第38回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／鈴木啓史 ・入選／渡辺秀哉 ●第18回千葉県建築学生賞 ・優秀賞／渡辺秀哉 地域二 ・奨励賞／鈴木啓史 ○第４回 JIA 大学院修士設計展 ・出展／京野宏亮	●「風景の構想―建築をとおしての場所の発見」 ・関東支部入選／金子太亮、勝又洋、中村智裕	●９坪ハウスコンペ2005 ・佳作／金子太亮 ● TEPCOインターカレッジデザイン選手権 ・優秀賞／金子太亮、京野宏亮 日本二 ●福山大学建築会デザインコンペティション2005 ・入賞／桔川卓也 ・佳作／河原一也、信戸佑里 ●㈳東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／五十嵐大輔
18	●第39回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／桔川卓也 ●卒業設計日本一決定戦 ・日本三／桔川卓也 日本三 ●卒業設計裏日本一決定戦 ・裏日本一／桔川卓也 日本一 ●第19回千葉県建築学生賞 ・特別賞／河原一也 ・奨励賞／丹沢裕太 ●第30回学生設計優秀作品展 ・レモン賞／桔川卓也 ○第５回 JIA 大学院修士設計展 ・出展／勝又洋 ・出展／金子太亮	●「近代産業遺産を生かしたブラウンフィールドの再生」 ・関東支部入選／金子太亮、勝又洋、中村智裕 ・関東支部入選／鈴木啓史、三村舞、渡辺秀哉 ●「美しいまちをつくる　むらをつくる」 ・最優秀賞／渡辺秀哉 ・足立区長賞／鈴木啓史、三村舞、渡辺秀哉	● SMOKERS' STYLE COMPETITION 2006「パブリックスペースと分煙」 ・佳作／勝又洋 ● TEPCO インターカレッジデザイン選手権「現実を虚構化する住宅／虚構を現実化する住宅」 ・最優秀作／勝又洋 日本一 ●㈱ナムラコンチネンタルホーム事業本部・㈱日本住研 第３回住まいのデザインコンテスト「わたしが暮らす家」 ・優秀賞／勝又洋、金子太亮 日本二 ●㈳東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／島田かおり
19	●第40回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・入選／赤澤知也 ・入選／丸山大史 ●第20回千葉県建築学生賞 ・優秀賞／小松崎博敏 地域二 ・奨励賞／西村秀勇 ○第６回 JIA 大学院修士設計展 ・出展／三村舞		
20	●第41回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／椎橋亮 日本一 ●第21回千葉県建築学生賞 ・奨励賞／上條経伍 ・奨励賞／爲季仁		●木愛の会　第１回設計競技「新しい木の建築―魅了する木造都市へ―」 ・入賞／大西慧

年度	卒業設計(●)／修士設計(○)	建築学会コンペ	その他のコンペ
平成20年	●第32回学生設計優秀作品展 ・出展／椎橋亮 ●第49回全国大会･高専卒業設計展示会 ・出展／椎川恵太 ○第７回 JIA 大学院修士設計展 ・出展／五十嵐大輔		
21	●第42回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／細矢祥太 日本一 ・出展／下泉宏記 ●卒業設計日本一決定戦 ・100選／鴨志田航 ●第22回千葉県建築学生賞 ・市民賞／永田陽子 地域二 ・奨励賞／永田陽子 ・奨励賞／鴨志田航 ●第33回学生設計優秀作品展 ・出展／鴨志田航 ●第50回全国大会･高専卒業設計展示会 ・出展／細矢祥太 ●全国合同卒業設計展「卒、10」 ・７選入選／大西慧 ○第８回 JIA 大学院修士設計展 ・出展／小松崎博敏	●「アーバンフィッジクスの構想」 ・関東支部入選／鴨志田航、本多美月 ●「美しくまちをつくる　むらをつくる」 ・最優秀賞／朽木健二 地域一	●第１回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション「未来の住処をデザインする」 ・東京ガス SUMIKA 賞／細矢祥太、益山未樹 ・佳作／細矢祥太、益山未樹 ・佳作／椎橋亮 ●第７回「真の日本のすまい」 ・日本建築士会連合会会長賞／爲季仁、鈴木啓史 日本一 ●㈳東京建築士会「住宅課題賞」 ・入選／増田佳菜子
22	●㋐４３回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・最優秀賞「金の卵」賞／杉田陽平 日本一 ・入賞／松井創斗 ●㋐２３回千葉縣建築学生賞 ・㊝秀賞／杉田陽平 地域二 ・特別賞／松井創斗 ●JIA東海学生卆業設計コンクール2011 ・佳作／杉田陽平 ●赤レンガ卆業設計展2011 ・一般賞８位／杉山洋太 ● JIA 全国卆業設計コンクール2011 ・出展／松井創斗 ●㋐34回学生設計㊝秀做品展 ・出展／古明地雲母 ●全国大学・高専卆業設計展示會 ・出展／杉山洋太	●大きな自然に呼応する建築 ・関東支部入選／大西慧、菅原遼	●ハンサムプレゼンテーションコンペ2010 ・アーキテキタ賞 / 小川雅人 ●第６回「新・木造の家」設計コンペ ・優秀賞／嶋真史 ●第２回文化遺産防災アイデアコンペ ・佳作／爲季仁、平山雄基 ●第２回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション ・佳作／増田佳菜子、小山勇気 ●建築新人戦 ・100選／小山勇気 ●椅子のある風景 北の創作椅子展2010 ・入選／永田陽子、椎橋亮 ●ハンスグローエ ジャパン バスルーム デザインコンペ2010 ・佳作／椎橋亮、永田陽子
23	●第44回毎日・DAS 学生デザイン賞 ・建築部門賞／石原幹太 日本一 ・入賞／渡部亘 ●第24回千葉県建築学生賞 ・優秀賞／石原幹太 地域二 ・市民賞／石原幹太 地域二 ・奨励賞／渡部亘 ●赤レンガ卒業設計展2012 ・特別賞／石原幹太 ● JIA 全国卒業設計コンクール2012 ・出展／渡部亘 ●第35回学生設計優秀作品展 ・出展／井上彩花 ●卒業設計日本一決定戦2012 ・20選／菅原雅之 ・100選／渡部亘 ●全国合同卒業設計展「卒、12」 ・７選／菅原雅之 ● DIPLOMA 2012 ・学科代表掲載作品／菅原雅之 ●日本建築学会　建築デザイン発表会 ・部門優秀賞／菅原雅之 ・部門優秀賞／石原幹太 ● Vectorworks 教育支援プログラム OASIS ・優秀研究賞／菅原雅之 ● MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD 2012 ・都築響一賞／菅原雅之 日本一 ●全国大学・高専卒業設計展示会 ・出展／渡部亘		●第17回北陸の家づくり設計コンペ ・北日本新聞社賞／杉田陽平、菅原雅之、渡部亘 ●第３回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション ・佳作／渡部亘 ・佳作／涌井匠、海藤航、斉藤亮介 ●キルコス国際コンペティション ・満田衛資賞佳作／涌井匠、福田雄太